

## 特集：豊田市矢作川研究所 20 年の軌跡

# 1. 20 年の研究成果と今後に向けて

平成 25 年度 豊田市矢作川研究所 創立 20 周年記念シンポジウムの記録  
「流域を調べ、流域を変える —豊田市矢作川研究所の 20 年とこれから—」

平成 25 年度 豊田市矢作川研究所 創立 20 周年記念シンポジウム

「流域を調べ、流域を変える—豊田市矢作川研究所の 20 年とこれから—」

◆開催日時等 平成 26 年 2 月 1 日 (土) 13:00 ~ 17:00 JA あいち豊田ふれあいホール

◆基調報告 「豊田市矢作川研究所 20 年のあゆみとこれから」

報 告 者 / 豊田市矢作川研究所 研究員

◆座談会 「矢作川流域と研究所の未来を語ろう！」

パネリスト / 大畑孝二 (豊田市自然観察の森)

/ 萱場祐一 (独立行政法人土木研究所)

/ 高橋勇夫 (たかはし河川生物調査事務所)

/ 新見克也 (矢作川天然アユ調査会)

/ 丹羽健司 (矢作川水系森林ボランティア協議会)

/ 裕さくら (矢作川「川会議」実行委員会)

/ 羽根博之 (豊田市役所社会部市民安全室)

/ 古川 彰 (関西学院大学・豊田市矢作川研究所顧問)

(50 音順)

進 行 役 / 宮田昌和 (豊田市矢作川研究所長)

紙面の都合により、基調報告と座談会の発言内容は、本誌編集委員会の責任においてその主旨を損なわない範囲で簡略化した。なお、報告に用いたスライドの一部は割愛した。

○司会 これより平成 25 年度豊田市矢作川研究所創立 20 周年記念シンポジウムを始めたいと思います。司会を務めます豊田市矢作川研究所の洲崎と申します。よろしくお願いたします。それでは、最初に豊田市長 太田稔彦より、開会のご挨拶を申し上げます。

○太田 豊田市長の太田でございます。矢作川研究所 20 周年、こうして大勢の皆様にお集まりいただきましてありがとうございます。もう 20 年も経つのかと思います。ご案内のとおり矢作川研究所は、豊田市役所の中にありながら、実に独特の動きをしている組織でございます。

今日もこの会場に入りまして、相変わらず矢作川研究所は自由だなという印象を強く持ちましたが、これはある意味矢作川研究所の強みです。是非このような形で自由に、良い意味で尖って、20 周年を契機に今後さらに活躍して欲しいと、組織の長として思っております。

先日、久しぶりに豊田スタジアムのレストラン「ヴェルデロッソ」に行きました。日中でしたが、そこから外を眺めましたら、本日は裕さんがお越しですけれども、本当に景色が変わりましたね。あのよう矢作川を見ていると、矢作川河畔、公園、全体ですが、何かこう圧倒的な存在感といいますか、改めて矢作川の持つ力のようなものを感じました。忘れもしない平成 12 年 9 月の東海豪雨。平成 17 年 4 月の 7 市町村合併は、間違いなくあの東海豪雨が大きな引き金の一つであったと思います。その意味でも矢作川研究所がこの流域の中で多くの地域、多くの住民の皆さんを巻き込んで、こうして活動させていただいておりますことを心から感謝申し上げます。矢作川研究所は、今後とも頑張ってもらいますのでよろしくご理解、ご協力を賜りますことを心からお願い申し上げます。

ただ 1 点、矢作川研究所は、いろいろな活動をしている割に、情報発信が弱いのではないかというふうに、私

は思っておりますが皆さんはいかがでしょう。ああよくやっているよ、というふうにおっしゃっていただければ、こんなありがたいことはありませんけれども、当事者としては情報発信が弱いというふうに思っておりますので、これからはそこにも力を入れていきたいと思えます。

来年は実は豊田市が合併して 10 年目に当たります。この合併が私たちにとってどういう価値があったのか、あるいはこれから私たちの子や孫にとって、どういう価値が残していけるのか、ということ幅広く議論をしていきたいと思っております。この矢作川研究所につきましても、今日こうして記念事業をしていますけれども、来年度はそういう視点でも情報発信力を強めていきたいというふうに考えていますので、どうかご理解、ご協力を賜りますことを心からお願いを申し上げます。本日はお忙しいところ、お集まりいただきまして本当にありがとうございます。半日ではありますが、どうかよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。続いて、ご来賓の方からご挨拶を賜りたいと存じます。初めに衆議院議員 八木哲也様、お願ひいたします。

○八木 本日、20 年のあゆみとこれからということで、このように大勢の皆様がお出掛けの中で、こういう会ができたことに敬意と感謝を申し上げたいと思えますし、また 20 年間本当にかつこつと一歩一歩前進して、今の成果があるということをおもいました時に、そのご尽力に感謝申し上げたいという思いでいっぱいあります。矢作川の研究所であります、20 年前、その前からも実はこういう風土はこの豊田市にあったのではないかと、こんな思いがしてならないわけでありまして、といいますが、やはり豊田市は矢作川という大きな財産を昔から持っていたわけでありまして、そしてこの流域としての文化形成をしてきた、そんな思いがしています。そして 10 年前に、その流域の皆様方と一緒に合併をして豊田市は大きくなった。しかしながら、この財産が財産として、身近なものにあるかといったときに、なかなか肌で感じるような財産になってはいないのではないかと。それは、今を生きる私たちとして、もう少し責任を持たなければいけないのではないのかなという個人的な思いがしております。そういう中でボランティアの皆さんなど、いろいろな方々が川を愛していただき、そしてその河畔を愛していただく愛護会、そしてまた、今市長からもお

話ありました裕さんの NPO にいたしましても、やはりもう一度身近にこの川を愛でたいといひますか、親しみを持った川にしていきたいと。この努力に対して、また今後とも力を入れていただくことをお願ひ申し上げたいとこんな思いがしております。これが大きな財産だといひことがなかなかわからない。そして、川という水はいつも流れていたものですから、それが日常的にあったが故に、それを財産と思わなくなってきた。

少し話が変わりますが、矢作川からの豊田市の水利権はありません。今、豊田市の水道は、全て県水に頼っております。そして、自己水としておそらく約 20% から 30% ぐらいを地下水に頼っているだけなのです。したがって、自分のところに流れる川なのに、県から買っているという、その何といひますか、まどろっこしさがあるわけですね。せめて、これは自分たちの川なんだ、水利権はないかもわからないけど、これは僕らのものなんだという、意識改革をもう一度していかなければいけない時代に入ってきたのではないかと、こんな思いがしてなりません。こうしたことから、親水性のある川をどのようにつくっていくのか、ということも今後の研究材料としていただきたい。私も小さいころ、矢作川で泳がしていただき、川の怖さも知っておりますし、やはりその楽しさも知っているつもりです。そのころは良いとは思いませんけれども、大きな財産ですので、子供たちにその財産をどのように伝えていくのか、皆さんと一緒に考えて、私も微力ではありますが、研究所の発展にご尽力することをお約束申し上げまして、粗辞ではありますが、ご挨拶にさせていただきます。本日はおめでとうございました。ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。続きまして、国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所長 谷川知実様、お願ひいたします。

○谷川 本日は、太田市長それから八木先生のご臨席のもと、かくも盛大にこのシンポジウムが開催されますこと、まずお慶び申し上げます。このようなタイトルですと、河川管理者が主催しているかのようなのですが、実はそうではございませんので、さすが豊田市という思いでございます。豊田市、それから矢作川研究所の主催で、本日 20 周年を迎えるというシンポジウムでございますが、この河川に携わる調査研究を地道に地方自治体が取られるということも、かくも珍しいことと思っております。そういった取り組み、長年のご功

績に感謝、敬意を表したいと思っております。河川管理者もさぼっているわけではありませんが、いろいろ調査させていただいておまして、雨のデータ、水位のデータ、河川の動植物の調査とか、河川水辺の国勢調査という経年的に追っかけているのですけれども、そういったことをしていてもなかなか河川というのは生き物ですからよくわかりません。ですから、鋭意努力はしているところですが、それは一般的に全国の話。ところが、矢作川にはこの矢作川研究所というのがあります。やはり、河川というのは、得体の知れない生き物でありますので、地道に近場の方々から、温かい目でもって調査研究を続けていくということがとても大事だと思っております。私どもの河川事業の取り組み、例えば矢作川流域圏懇談会とかということもやっております。本日のパネル展示をされている方々にもたくさん協力させていただいておりますが、こういった中にある矢作川研究所というのは、力強いご参画をいただいております。河川管理者としてはとても助かっているというところではございます。

あと今年のテーマが流域ということでございまして、とても大事なキーワードだと思っております。なかなか聞き流してしまいそうですけど、実は大事なことです。河川管理者というのは、例えば河川だけ見てればいいというわけではなく、線だけじゃなくて、当然面で見えないといけないというふうに考えております。今年の夏、豊川で渇水が起りまして、幸か不幸か、水のありがたさ、水源地域の大事さを再認識しました。下流の人たちしてみると、普段は何もないですが、渇水になって初めてわかる水源地域のありがたさ、水のありがたさ。それから、水を利用している運命共同体という形になって、渇水対策をどうするのかということも、その流域一体で取り組んだということが強く印象に残っております。そういった意味で、流域というのは忘れがちですが、忘れてはいけないものだというふうに認識しております。洪水でもそうですね。例えば、上流の方であふれたとすると上流が苦勞するのですけれども、下流のほうは上流であふれたら下流はあふれないと、そういう構図になってしまいがちです。下流のほうは、そんなことをもし仮に忘れて、「最近洪水こないね」なんて言っているようではだめですね。やはり、それは流域としての一体感があって、運命共同体というモチベーション、心の一体感がないというふうに考えております。ですから、この研究所が、流域というテーマを取り上げて、線だけじゃなくて面で上下流バランスを見ながら、活動

エリアをどんどん広げていかれるということを大変期待申し上げます。豊田市も大きく広がっていますので、活動エリアもどんどん広がっていくと思いますので、とても楽しみにしております。

最後に雨について一言だけ申し上げたいのですけれども、先ほども申し上げましたように、豊川で渇水となったとき、愛知県の東のほうで渇水対策を一生懸命議論しているときに、名古屋では100ミリの豪雨が降って、地下街が浸水していたのです。同じ日に、この地域は一体どうなっているんだというぐらいですけれども、雨の降り方がやはり異常になっていると思います。降るときはどかどか降って、降らないときは降らない。それから、少し離れたところは降っているけども、また少し離れたところは降ってないとか、そういうことがあるような気象になっているということを確認させていただきたいと思えます。去年の夏も台風18号による出水がありました。矢作ダムというのは、もうできて43年ですから、15,000日ぐらいあります。昨年夏の雨ではその15,000日のうちで4番目に流入が多くなったということがありました。今年もどうなるかわかりません。そういった気象の異常に対しても、河川管理者としても事業を行いますし、皆様にもご認識をいただいて、対策を講じていただけたらと思います。本日のこの会が盛大に終わりますことを祈念いたしまして、後援者を代表しましてのご挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。本来なら、ご来賓の皆様よりお言葉をいただくのが本意でございまして、時間に限りがありますので、まことに恐縮ですが、お名前のみご紹介申し上げます。愛知県豊田加茂建設事務所河川整備課長 北原一郎様、矢作川水系八漁協連絡協議会代表 杉本重和様、豊田土地改良区理事枝下用水地区委員長 岩月幸雄様、本日はどうもありがとうございます。

さて、この後八木様ならびに太田市長は公務の予定がございまして、ここで退席いたしますことをご了承くださいますようお願い申し上げます。

講演に先立ちましてお知らせがございまして、講演の後に質疑応答の時間は設けておりません。ご質問、ご意見については、封筒の中の質問意見表にご記入いただき、休憩時間に受付までお持ちください。座談会の中で可能な範囲で取り上げさせていただきます。

## 基調報告



スライド 1

○司会 それでは、本日のプログラムに沿いまして、基調報告に移ります。「豊田市矢作川研究所 20年のあゆみとこれから」と題しまして、矢作川研究所7名の研究員により、研究所の20年の足跡をたどるとともに、今後の研究活動について展望いたします。それではよろしくをお願いします。

○問野 陸上動物全般の研究をしております問野です、よろしくをお願いします。スライド2は、矢作川流域と豊田市の位置を示したものです。日本のほぼ中央に位置し、長野岐阜愛知の3県を流れ、三河湾に注ぐ中規模の全国で35番目に長い川です。河口から34キロメートルから80キロメートルの範囲に農業、工業、上水道、発電用の7つのダムがあり、平均水利用率、つまり年間に流れる水の41%あまりを川の外で使うという、非常に酷使される川です。河川延長は118キロメートルで流域面積1,830平方キロメートル。流域の市町村は3県の13市町村にまたがっております。

この矢作川流域では、今日も多くの皆さんに、展示ご発表していただいておりますように、以前からさまざまな環境保全活動が行われています(スライド3)。古くは、大正時代にさかのぼって明治用水土地改良区による水源林造成が行われていますし、矢作川沿岸水質保全対策協議会(矢水協)では、水質汚濁防止条例に基づく全国で初の民間による摘発も行われています。また西広瀬小学校では、これまで38年にわたって毎日ですね、矢作川の透視度調査が行われています。そして、当研究所が設

立されたのが、今から20年前ということになります。



スライド 2

### 矢作川流域の環境保全活動史

- 1914 (T3) ~ 明治用水土地改良区による水源林造成
- 1969 (S44) 矢作川沿岸水質保全対策協議会(矢水協)設立 → 「矢作川方式」の定着
- 1976 (S51) ~ 西広瀬小学校による河川水透視度調査の開始
- 1987 (S62) 矢作川筏下り大会開始
- 1991 (H3) ~ 近自然工法の導入
- 1994 (H6) 豊田市矢作川研究所設立
- 1996 (H8) 豊田市水道水源保全基金創設
- 2012 (H24) 豊田市内の3湿地がラムサール条約湿地に

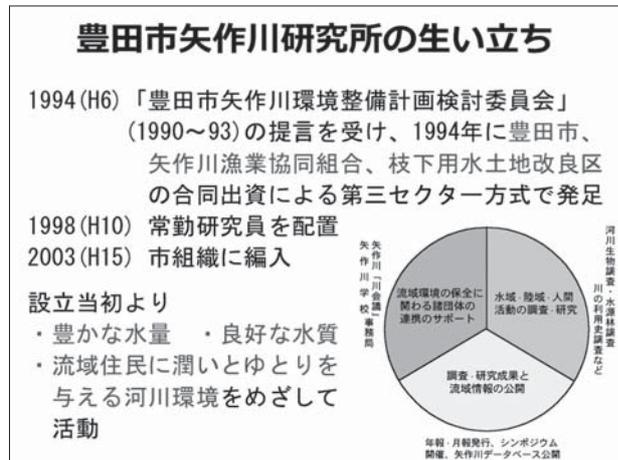


スライド 3

豊田市矢作川研究所は、環境整備計画検討委員会の提言を受けまして、豊田市、矢作川漁業協同組合、枝下用水土地改良区(現豊田土地改良区)により第3セクター方式で発足しました。1994年当初は、臨時の研究員と事務員、各1名でした。2003年に市の組織に編入されましたが、豊かな水量、良好な水質、流域住民に潤いとゆとりを与える河川環境を目指して、活動しています。現在、調査研究活動、それから、その研究成果と流域情報の公開、そして流域に関わる諸団体へのサポートなど行っています。2001年には矢作川宣言を採択して、矢作川川会議が結成されました。毎年5月第2土曜日を矢作川の日として、流域の関係の皆さんが集って、川づくりについて考える川会議は、現在18団体で構成されています。矢作川川会議が結成した翌年には矢作川学校が設立されました。河川、里山などの自然や文化を守り、

継承する、そんな子どもを育成するために、現在では一般の人たちも対象として、小中学校ほかコミュニティなどの総合学習などへの講師派遣、ミニシンポジウムの開催などを行っています。

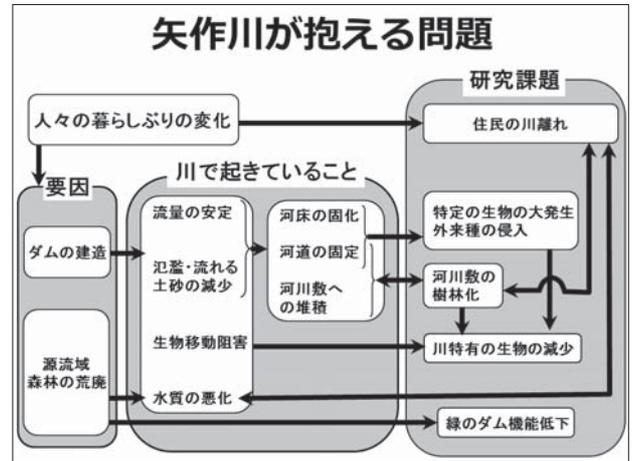
なくてはなりません。次からは、これらの研究課題について、研究所が実施してきました研究の一部について、簡単に触れていきたいと思います。



スライド4

さて、よく利用されている矢作川では、わずかな降雨の変動でも深刻な水不足になりやすいという特徴があります。特に上流部では地形が急峻なため水不足への対応はダムに頼らざるを得ず、水源林の保全とダムへの土砂流入防止が重要な課題でした。さらに市街地でも山間部でも自然豊かな川は、まちづくりの視点からも非常に重要であると位置づけられています。それらの観点からも化学的な手法を模索して矢作川の現状を調査研究し、自然豊かな矢作川保全の具体策を探求し、客観的な議論の材料を提供することが、私たち研究所創立時の使命となっております。

しかし、矢作川はかつて流域住民が飲み水や生活関連水として、直接川に行き、川を見て、そして利用していたわけですが、ダム建設や上水道の復旧などによって、暮らしぶりが変化をしてきました。それにともなって人々は、次第に川から離れ、川への関心が薄れて、川の変化にも気づかなくなってきたんですね。豊かな暮らしをもたらしたダムの建造や源流域の森林の荒廃は、残念ながら一方では流量の安定化、氾濫の減少に伴う河床や河道の固定化、そして特定の生物の大発生や外来種の侵入、河川敷の樹林化などの一原因となってまいりました。また、生物の移動障害や水質の悪化などとともに、川特有の生物の減少に繋がったと考えられます。これらの問題は、一連のつながりの結果生じてきたものです。スライド5にあるように、密接にいろいろなことが関連しているだろうと考えています。そういった問題点のひも解きを一つずつ行って、問題の解決ないしは提言をしてい



スライド5

### 〈アユと矢作川の生き物たち〉

○山本大輔 アメリカナマズという外来魚の調査を担当している山本大輔です。最初に川の中の水生生物や水質関連の話題について、ご報告していきます。

私からは研究課題のうち川特有の生物の減少 (スライド5) の面から、アユについてお話をさせていただきます。アユは、淡水魚というイメージをお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、1年という短い生涯の中で川と海とそれぞれの生活史を持つ回遊魚です。秋から冬にかけて産卵をして、その後孵化した仔魚 (アユの赤ちゃん) は海へと下っていきます。今の時期もそうですが、春ぐらまでの期間を海で過ごします。そして、翌春頃になると、また川に遡上してくる、そういう生活史を持っています。このように、川と海とそれぞれを経験するダイナミックな生活史を持っており、川の中では、石についた付着藻類というのを主に食べる独特な生態を持ち、あと友釣りだとかヤナという場で、多くの人に親しまれているアユというのは河川であるとか、先ほど頂戴したご挨拶にもありましたけれども、「流域」というものの姿を映し出す鏡、そういうふうに見えるかもしれません。

矢作川研究所においても、矢作川の一つの指標として、アユに対して調査研究を行っております。矢作川のアユについては、1996年から98年にかけて行われた生態調査によって、天然アユの生息上の課題といったものが明らかとなっております。それをもとに1999年に天然アユの保全のための対策といったものが出されています (ス

ライド6). ちなみにこちらのほうは、主に川における課題を示していますけれども、その後2005年には海域での保全対策というも出されています。

### アユに関わる16項目の保全対策

(河川版：1999年)

**短期的保全策**

1 明治用水への親アユの迷入防止	3 産卵場の造成
2 産卵期の保護	4 産卵親魚の放流
5 発電所温排水が仔アユへ与える影響の解明	6 温排水が遡上前の稚アユへ与える影響の解明
7 遡上期の密漁対策	8 魚道の改善
9 夏期のアユの生態解明	10 流域住民への啓蒙

**長期的保全策**

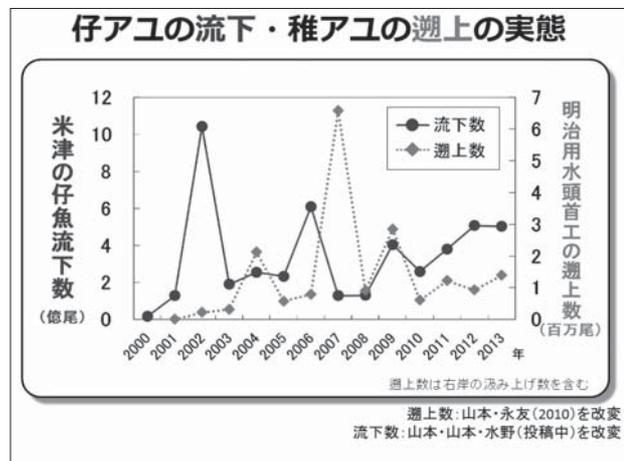
11 流量の確保	12 水質の保全
13 上流からの砂礫の供給確保	14 水位日変動の軽減
15 低水温化の実態把握	16 カワシオグサ・水草の異常繁茂の制御

スライド6

矢作川の天然アユの保全に対しては、漁業関係者にとどまらず、河川管理者ですとか、複数団体など、各保全対策の項目ごとにそれぞれの関係する機関で、実態の解明であるとか対策が取られています。保全対策の現状というものについては、およそ10年が経過した2011年、当研究所のシンポジウムにて課題の整理や報告が行われました。今日は時間の都合もありまして、詳しい説明を省かせていただきますけれども、改善だとかある程度の成果が見られたものがある一方で、今後続く重要な課題と位置づけられたものがあり、シンポジウムの中で議論が行われました。

さて、矢作川のアユといったものを理解していく上で、欠かせない存在が矢作川天然アユ調査会という団体になります。天然アユが豊富に釣れる川を復活させよう、そういう思いのもと、1996年に矢作川の釣り人を中心に設立され、年齢や職業などさまざまな方々が会員となって構成されています。先ほどご報告しましたアユの保全対策の事前調査から始まって現在に至るまで、矢作川研究所のさまざまな調査の実働部隊を担っていただいています。アユの生態調査では、春の遡上調査、初夏からは友釣りのシーズンになりますので、そのときには友釣りによる調査。また、秋から冬にかけては、アユの赤ちゃんが海へと下る、どれぐらいの数がいつの時期に下っているのだろうというような調査も行っています。また冬、今ぐらいの時期ですけれども、海域での調査もやっております。こういった調査は、これが本当にすごいことなんですけれども、実に10年以上にわたって、こういったデータが蓄積されています。

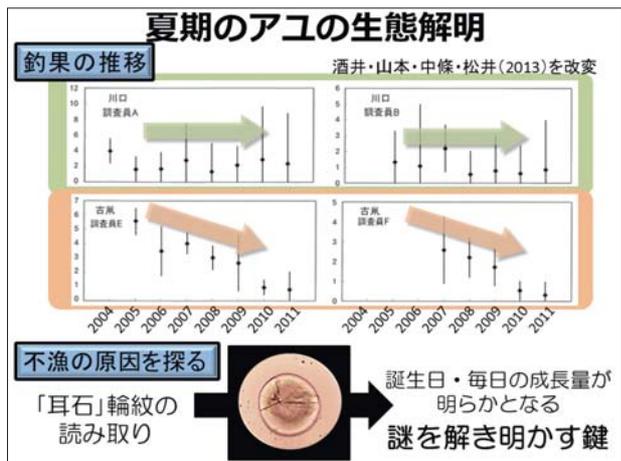
ここから、その長年の調査によって蓄積されたデータの一部をご簡単にご紹介します。丸で示したものが流下数、アユの赤ちゃんが海に下る数です。ひし形のほうが遡上数で、明治用水頭首工で遡上した魚の数の経年データになっています(スライド7)。近年の傾向を見ますと、流下数は約5億尾ぐらいいると、遡上数では100万尾ぐらいが遡上しているということになっています。最寄りの1級河川である豊川と比べてみますと、調査方法の違い等もあるので、一概には比較できませんが、矢作川のほうが川の規模は大きいのですが、豊川のほうが赤ちゃんの数は多いというようなことも、近年になって明らかになってきました。そして、長年の調査によって遡上のピークというのが明治用水頭首工では、ゴールデンウィークごろになることがわかっていて、さらにその5月の河川流量が多いと遡上数も多いというような傾向が見えます。一方で、アユの赤ちゃんのほうでは、大体10月から12月にかけて流下しているのですが、その最も多くなるピークが、夏から秋にかけての河川の平均流量が多くなるほどにその時期が早くなると、そういったこともわかってきています。どうやらアユの行動には、河川流量というのが関係しているようだ、ということがわかってきました。



スライド7

続いて、夏のアユでは、グラフ(スライド8)を見ると、ある調査地点での友釣りの調査の結果で、上段下段は別の調査地点です。左と右ではそれぞれ別の調査員が毎年調査をした釣果で、どれぐらい釣れたかというものです。長年のデータの蓄積によって、上段のように釣果が安定している地点と、下段のように低下を続けている地点があることが明らかになりました。それで、この釣れない原因というのが、一体何だろうかということですが、その一つとして釣り場とかアユの餌場を覆いつぶす

ような水草や藻の繁茂というのがあると考えられていて、後ほど報告があります。現在では、不漁の原因を探る一つの鍵として、耳石の解析というのを始めています。耳石というのは、アユの脳の下あたりにあるカルシウムなどでできた小さな塊なんですけれども、その断面が木の年輪のようになっています。これは会場内にも顕微鏡を展示していますので、後ほど見ていただきたいなと思います。アユでは、この輪が1日に1本形成されるため、アユの誕生日とか、1日1日の成長量というのを推測することができます。



スライド8

このようにアユの日々の暮らしを解き明かしていくことで、釣れない原因を探るとともに、新しい技術なども積極的に取り入れて、天然アユ資源の保全、そして未来の矢作川に向けて取り組んでいきたいと思っています。

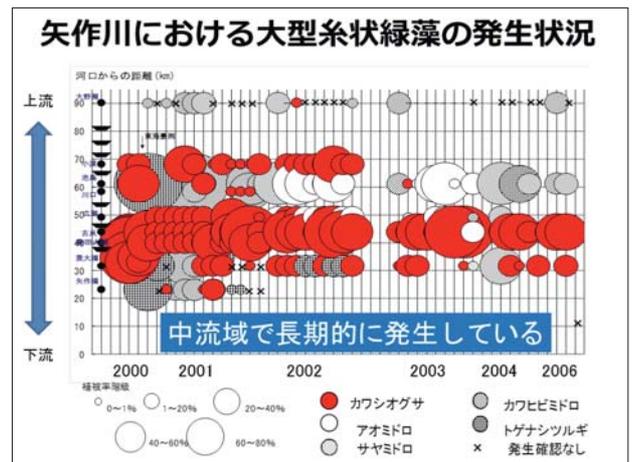
○内田 水生生物や今報告のありましたアユの餌である藻類を研究している、内田朝子です。アユの話に続きまして、矢作川の川底に目を向けていきます。

矢作川では、特定の生物の大発生、外来生物の侵入が相次いで起きています(スライド5)。年代を追って見ていきたいと思います。まず、カワシオグサです。本来、川底の石には目で見ることのできない非常に小さな藻類が繁茂しています。しかし、矢作川では目に見える大型で糸状の緑藻がしばしばたくさん繁茂します。矢作川中流域では、1980年代後半からカワシオグサという大型糸状緑藻が異常発生するようになりました。この藻は、写真(スライド9)に見るように3cmから5cmぐらいの長さに伸びます。顕微鏡で見るとこのようなサボテンのような形をしていることがわかります。このカワシオグサの発生実態を把握するために2000年から矢作川全域で調査を始めました。派手な色のウェットスーツで調

査を進めました。その結果を図(スライド10)にまとめました。横軸は2000年から2006年の時間軸を、縦軸は矢作川の上流(大野瀬)から矢作橋までを示しています。丸の大きさは、各調査地点の瀬で糸状緑藻がどれぐらいの割合を占めるか(覆っているか)ということを示しています。矢作川全域をこのように見てみますと、赤丸で示したカワシオグサ、これ以外に白丸のアオミドロ、また斜線で示したカワヒビミドロと、数種類があることがわかりました。この赤丸で示したカワシオグサは、中流特にダム直下の地点で長期にわたってたくさん生えることがわかりました。カワシオグサの経年変化を見ますと、初夏と秋にピークがあり、初夏のピークはアユの遡上の時期と重なるため、アユが釣れない原因になっているのではないかと疑われました。



スライド9



スライド10

次に大発生したのが、2004年に初めて確認された特定外来生物のカワヒバリガイです(スライド11)。この貝は、2~3cmの大きさで細長い形をしていて、糸を出して石に付着します。矢作川での寿命は、2~3年であることがわかりました。2005年から2006年に大発生

をしました。その時、このような発電所や農業用水の施設では、コンクリートの壁面にたくさんのカワヒバリガイが附着したので、通水障害が心配されました。また、矢作川の川底の石をひっくり返すとカワヒバリガイがびっしり附着していて、石の表側にはカワシオグサ、裏側にはカワヒバリガイという状況のものがたくさん見られました。これをその当時、くっつき病という名前で表現しました。また、この貝の赤ちゃんは、夏に生まれます。生まれてから10日間ぐらいは、水の流れがない、例えばダム湖内のようなところで、プランクトン生活をします。そこでカワヒバリガイの経年変化と夏の流量との関係から渇水の年、特に夏に渇水が起きた場合、赤ちゃん貝が流されるリスクが小さくなって、貝の付着率が高まり、翌年以降の生存率が高くなるのではないかと考えられました。



スライド 11

同じく特定外来生物のアメリカナマズは、2005年に矢作川で初めて確認されました。発見当初から矢作川水族館が積極的に調査を行い、現在は矢作川研究所が駆除に向けた生態調査を引き継いでいます（スライド12）。これまでの捕獲個体数の多さ、また深い場所で冬を越すという習性をもとに2012年に、本流をせき止めて水を抜き、かいぼりをおこないました。このかいぼり調査は、たくさんの方々の協力のもとに成り立ちましたが、このとき大きな成魚2尾を捕獲することができました。このかいぼりの調査については会場内にポスターで示しておりますので、ご覧いただきたいと思ひます。

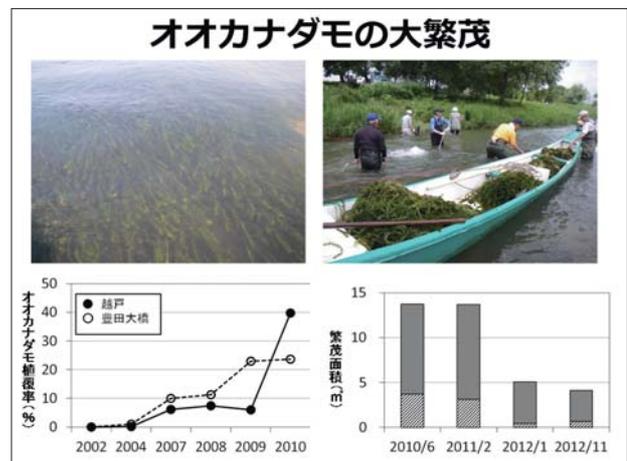
続きまして、オオカナダモという要注意外来生物の水草が繁茂しました。2008年ごろから著しく繁茂し、今では平戸橋から久澄橋までの区間に広がっています。スライド13左下の図をごらんください。越戸と豊田大橋におけるオオカナダモの植被率を空中写真から読み取っ

たもので、両地点とも2007年ぐらいから増え始め、2009年、2010年と一気に増えたことがわかりました。

右下の図（スライド13）は、繁茂面積の変化を2010年から2012年にかけて示しています。2012年の1月には半減しておりますが、これは、2011年夏に起きた出水の影響であると考えています。現在、研究所また関係する機関で駆除対策検討委員会を立ち上げています。その委員長には水草の専門家である神戸大学の角野先生についていただいています。私どもの調査研究とともに並行してNPO法人矢作川森林塾が中心となって、駆除活動も進めています。本会場に関連するポスターを示しておりますので、あとでごらんください。オオカナダモの繁茂が、矢作川の瀬で起こるとアユが釣れなくなる、アユの餌場なくなる。また、瀬に生息する水生昆虫が減って、生物の多様性が低下するという問題があることがわかっています。



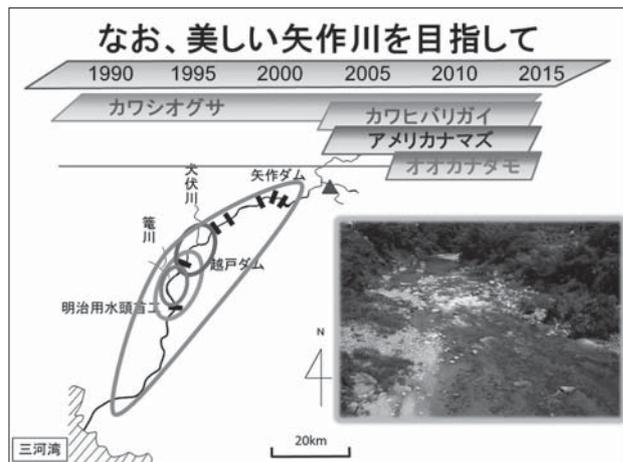
スライド 12



スライド 13

これまでの、生物の異常な大発生について少しまとめてみます。まず、1980年代後半から、カワシオグサが中流域を中心に繁茂しました。2004年には、カワヒバ

リガイが確認され、今では矢作ダムから米津橋までの区間に広がって分布しています。2005年にはアメリカナマズ、2008年にはオオカナダモが一気に増えてきました（スライド14）。これらの生き物の大発生の共通の要因として、川底の安定というものが考えられています。本来、川というのは、大きな出水や濁水というものがたびたび起きる場所で、水生動物にとっては、非常に過酷な環境とも言えます。しかし、在来の水生生物というのは、その過酷な環境のもとで、競争を長い年月繰り返して生き延びた種類で構成されているものです。この矢作川の中流域で増殖する外来生物を抑制して、本来の水生生物群集を取り戻す、つまり矢作川の自然再生が求められています。そのためには、矢作ダムより上流のこれらの異変の起きていない場所、例えばこの写真（スライド14右下）は、小田子というところですが、本来の矢作川の一つの姿を残しているであろう、こういった場所を参考にして調査を進めていくことが大事なのではと考えています。

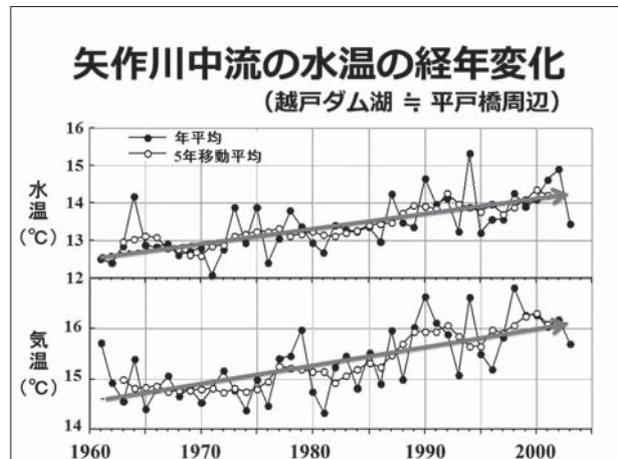


スライド14

私たち人間の健康の基本というのは、食生活にあります。矢作川の水生動物も矢作川に生える付着藻類の質と量によって支えられていると言えます。この付着藻類をめぐって、水生昆虫やアユなどが、食うか食われるかという関係で繋がっています。水生生物の生息環境というのは、底質や水質など物理化学的な要因の影響を受けています。生き物のつながりと流れる水の動きによって河川生態系が成り立っているわけですが、流域に暮らす人々に潤いのある矢作川にするために、今までの調査研究をもとに矢作川を再生する時代に入ってきたのではないかと思います。

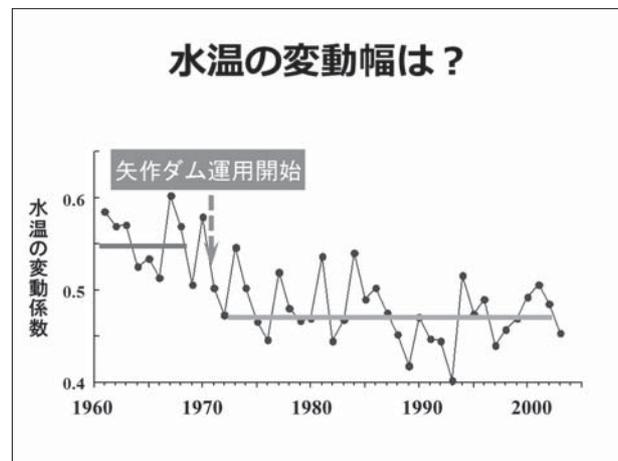
○白金 水質・水生生物を担当している白金晶子です。

続いて、水の中の生物にとってなくてはならない水の水温、流量、水質について、現地調査、既存データから分かったことをお話します。



スライド15

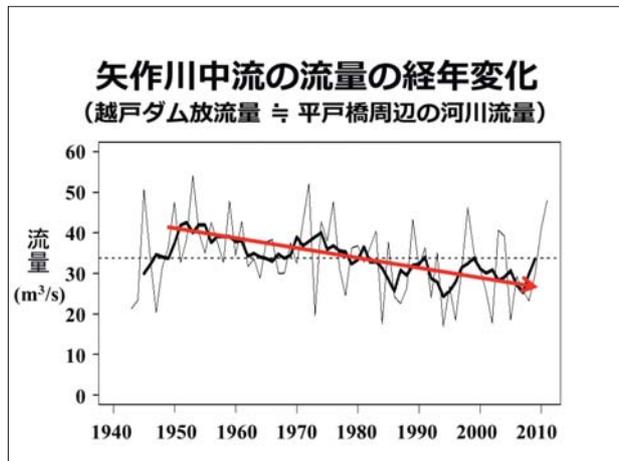
この図（スライド15）は矢作川中流、平戸橋あたりの水温度の経年変化を示したものです。水温は40年余りの間に約1.6℃上昇し、近隣で1960年代から観測されている名古屋の気温と同様の傾向が見られました。ちなみに、矢作川中流あたりの水温は1日の間に夏でも2℃程度しか変化しません。この1.6℃という変化は、水の中の生物にとって大きな影響をもたらしていると考えられます。続いて、同じデータについて水温の変動幅を表したのがこちらの図（スライド16）です。値が高いほど、水温が大きく変動していることになります。矢作ダムが1971年に運用が開始され、その後水温の変動幅が低くなっていることがわかりました。



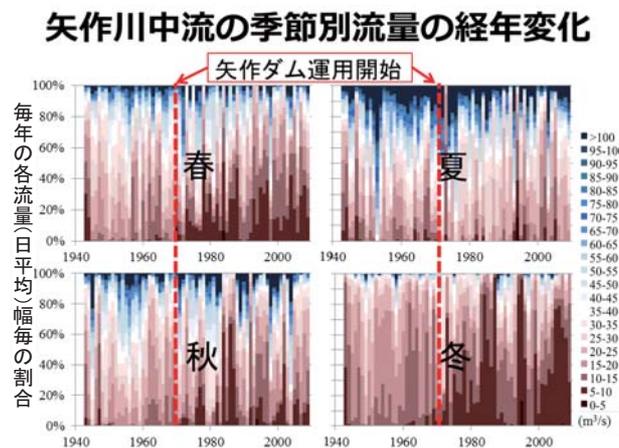
スライド16

次に、矢作川中流の同じく平戸橋あたりの流量についてです。1950年代に40m<sup>3</sup>/s前後であった流量は、2000年代には30m<sup>3</sup>/s前後に減少しました（スライド17）。

60 年余りの間に流量は約 25% 減少していることがわかりました。同じデータを季節別にしました（スライド 18）。青色が濃いほど流量が多い日を、赤色が濃いほど流量が少ない日を示しています。夏はこのように、青と赤の違いは経年的にはあまり見られませんが、矢作ダム運用開始以降は秋そして春、冬に大きく赤の割合が増えていることから、流量の少ない日が多くなっていることがわかりました。同じ期間の降水量を見てみますと、矢作ダムの運用開始前後で、どの季節についても降水量は有意な差が見られないのに対して、流量は春と冬で有意に減少しました。



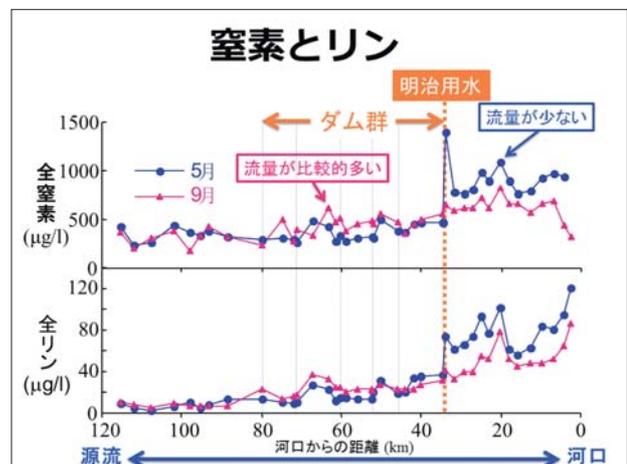
スライド 17



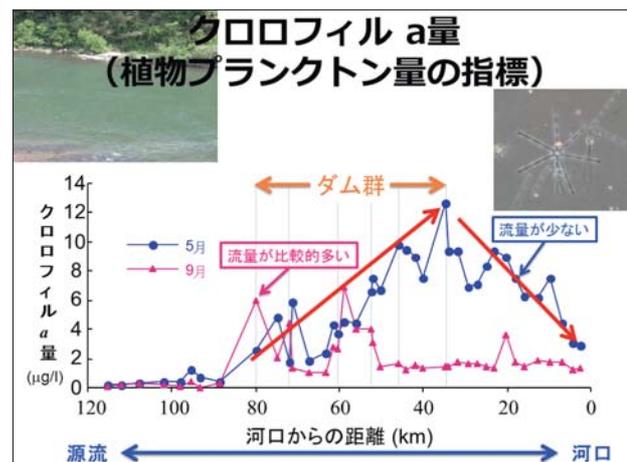
スライド 18

最後に矢作川の源流から河口までの水質変化について、現地調査を行った結果をお示しします。この調査は、矢作川源流の茶白山から、河口にかけて、本流 40 地点、支流 18 地点で行いました。スライド 19 に窒素とリンの変化について示しました。窒素とリンは水草や藻類などにとって無くてはならない栄養ですが、この量が多くなると水質が悪くなります。青色の丸は流量が少なかった時期（5月）を、ピンク色は流量が多かった9月のデー

タを示しています。そして、左から右に向って矢作川本流の源流から河口までの変化を示しています。水質は、源流から河口に向って徐々に悪くなっていることが分かりますが、特にこの明治用水頭首工前後で、大きく水質が変化しています。なぜこのような変化が起ったのでしょうか。これは、明治用水頭首工のダム湖において、水質がこの程度であったものが、農繁期の5月には多くの水がここで取水され、そしてダムの下流においては、安永川という都市河川が流入してきます。これによって、水質は3倍の濃度に上昇しました。そして、その下流では、山地河川の巴川が合流することで、水質はやや改善されたのですが、このように明治用水頭首工下流では、川の水が本川の水から支川の水に入れ替わってしまい、水質が大きく悪化していることがわかりました。



スライド 19



スライド 20

続いて、同じ調査のクロロフィル a 量（植物プランクトン量の指標となる）の結果です（スライド 20）。通常、植物プランクトンは、流れのある川では発生しないものです。しかし、矢作川ではダムが連続することで、クロロフィル a 量はどんどん上昇していきまして、下流の明

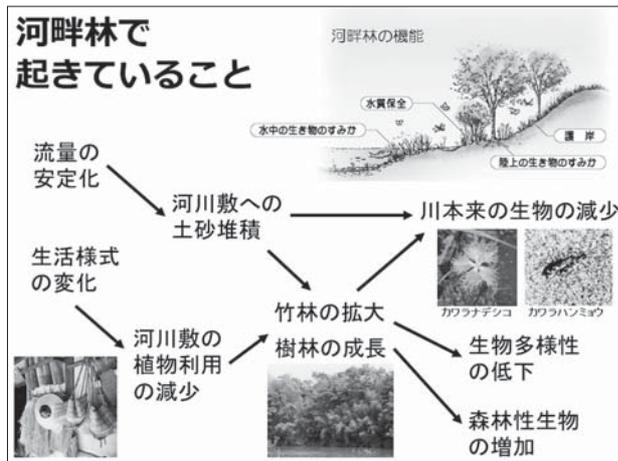
治用水頭首工のダム湖で最大となり、その後減少しました。このクロロフィルa量というのは、矢作川をよくご存じの方にはお馴染みの、矢作川に特徴的な緑色を示す要因にもなります。このようにクロロフィルa量は、ダム群で顕著に増加し、ダム群全体が一つの大きなダム湖として存在しているという可能性がわかりました。

最後に、これまで内田、そして山本大輔が話してきました水中の調査からわかったことをまとめます。アユの生態調査は、10年以上のデータが蓄積されてきました。そのアユの行動については、河川流量と大きく関係していることがわかりました。また、2000年以降中流域では、カワヒバリガイ、アメリカナマズ、オオカナダモなど、外来生物の侵入が顕著になってきました。そして、矢作川中流では近年水温は上昇し、流量は減少し、明治用水頭首工前後では水質が大きく変動していることがわかりました。

の一つはダムによって流量が安定し、河川敷に土砂の堆積が進んだことです。もう一点は生活様式の変化によって、河川敷の植物利用がなくなってしまったことです。この二つの要因から、竹林や樹林の成長・拡大が進み、名前にカワラと付いている生物群に代表される、川本来の生き物が減ってしまう、生物多様性が低下する、発達した森林に住む生き物が増える、ということが起こっています。

ここでは矢作川の河畔林で行い、具体的な提言に繋げた調査の結果を二つお知らせします。私が17年前に通いで矢作川の調査を始めましたが、初めて行ったのが、この密度の異なる竹林で林内の明るさと植物を調べる調査（スライド22）でした。矢作川の河畔林で一番多いのが竹林であり、その竹林で最も多いのが在来種のマダケの林です。マダケの密度が100平方メートル当たり約60本から400本までの6つの調査区を設け、林内の明るさと植物を比較しました。すると、竹の密度が低いほど林内が明るくなり、植物の種類数が増えることがわかりました。ところが、明るければいいかというところでもなく、明るすぎると草原に出てくるような外来性の草本などが出現してしまい、林の中にもともと生育していたニリンソウやウラシマソウ、ホウチャクソウといった森林性の植物がすみかを奪われてしまうことがわかりました。この結果から、竹を伐採すると植物の種類数は増えるけれど、在来の森林性植物を守るには伐採のしすぎは避けたほうが良いということで、100平方メートル当たり150本から200本程度という本数が望ましいという結論に達しました（スライド23）。この結論に基づき、市と水辺愛護団体による竹林整備への提言を行ったということです。

### 〈河辺の自然〉



スライド21

○洲崎 続きます、川から上がり河辺の自然の様子を見ていきたいと思えます。本日司会を務めます洲崎は、矢作川流域で植物のまとまりである植生とその望ましい管理について調べています。矢作川流域の宴会部長と呼ばれております。ここでは矢作川が抱える問題（スライド5）のうち、河川敷の樹林化と川特有の生物の減少を取り上げていきます。矢作川の河畔林で起きていることをもう少し詳しいフロー図にしたのがこちらです（スライド21）。河畔林は川に沿ってできる林で、陸上や水中の生き物のすみか、護岸や水質保全など多様な機能を持っています。矢作川は自然護岸の区間が多いため、河畔林が比較的豊かなんですけれども、今起きている問題

### 増えすぎた竹林をどうする？

密度の異なるマダケ林で、林内の明るさと植物を比較

(100㎡あたり)

調査区	非伐採区1	非伐採区2	非伐採区3	間伐区1	間伐区2	間伐区3
竹稈数 (生稈数)	396 (264)	300 (236)	264 (160)	200 (180)	148 (140)	56 (56)

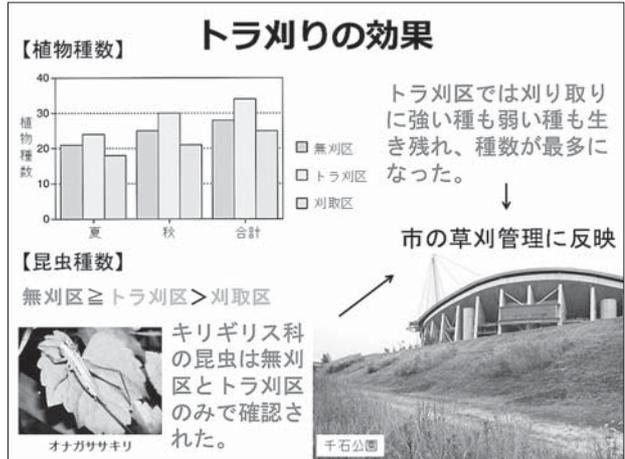


スライド22



スライド 23

続きまして、トラ刈り実験大作戦です。矢作川の河川敷では、夏と秋に堤防の亀裂を確かめるための草刈りが行われますが、このことでキリギリスなど秋に鳴く昆虫類が姿を消してしまったのではないかと、過去の矢作川研究所シンポジウムで故・田中蕃総括研究員が指摘しました。草を刈ってしまうとそこは緑に覆われていても隠れ場所も食べ物もなく、暑く乾燥していて、小さな生き物にとっては緑の砂漠のようだという事でした。そこで、当時の建設省のご協力を得まして、竜宮橋の上流右岸に刈り取りをしない無刈区、草刈機の幅状に刈り残すトラ刈区、全て刈り取りをする刈取区の3種類の15m×20mの調査枠を設けて、植物と昆虫の調査を行いました(スライド24)。その結果植物の種類数は、予想に反しトラ刈区で最も高くなりました。植物には刈り取りに強い種類と弱い種類があるので、トラ刈区ではその両方が生き延びることができたということでした。昆虫の種類数に関しては、異なった調査手法での種類数をそのまま積算することができず、ここでは具体的な数値を示していませんが、無刈区で最も多く、やや少ないのがトラ刈区、そして最も少ないのが刈り取り区という結果になりました。キリギリス科の昆虫は、無刈区とトラ刈区のみで確認されていました。このように、ごく狭い面積でも、草の刈り取り方によってこれだけ生き物の住みやすきが変わってくるということが分かりました。これは豊田スタジアムのある千石公園の河川敷で、豊田市が占用して公園管理をしています。この実験結果を受けて、ちょっと分かりにくいですが、このように草を刈り残すトラ刈り処理を現在も行っています。



スライド 24

矢作川では、たくさんの水辺愛護会が保全活動を行っています。多くの団体が定年退職された方が中心となって活動を行い、失われた水辺の風景を取り戻すために、竹切りや草刈り、ごみ拾いなどの活動を熱心に行っています。左上(スライド25)が、古巣水辺公園が整備されたときにできた、一番最初の水辺愛護会です。今市内に18団体が存在して、連絡協議会を持ち、勉強会や視察などを行っています。行政と研究所、そして水辺愛護会の皆さんで、この河川敷を管理しているということです。



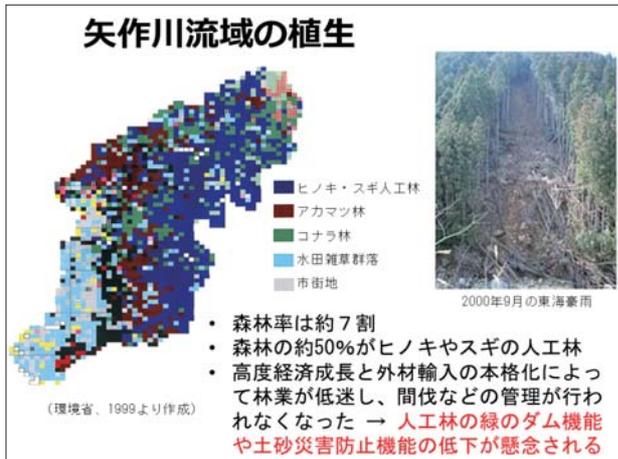
スライド 25

### 〈水源へのまなざし〉

○洲崎 続きまして、川の上流にさかのぼり、水源の森で何がおこっているかを見ていきます。これは、研究課題のうち源流域の森林の荒廃がもたらす緑のダム機能の低下に関わる部分です(スライド5)。

矢作川流域の植生は、このようになっています(スライド26)。これは、環境省の緑の国勢調査による結果を

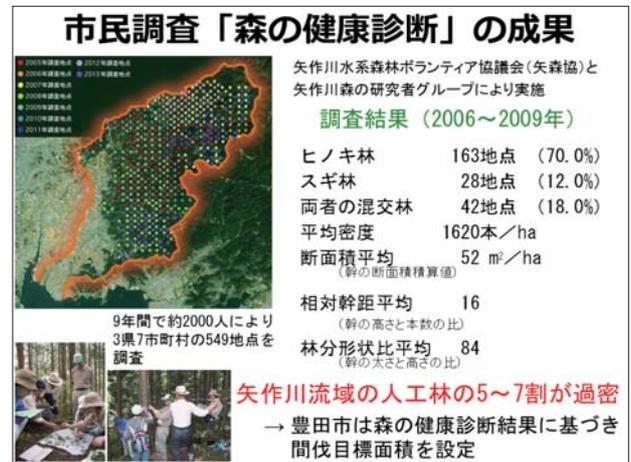
図に示したものです。約1キロメートル四方のメッシュで、矢作川流域の植生と土地利用を示しています。色の濃い部分が森林で、森林は非常に多いのですが、その半分がこの青紫で示したヒノキやスギの人工林です。ご存じのように、拡大造林期には日本中で人工林が植えられましたが、その後、材価の低迷や外材輸入の本格化などによって、間伐などの管理が行われなくなりました。このことで、人工林の緑のダム機能の低下や、土砂災害抑制機能の低下といったことが懸念されています。2000年9月の東海豪雨では、このように上流の至るところで沢抜けがおきました。林の断面を見るとひょろひょろの細い木ばかりです。この東海豪雨は、矢作川流域の人々に上流の人工林がとてもまずい状態になっているのではないかという危機感を抱かせるきっかけになりました。



スライド26

ここで、市民参加型の人工林調査、森の健康診断の成果をご紹介します（スライド27）。2004年に矢作川流域で活動する心ある森林ボランティアたちが集まり、矢作川水系森林ボランティア協議会、略して矢森協（やもりきょう）という団体をつくりました。先ほどの話に出てきました矢水協の水を森に変えた名前です。彼らの発案で、森林ボランティアと森林研究者がタッグを組んでこの森の健康診断が実現しました。これまでの9年間で約2,000人により、矢作川流域中の人工林約550地点を調査しました。市民パワーによる全流域の森林調査というのは、これまでに例がありませんでした。結果の一部をごくかいつまんでご紹介します。矢作川流域はヒノキ林とスギ林では、ヒノキ林のほうが圧倒的に多かったです。日本全国で見るとスギ林のほうが多いのですが、ここは木曾ヒノキ、東濃ヒノキといったブランドヒノキの産地に近いため、このような状況になったと考えられます。

平均的な密度は1ヘクタールあたり約1,600本でした。通常の林業のやり方ですと、1ヘクタールあたり3,000本ぐらい密植して順次間伐し、最後に500～600本にして収穫しますので、間伐が途中までしかされていない林が多いことがわかります。森の健康診断では、幹の断面積を合計した値と幹の高さと本数の比、また林分形状比といった三つの指標で、森の混み具合を総合的に判断します。その結果、矢作川流域の人工林の5割から7割が過密で、現時点で間伐を必要としている林であることがわかりました。豊田市は2005年に上流の6町村と合併しましたが、そのときできた森林課が策定した森づくり条例に基づく森づくり構想では、この森の健康診断の結果に基づいて間伐の目標面積が設定されました。



スライド27

ここで陸上の調査からわかったことをまとめてみたいと思います。矢作川の河畔林では、竹林を抑制し、森林性の生き物のすみかを保全するとともに、川本来の不安定な立地とそこに住む生き物を回復することを目指したいということになりました。また、豊田市都心部では、既存の自然緑地や水路の生物を守り、そのネットワークを強化して自然再生を行い、ヒートアイランドなどの都市気候の緩和を図ることを提言しました。また、矢作川流域の約2割の面積を占める過密な水源人工林の間伐を進めるために、市民の啓発と研究者、森林所有者、関係団体、行政の連携を深めることが重要であるという結果になりました。

○間野 再度、間野より報告いたします。先ほどお話がありましたように、矢作川には河畔林が非常に発達しています。その河畔林の生物多様性を高め、景観にも良好なものにするための河畔林調査というものを実施しました。豊田市内の河畔林には、大変多くの生き物が生息し

ていることが、その結果判明しました（スライド 28）。例えば昆虫では、2,246種の昆虫を確認しました。これは、当時の豊田市域の約 40%の生息種数に相当します。例えばタマムシやこのきれいなタマムシですね、それから国蝶にも指定されているオオムラサキ、こういった種類は河畔林に生育するエノキという樹木が重要な発生源になっています。このオオムラサキやコムラサキという蝶は、柳田の河畔林を構成する樹木から出る樹液が、今ここに樹液が出ていてですね、コムラサキも今吸っているわけですが、餌となっているわけです。

### 河畔林の昆虫

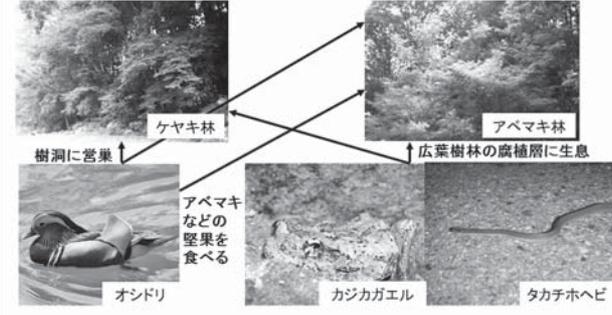


- 豊田市内の矢作川河畔で2,246種の昆虫を確認（市域の約40%）
- タマムシやオオムラサキは幼虫が河畔林のエノキが重要な発生源。
- オオムラサキやコムラサキの成虫はヤナギなど河畔林の樹液が餌となる。

スライド 28

### 河畔の広葉樹林の希少種たち

上流の山地区間に点在する河畔林がオシドリ（大畑, 2009）、カジカガエル、ツチガエル、ヤマアカガエル、タカチホヘビ（矢部ほか, 2010）等の希少種の生息場所となっていた。



ケヤキ林、アベマキ林、樹洞に営巣、アベマキなどの堅果を食べる、オシドリ、カジカガエル、タカチホヘビ

スライド 29

また、上流の山間地区におきましては、河畔林の木にあいた空洞にオシドリが生息して、広葉樹（アベマキ林）に実るどんぐりなどを食べて生活しています。河畔林の腐植層、根際のところに退避した部分ですけど、そういったところにはカジカガエルとか、それからタカチホヘビなど希少種となっているものが生息することが判明しました。このように多くの生き物の生息場として重要な河畔林ですが、地域によって生息種が異なることもわかってきました。

一方で、密生した竹林では生物層は貧弱で、景観的にも非常に悪くて、明るい空間を創出することが必要であると考えられましたし、もともと氾濫環境にある河畔というのは、砂地などに生息する生き物がいたわけですが、そういった種類が極端に減っているということもわかってきました。こういった調査の結果を踏まえて、現在上中流域の各地で流域住民による河畔林整備が行われています。

今申し上げたのですけれども、陸上動物だけでも、非常に多く、植物も含めると、大変種類が多くあります。しかもそれらは全部細分化されているんですね。そのため研究するときにはわずかな人数では困難を伴いますので、地域の多くの専門家の人たちに協力していただいて、調査を実施しています。

ここ（スライド 30）に書いてあるとおりで、あとから座談会でも出ていただく方も幾人か入っておりますけれども、そういったことがまた、地域の研究者間のネットワークづくりにも一役かっていますし、同時に矢作川流域あるいは豊田市域における生物情報は、他市町村のしかも全国的に類を見ない圧倒的な量だとの評価を受けています。

### 河畔林調査の共同研究者

分野	氏名	所属	分野	氏名	所属
顧問	田中 恭	名城大学特任教授	コウチュウ	繁江 昇	日本鞘翅学会会員
植物	洲崎 澄子	豊田市矢作川研究所		戸田 尚希	日本鞘翅学会会員
	鈴木 謙己	豊田市自然愛護協会会長		岩月 学	三河昆虫同好会会員
	山原 勇雄	草だらけの会会長	カメムシ	矢崎 充彦	名古屋昆虫同好会幹事
	山崎 玲子	森林インストラクター	ガ	西原 かよ子	国家公務員
動物	矢部 隆	愛知学泉大学教授	トンボ	吉田 雅道	蜻蛉研究会会員
	野呂 達哉	中京女子大学講師	バッタ	岡田 正哉	昆虫研究会なごや代表
	岡田 夕季	名古屋大学大学院		竹田 恭子	昆虫研究会なごや
	小籠 登美	高等学校非常勤講師	ユスリカ	近藤 繁生	愛知医科大学講師
鳥類	大畑 孝二	日本野鳥の会チルンジャー	トビケラ	森田 久幸	三河昆虫同好会会員
	新妻 謙章	名城大学農学部講師	トビムシ	須藤 雄彦	土壌動物学会会員
	橋本 啓史	名城大学農学部助教	ハエ	伊東 薫正	(株)地域環境計画
	手嶋 洋子	日本野鳥の会レジャー	ハチ	高橋秀男	多摩動物公園
	深見 弘	豊田市自然愛護協会副会長	カワゲラ	内田 臣一	愛知工業大学教授
昆虫	岡野 隆裕	豊田市矢作川研究所	軟体動物	川越 基弘	愛知みずほ大学講師
	高橋 匡司	日本鞘翅学会会員	ミジコ	小籠 亨	安城市立小学校教諭
	小林 広成	豊田市自然愛護協会幹事			(所属・肩書きは当時のまま)

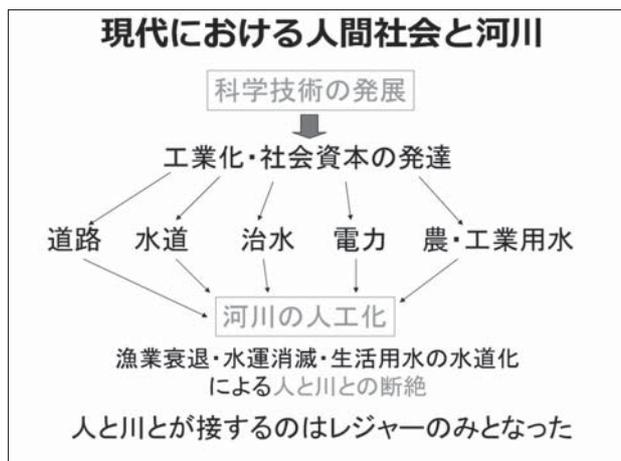
生き物の生息調査は、  
流域研究者のネットワーク構築にも貢献

スライド 30

街の中の潤いと安らぎを与える生き物豊かな環境づくりのためのまちづくり調査ということも行っております（スライド 31）。その結果、例えばチョウの生息には、林とともに草場が非常に重要であること、あるいは林床には、極めて多くの昆虫が生息しているということもわかりましたし、林の成立年代の違いもその生息昆虫に関係しているという可能性が見られました。昆虫ばかりでなくて例えばササゴイとかアオバズク、ハイタカ、そういった多くの鳥が往来繁殖していました。よくよく見ますと、豊田のまちなかには矢作川の河畔に生息する生き



です。

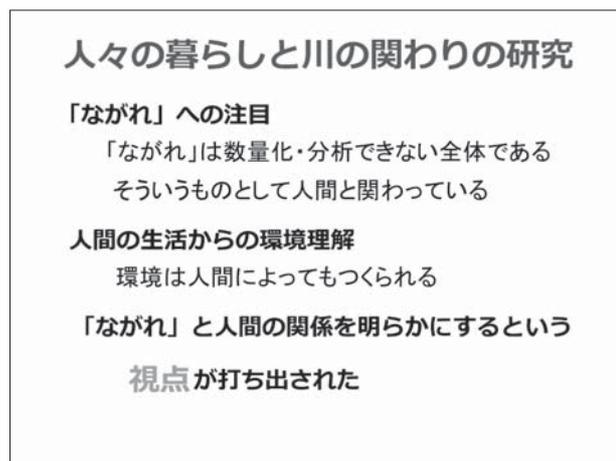


スライド 33

こうした巨大な工業化というところで位置づけると、人間はあたかも自然を踏みつけにして、使いたい放題かって壊してしまったというような感じがしてくるわけですが、そうじゃないと。人間は人間で川を大事にして、ある仕方に関わりあってきているということをちょっと考えないといけないとこですね。これが矢作川では非常によく見られるということ、人文社会科学がどんな感じに見ていくかということなんですけど、この矢作川研究所で、人と川の間を考えたときに、最初に古川彰さんが、非常に重要な視点を出されています。その始まりのところで、彼の視点というものが置かれて、この研究所で人文社会科学の研究を進めていく覚悟というものが見えるわけです。

その象徴的なものと僕が考えているのは、「ながれ」ということへの注目なんです（スライド 34）。「ながれ」という言い方を使って、それは数量化できない、分析できない全体であって、非常に豊かなものとして、人と関わって、人の心に残っていくし、人が大事にするし、人が愛するものとなっている。そういうふうな、数や分析、数にならず分析できないものとして、川を大切に人間が関わっていくと。そういうものとして、人々が川と関わっていく。そういうあり方を研究しようということ、始められたんですね。人間の生活から環境を理解する。そういう視点を立てて考える。環境は人間によってもつられる。自然が単に生態系とかそういうシステムでつくられているというよりも、環境を人間がつくっているという視点も非常に大事にしながら、研究を進めていくわけです。それで、その「ながれ」と人間の関係を明らかにするという視点が打ち出されて、ここから我々の、初めは小川都さんであったり、芝村龍太さんであっ

たり、次に高橋聡さん、遠志保さんといった人々が研究を展開していきます。



スライド 34

そこで、どんなことがわかったかということで、この短い時間で言えることは限られるんですが、かいつまんで説明していきたいと。まずは、中流域における川と人々の関わりの変遷があります。これが非常にいろいろな視点から明らかにされた。アユ漁がどう変わっていったか。これが道楽化していくありよう。生業と関わっていたような川と人間の関わりが変わってってしまう。また、例えば古巣水辺公園ができたときに、それでお客が増えたんだけど、地元の人にとってはそんなに昔がよみがえったわけでもなく、どこかずれを含んじゃっている。そういうことに、着眼されて社会関係が明らかにされている。それから、枝下用水の歴史というものが資料化されました。枝下用水の建物が変わるときに、大量に古い文書が放出されるわけなんですけれど、それが非常に労力をかけて資料化されていく。これが、一つの大きな仕事になっているかと思います。それから、枝下用水の西澤真蔵が神格化されていって地元で大切にされていく。どんなふう大事にされているかということも分析したり、どんなふうにかこう枝下用水が水を分け合っているのか、そういう知恵を明らかにしてきたことが、業績として目立つかと思っています。

こういった昔のことをもう一度考えるというのだけではなくて、現在の動き、環境運動の勃興とか進展の過程ということが、この矢作川流域では非常に顕著な特徴として、見られると思います。漁協を中心として枝下用水、それから豊田市も絡んでいる。そういう一つの大きな運動体として、矢作川が汚濁した時期から大きなうねりを持って動いてきたと。これを克明に記録して分析をしております。僕は全然関われなかったんですが、社会学

のほうでは有名な業績として評価されています。

それから、河川開発に対峙する漁協の戦略というところ、ちょっとおこがましいですが、漁協がどういうふうにして国土交通省や中部電力と対峙しながら、環境を良くするという方向に舵をきっていくかということが、克明に記録されている。漁協が保障金による解決ではなく、環境改善に立脚した行動規範ということを打ち出してくると思います。こういうことも、克明に記録されたというのが大きな成果だったのではないかと考えています。

人文社会科学分野の業績として、ちょっとここで研究所のものを挙げていきます（スライド35）。まず雑誌で論文が出されておりますが、それと別にこういった流域の資料が出されています。矢作川100年資料研究と題して、かなり克明に細かいデータを資料化しています。それから、東海豪雨が起きたときは、一気に聞き取りなどの集中的な取材をして、冊子にまとめるということをやっています。先ほど申し上げた枝下用水なんですけど、この資料をこういうふうにして、非常に使いやすい形にまとめているというようなことが、今までにやられております。そんな感じで、今後も流域の歴史から、それから流域の環境保全の動きについて、調査研究してまいりたいと思っております。



スライド35

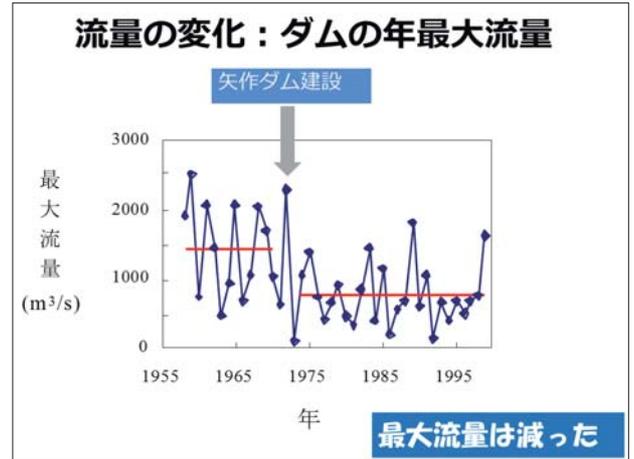
### 〈学問分野を超えた総合研究〉

○山本敏哉 魚類担当の山本敏哉です。私からは、学問分野を超えた総合研究というタイトルで、研究員が連携して研究をするという視点で紹介させていただきます。矢作川が抱える複数の課題に対して行った研究です（スライド5）。まず、1999年から2001年の3年間、古巣プロジェクトという調査を、名古屋大学とか複数の機関に共同研究で加わっていただいで実施しました。古巣水辺

公園という河口から42キロメートルにある公園を舞台にいろいろな調査を展開しました。古巣水辺公園付近の川辺の風景の変化（スライド36）を見ると、現在は左のように川辺は草で覆われた河原となっていますが、昔は河原に白い砂が大規模にある河原の風景がありました。



スライド36



スライド37

古巣プロジェクトの調査対象ですけども、ダムの影響というものを主眼におきまして、ダムのあることによって河川内の環境がどう変わるか。それから、水中生態系がどう変わっているのかということをやった。それを絡めて陸上生態系のこと、さらには人による河川利用の問題についても取り組みました。一例を挙げると、名古屋大学の方が調べたデータで、矢作川の最大流量を1950年代からグラフにしたところ、このようにダムの最大流量は、矢作ダムの建設前後で大幅に減るといようなことも記録にとどめております（スライド37）。

こういったさまざまな調査をやることによって、矢作ダム建造前後での川の形の変化、古巣地区を中心とした

エリアでの生物相の把握，人文社会の分野で川の暮らしの変化をたどることができました（スライド 38）。そして，下にありますように昔の風景，そして今の風景，その中での生物相を記録することができています。ただ，この時の反省は，各分野進展はあったんですけども，それぞれが，ややばらばらで調査してしまったという点がありました。

### 古川プロジェクトの成果

- 矢作ダム建造前後での川のかたちの変化
- 古川地区を中心としたエリアでの生物相の把握
- 川の暮らしの変化をたどる

むかし



いま





スライド 38

こうした研究もいろいろ展開する中で，20 年を迎えたということで設立時の使命，ミッションを振り返ってみたいと思います（スライド 39）。まず，矢作川の自然環境は，先ほど非常に先進的にいろいろな生物相の把握ができていたということもありましたが，ある程度，川の流域の自然環境，生物的環境を把握できたと思っております。また，外来生物の調査もかなり行いましたし，川底の環境の把握もできました。それから二つ目に，環境改善のための具体策を探求することができました。例えば，アユの研究については，アユの生息に関わる保全対策を提示し，その実践にもかなり取り組みましたし，川を生かしたまちづくりについては，提言も行いました。それから，地域に対する啓発活動を行いました。ただ，課題としてはいろいろやったことを具体的に現場へ適用することが，あまりできていないという部分もあったのではないかと思います。例えば，アユの項目では，長期的な課題として，河川流量の問題，川底環境の問題を今後も取り組んでいく必要があります。それから，行政との連携ですね。我々の研究成果を行政に生かしてもらおうという視点で，もっとよりよく生かしてもらおうやり方があるのではないかなと思っています。あと，効果的な外来生物の対策なんかも，これから出していく必要があるかと思っています。

### 設立時の使命を振り返って

- 矢作川の自然環境はある程度把握できた  
生物相、外来生物、川底の環境
- 環境改善の具体策を探求した  
アユの棲息に関わる保全対策  
川を生かしたまちづくりへの提言 など
- 活発に啓発活動を行った  
矢作川学校
- 具体策の現場への適応が課題  
長期的な課題への対応（河川流量、川底環境）  
行政との連携  
効果的な外来生物の対策（駆除、密度の抑制）

スライド 39

### 〈川の元気を取り戻す〉

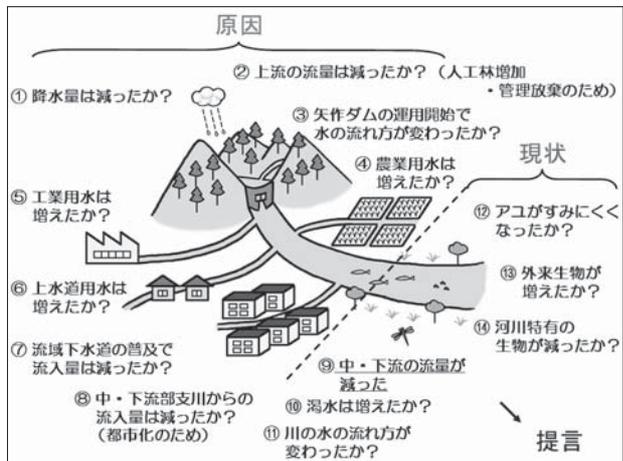
○山本敏哉 続いて，各研究員が連携した研究という視点で，新たな研究の計画を紹介させていただきます。古川プロジェクトでは欠けていた緑のダム機能が低下した問題も絡めた，課題（スライド 5）の全てを盛り込んだ研究を計画しております。アユの保全対策で報告した課題の中に，短期的課題と長期的課題がありましたが，あまりできていない課題として，流量の確保，砂礫の問題がありました（スライド 6）。この流量の問題ですけれども，先ほども示したように，矢作川では過去 60 年の間で約 25%，平均的に流量が減少しています（スライド 17）し，流量の変化のパターンも昔と違う姿が現在あります（スライド 18）。アユの各生活段階で研究することによって，流量との関係でいろいろわかってきております（スライド 40）。まず，アユの遡上と河川流量との間については，流量が多いほどよく上るという傾向もありますし，生まれたばかりの赤ちゃんが海へ下る過程においては，流量の多い年，少ない年で下る時期が違うというようなこともわかっております。それから，三河湾での海での生活なんかも，これまでのほかの場所での研究成果等も加味しますと，河川の流量によって塩分濃度。それから，海でのアユの餌生物の量なんかが影響を受けることによってアユの生息と関係あるのではないかと想定しておりますし，また中流域で夏を過ごすアユについては，川での生育と河川流量もいろいろなことが起きているんじゃないかなと考えております。

今後の研究では，こういったアユと流量との関係を更に広げて，アユといろいろな生物，それから今の流量をもたらしている要因なんかも調べていきたいと思っております。その関係について，このように図示してさまざ

主な要因を示しました(スライド41)が、例えば山の問題では、人工林の増加、間伐放棄の問題が河川流量にどういった影響を及ぼすか。農業用水がどうかかわっているか、土地利用がどうかかわっているかという視点で考えたいと思いますし、そうした現在の河川流量をアユだけではなくて、外来生物の増加の問題、それから河川特有の生物の問題と絡めて、調査して提言に繋げることを目指したいと思います。



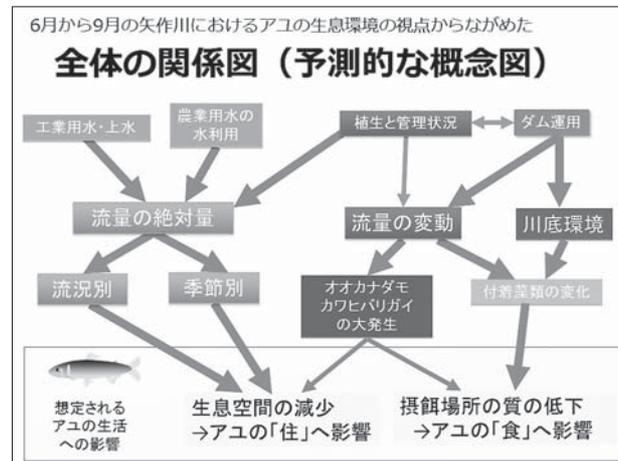
スライド40



スライド41

これは、全体の関係図を示したもの(スライド42)なんですけれども、真ん中に河川流量の様子を示しまして、上にその流量を決める要因、下に流量の結果、生物に対してどういった影響があるかを関連付けています。ここではアユだけではなくて、オオカナダモ、カワヒバリガイ、それから附着藻類なんかも見ていきたいと思ひますし、流量プラス川底の環境についても検討したいと思ひます。こうした調査の目標ですけども、河川の生物群集これを保護するための流量と制御のパターンを出したいと思ひます。それから、山の森林管理のあり方を矢作川の流量と結びつけ、森林管理の問題について踏み

込みたいと思っておりますし、川底環境、そしてさらには今現在我々の人間社会の水利用のあるべき姿についても提言したいと思っております。そして、何とはいいいましても古巣プロジェクトでは、いまいちできなかった個々の研究では達成できない高みを目指すことを考えています。



スライド42

最後に、今後我々がやって行きたい、新たな使命、新たなミッションは次のようなことを考えております。まず、自然保護の実践を伴う研究を手掛けたいと思っております。オオカナダモ、カワヒバリガイ、アメリカナマズについてはこれまで調査をしてきていますので、そういった結果を活かして、外来生物対策の確立をしたいと思っております。これらの調査は国内でも先駆的にやっていますので、ほかの地域へモデル的になるものを目指そうことができると思ひます。そして二つ目には、新たな水辺景観の創出ということで、この左側の小さな写真には、豊田市がつくったジオトープを示していますが、ここにはすでにいろいろな生物が住んでおりますが、さらに質を高めて希少な動物が住めるような環境にしたいと思っております。右側ですね、これ家下川流域で家下川リバーキーパーズとの共同で、川のコンクリートをはがして土の川底にするような取り組みをしております。こういった川をつくり変える、生き物に住みよい環境につくり変えるというような試みも、これからどんどん展開していきたいと思っております。そしてこうした場所を生かして、夢を持てる研究を、市民の方も夢を見られるし、我々もわくわくできるような研究をしたいと思ひます。それには、川をめぐる自然や文化のおもしろさ、不思議さを発信することが大切だと思っております。枝下用水の100年史の研究なんかですね、達さんが研究される中で、その面白さというものを存分に発揮できた研

究だと思えますが、例えば人文では里山システムの研究なんかも、今後手掛けていきたいと思えます。そして、希少生物、もういなくなった生物もいるのですが、こうした生物がいる環境を川の生態系の中に組み込んで、住

める生息場所をつくってやるような実践的な研究もできればいいと思えます。

以上で、基調報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 座談会

○司会 それでは、これより座談会に入りたいと思います。まず壇上の皆様のご紹介をいたします。右手より、豊田市役所社会部市民安全室 羽根博之様、矢作川「川会議」碓さくら様、豊田市自然観察の森 大畑孝二様、矢作川天然アユ調査会 新見克也様、矢作川水系森林ボランティア協議会 丹羽健司様、たかはし河川生物調査事務所 高橋勇夫様、独立行政法人土木研究所 萱場祐一様、関西学院大学・豊田市矢作川研究所顧問 古川彰様、そして、進行役は豊田市矢作川研究所所長の宮田が務めます。

○宮田 座談会の進行役ということで、宮田が務めてまいります。今から1時間半ちょっとの時間ですが、よろしく願いいたします。私事になりますが、市役所の土木技術屋の職員です。昔、先輩から土木屋は寡黙であれということ言われていて、こういう場は大変不慣れです。パネラーの皆さん、それから会場の皆さんにご協力をいただきまして進めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

今日の座談会のテーマは「矢作川流域と研究所の未来を語る」ということです。今日のパネリストは研究者、市民団体、行政の方、また、山、川、町、それぞれの立場の方からお話をいただきたいと思っています。まず順番に、今どのようなお仕事あるいは活動をされているのか。自己紹介並びに先ほどの研究員による基調報告の率直な感想をいただきたいと思います。萱場さん、どうぞよろしく願いいたします。

○萱場 まず、20周年本当におめでとうございます。岐阜県にある独立行政法人土木研究所という国交省系の研究所で、木曾川の中流域に長さ800メートルのちゃんと魚が住める実験用の河川があります。そこで平成11年から約15年研究をしているので、矢作川研究所は先輩にあたります。

やっている研究は大きく二つありまして、一つは多自然川づくりって皆さん、聞いたことはありますでしょうか。川の工事をするときにちゃんと魚が住めるような川づくりをしましょうと、そのための技術開発をやるのがまず1点目です。具体的には、よくコンクリートでの護岸工事を川の中に実施しますけれども、もう少しちゃんと魚が住めるような、それから景観に良いような護岸は

どんなものがあるだろうかとか、それから、川の中に瀬・淵ってありますよね。瀬と淵が無くならないように川の工事をするためにはどうしたらいいか、こんなことを研究しています。それから、もう1点目が、今日の発表に頻繁に出てきましたが、矢作川が抱える問題という部分の流量の安定と土砂の減少というのがありますが、特にダムに絡めて、流量や土砂がどう影響を及ぼしているかということについて研究をしています。

矢作川とのつき合いは、私がこのダムの研究をするときに初めてサイトに選んだのが矢作第二ダムの下流なのです。ちょうど明智川が支川で入ってくるのですが、明智川も含めてダムの直下から川の地形がどうなっているか、生物がどういうふうの下流の方向に向かって変化するか、ということ調べました。一番印象に残っているのは、私も土木屋なものですから、スタッフという物差しで川の中の地形測量をするのですが、5メートルで川の底に届かないのです。要はダムで土砂が止められているので、川底が掘り下がってしまって、どんどん穴が大きくなっているのです。その穴の大きさが非常に大きくなって、スタッフが届かなくて驚愕した思い出があります。そんなのが矢作川とのつき合いです。

今日、研究所の皆さんの発表をお聞かせいただきまして、矢作川全体の問題が陸域、水域も含めてどこにあるのかということがよくわかりました。特に私は水の中が専門ですから、今日聞いて意外と知らなかったことがありました。例えば水温が何度上がっているとか、栄養塩濃度が下流にどういうふう上昇しているとか、余り意識せずに研究していたので、非常に勉強になりました。今日はこの討論を楽しみにしております。よろしく願いします。

○高橋 高知からやってきました高橋と申します。私は地元の皆さんと一緒に天然アユを増やすというのを仕事にしています。よく「なぜアユなのか」ということを聞かれます。アユという魚はご存じのとおり古くから日本人に親しまれてきた魚なのですが、その関係が今すごく悪くなっていると考えています。その象徴的なことは、漁協の皆さんが増殖義務というのを抱えているわけなのですが、それがほぼイコール種苗放流という一つの方法に限定されてしまって、そのことで天然アユがかえって減ってしまうというのが現実になっていま



す。もう少しいろいろな視点を入れて天然アユを増やして、かつて良い関係にあった人とアユの関係、あるいは人と川との関係を、少しでも取り戻すことができれば、あるいは新しい方向を見出すことができればというふうに考えています。

この研究所との関わりは1996年ぐらいからで、矢作川天然アユ調査会が発足したときに矢作川のアユの生態をとりあえず調査したいということで、一緒に調査させていただいたのが始まりでした。それから20年経ったわけですが、今日、基調講演を聞かせていただきまして、かなり感動してしまいました。本当によくされてきたのだなというふうに思いました。ただ、一つ、二つ、苦言を呈すると、問題までは把握されているのに、そこからの対策の展開がいま一つうまくいっていないという感じはしました。これは最後に山本敏哉さんがこれからの課題として明確におっしゃっていたので、これからそれに結びついていくというふうに期待しております。よろしくをお願いします。

○丹羽 丹羽健司と申します。矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協：やもりきょう）の代表をしております。この団体は、ちょうど1月18日で丸10周年を迎えました。全体で14チーム、250人ぐらいが森林の調査からチェーンソーによる伐木、造材、搬出、あるいは指導もある程度行えるという、非常にやくざな危ない団体の棟梁をしております。

それと同時に、いろいろなことをやっているのですが、今回のキーワード、今日の説明、基調講演を聞いて、非常によく整理されて、非常に皆さん山を愛している、川を愛しているということもよくわかりました。こういう整理の仕方が非常によくわかって、私たちは今どこで動いているのか、この川とどうつき合っているのかということも再認識させていただきました。もう一つ、山の絡みで言うならば、私は山から来ているということで、僕らのキーワードは山の恵みなのです。森林資源活用とか、そんなちんけなことではなくて、山の恵みとどう向き合うのか。私が13年前にこの新豊田市全4,000戸の林家に対して、仕事として調査をしたことから始まりました。多くの山主はほとんどが素人です。その山主さんたちが、今、背中やお尻を向けている山に対して、山の恵みを楽しんで、山に向き合うきっかけづくりとして、森の健康診断をつくったり、矢森協中心にボランティアをつくったりして、科学的に楽しい山仕事を学ぶ、あるいは山仕事の楽しさを感じています。森の健康診断に都会から、名古屋から、日本中から、あるいは世界中から、今まで2,100人が集まって来て、山の応援団、矢作川の応援団も非常に確信に満ちた応援を形成することができました。彼らは矢作川の川に森に何かがあったときにいつでも立ち上がってくれる仲間をさらに形成してくれていると思います。そんな仲間と一緒にこの矢作川をどうしていくか考えるきっかけをつくっています。そのキーワードは、もう一つ、さっき川の恵みと言ったこ

とに対して、山の恵みにどう向き合うか。その向き合い方を僕ら矢森協が一人一つ寄り添ってやっていくということをやっています。

もう一つの立場、今日は話が少し出ました。矢作川流域圏懇談会の山部会部会長は蔵治さんで、私は副部会長ですが、やはり流域圏として根羽村から一番先っぽの日間賀島まで、産業、人の行き来、経済がどうつながっていくかということがすごく大事なところだと思います。実は毎月1回以上の矢森協の評議会と森の健康診断の実行委員会も全部、矢作川研究所のお世話になって会場をとるとか、いろいろなことを洲崎さんがしてくれていて、さっき何て言ったかな、矢作川のマドンナ、うわばみ、宴会部長、そんなことを言っていましたけれど、本当に彼女とか献身的な研究者たちの営みに私たちは支えられています。そんな形で今日の座談会の中に参加していきたいと思います。ありがとうございます。

○新見 矢作川天然アユ調査会の新見です。天然アユ調査会は研究所が今年で20周年ですけれども、研究所ができてすぐ後にできた、研究所の中で活動している市民グループです。どういう経緯かと言いますと、研究員が1分野に1人いますが、それでは十分な現地調査ができないものですから、矢作川の釣り師が調査員になって釣り場を研究所とともにつくっていきこう、そういう趣旨でできた団体です。僕が4代目の会長になります。研究所には、何も用が無いときでもコーヒーを飲みに行ったりして、自分では研究所員みたいなものだなと思っはいるのですけれども。

研究所に対して思いを一つ挙げると、先ほど発表されたのはみんな理系の方、社会系の方もおりましたけれども、現場ではない宮田所長ですとか内田事務局長ですとか、事務方の人も僕らと一緒に釣り仲間、川をうろうろ歩き回っていますので、うまく回していけばちゃんと事務方も研究員もうまく一つにまとまった研究所としてずっと進んでいけるのではないかなと思っております。

○大畑 日本野鳥の会の職員をしています大畑と言います。先ほど紹介があったとおり豊田市自然観察の森、これは市の施設ですが、そこの指定管理者としてずっとお世話になっています。2003年に野鳥の会の転勤がありまして、ここへ来る前は石川県の加賀市で市から委託を受けて加賀市鴨池観察館というところの施設運営をしていたのですが、転勤があってこちらにきました。新しい赴任地に行きますと、やはりそこの自然を、いろいろ調

べてみます。最初にパンフレットを見ていて、矢並湿地というのがあり、湿地が好きなので、ひたすら一人で探しに行ったけれど結局見つかりませんでした。看板もなければ道路から離れているものですから。

それから、もう一つはいろいろな施設を見ていて、矢作川研究所というのがあるらしいというので、行って、特段知っている人もいませんでしたが、行政の施設なら勝手に入れるだろうと思って、入って、今もそうですけれど、入った途端にこの右側に本当に学会誌とか専門誌がずらずらとあって、大変感動しました。というか、初めて来た町で地方都市だけれど、こんな専門的にやっているところがあるのだなというのが第一印象で、先ほどの話も聞いて、やはり研究者らしく、しっかり論理的に川から河畔林から流域から非常にわかりやすく、さすがだなという気がして感動していました。

これはこれからの研究所のあり方も含めて関わってくると思うのですが、観察の森は環境部環境政策課というところが担当セクションです。研究所のほうは産業部で河川課（編者注：矢作川研究所は建設部河川課に属する）ということですが、やはり一つの市の中で共通する部分もあります。うちの施設は自然系の環境学習施設の拠点という位置付けでやっていますので環境学習活動が中心ではあるのですけれど、保全活動的なことも、里山環境ですけれど、あのエリアを中心として、それから調査的な活動もいろいろな方にお世話になりながらやっています。そういう中で研究所の研究を抽出した部分と、役所の中では、もちろん森林課とも森の関係で今もいろいろな形のおつき合いもあるのですけれども、これからより一層いろいろやっていきたいなと思います。

うちの施設には2年半前に新しいネイチャーセンターができたのですが、最初のネイチャーセンターを壊さないで、標本資料館ということで活用をしています。まだ一般には開けてはいないですが、今日から2週間、鳥をテーマとした臨時の企画展をやっていますので、ちょっと宣伝になってしまいましたね。そういったのがあって、豊田市には、博物館まではいかないですけど、研究所というところがあって、うちの標本資料館もあって、環境学習の拠点、それとネイチャーセンターがあり、日ごろからも間野さんらに観察会の講師をお願いするなど日ごろのおつき合いがある中で、今日、呼んでいただいて大変感謝しつつ、良い関係ができたかなというふうに思っています。よろしくお祈りします。

○裕 矢作川「川会議」の代表をしています裕さくら

と申します。どうぞよろしく願いいたします。私は東京に育って、自然には縁のない生活をずっとしていたのですが、縁あって豊田市に住むようになりました。その当時、30万人都市の真ん中に矢作川が流れていますが、矢作川のことも全然知りませんし、いろいろな自然のことも知りませんでした。せっかく川があるのに、ほとんどの市民、ましてや私どものように外部から来た者は矢作川についての関心が無い。何だかすごく寂しいなと思って、ある大きな会議のときに川のある都市会議という会議を主催いたしました。そのときに四万十川に行き、いろいろな川のある大きな都市の人たちに来ていただいたり、伺ったりして矢作川のことに関心を持ち、今ではどっぷりと浸かってしまいました。もともと豊田市というのはとても自然に関心が高く、豊田市の市民の誓いの第1章でも、「緑を育み、川を大切に、豊かな自然を愛しましょう」となっており、日ごろから川に、あるいは自然の活動している人がたくさんいらっしゃいました。そんな下地があった中で2001年には、矢作川漁協が100周年、豊田市が市制50周年、先ほどからお話に出ております近自然工法を使った古巣水辺公園が10周年、そして矢作川筏下りが15周年という、大きな、大きな節目を迎えました。今までそれぞれが活躍していたのですが、これを大きな一つの視点から、自然を見つめ、川を見つめ、環境を見つめていこうではないかということで矢作川「川会議」が発足いたしました。さきほど、丹羽さんからも山の恵みというお話がありましたが、川の恵み、それこそ川の生物、川の景観、川の動植物、いろいろなテーマで、1年に1回、川会議を開催してきました。ところが、「うーん、ちょっと待てよ。川って言ったって上から下まで流れているし、川のゴミはどこに流れていくのかな」ということを考えていたら、伊良湖にあります西の浜に亀の子隊といって海のお掃除してくれる小学生の団体がありました。それをアド水辺愛護団体というところが見つけてきてくれて、それから毎年、今年で8年目になるのでしょうか。海まで行って、ゴミ拾いのお手伝いもさせていただいております。

そんなふうに川は川だけを考えてはだめだなあ。やはり全体、運命共同体としての川を捉えなければいけないと考えていた折に、平成22年に国土交通省が矢作川流域圏懇談会というのを発足してくれました。流域全体として矢作川を捉えようではないか、森も川も海もそこに住む人たちみんなが、知恵を出し合い、現状を知り、何か少しでも良くなるものを育てていこうではないかと、そんなすばらしい懇談会を立ち上げてくれましたの

で、私たち川会議、そして川会議の構成団体も一緒に活動してまいりました。そこで、昨年の矢作川「川会議」は「山の源流の森」というテーマで開かせていただきました。

矢作川研究所が私たち川会議とどういうふうな関係があるかという、これは私たち川会議が本当にいろいろなところから、「何であなたたちはそんなに行政に物が言えるの。何でそんなに手伝ってくれるの」と言われるのですが、すべて矢作川研究所のおかげです。ありがとうございます。矢作川研究所が、市民や、いろいろな団体の架け橋、もっとちょっとオーバーに言えば、虹の架け橋になってくれているおかげで各団体が協力し合い、まとまって一つのことができるのです。先ほど丹羽さんも言われましたが、私たち川会議も「いざ鎌倉」というときには、さっと18の構成団体の者が集まっているいろいろなことができるのも矢作川研究所のおかげです。また後で、もしかしたらチクリと苦い提言があるかもしれませんが、今はそんなふうに矢作川研究所にはお世話になって感謝しております。ありがとうございます。

○羽根 皆さん、どうもこんにちは。今、皆さんの自己紹介を聞いて、ちょっと場違いだなと思って、ここに来たことを反省しているのですけれども、私は豊田市役所の社会部市民安全室に在籍しております羽根と言います。よろしく願いいたします。市民安全室というのは、市民の安全・安心を守るという使命を持っておりまして、交通安全だとか防犯、それから防災を担当しています。去年は台風が非常に多うございまして、台風18号が来た9月15日、16日には、先ほどちょっと紹介がありましたが、名古屋では100ミリの雨が降って、地下街が浸かってしまった。例えばそういうときに災害対策本部を立てて避難勧告を出したり、避難所を開設したりというところの実際を担当する部署なものですから、何でここにいるのということで、皆さんちょっと不思議だと思っているのではないかなと思います。実は私、去年の4月から市民安全室にいたのですが、その前は都市整備部のほうにありまして、ずっと都市計画を携わってまいりました。平成12、13、14年と河川課に所属していましたが、河川課に変わったら東海豪雨がどんと9月の11、12日に来たということで、災害復旧にいろいろ携わってきたわけですが、矢作川研究所とはそれ以来ずっとおつき合いをさせていただいております。どちらかというと夜のつき合いが長くて、こんな立派な研究を体系的にやっているということは今日の今日まで知らなかった

ものですからちょっと反省しているところですが、夜、あれだけ飲んでおって、よくこんな仕事ができるなというふうに、思っているところでございます。

私がここに来たのは、きっとそういう都市サイドからの何か意見を求められているのではないかなと思っておりまして、またそれは後ほど議論の中で展開していきたいと思っております。それでは、よろしく申し上げます。

○古川 古川です。よろしく申し上げます。恐らくこのメンバーの中では私が一番最初に矢作川研究所に関わったのだと思いますが、矢作川研究所の計画自体は1990年ごろに既にあって、そのころ日本はバブルに沸いていたわけです。もうお金が幾らでもあって、箱物が幾らでもできた時代だったのです。ところが計画ができてから実現した段階、1993年はもう既にバブルが崩壊して、当初の計画とは全く違う予算規模が実現したというか、実現しなかったというか、そういう状況の中から出発したのがこの研究所です。日本ではよく経済、失われた20年と言われる、まさにこの失われた20年と矢作川研究所の20年がぴったり一致するというのもかなり奇妙な偶然ですが、その中で先ほど話してもらったような豊かな研究といいますか、そういうものが進められてきた、予算規模が本当に限られている中で研究員の献身的な努力で進められてきたのだと思います。

この研究所のやはり一番重要なポイントというのは、近代以降というか、19世紀以降は学問が極めて専門分化していく中で総合性を失ってしまうわけです。自分たちの身体を見てもわかりますけれども、例えば指の先ちょっと頭の先ちょっとは違うものだと言えそうですけれども、体というのはやはり全体として一つのものというのは、我々日常的に実感していることだと思うのです。それを川という一つの焦点を持って総合性を実現していくというのがこの研究所の当初からの目的であり、かつ、それを目指して現在までやってきたのだと思います。日本社会そのものも科学専門化、非常に細かく専門化してしまった科学に技術がくっついて、結果として環境を破壊してしまうということが起こってきた。これは悪いことというふうに言ってしまうえばそうですが、そうではなくて、我々が望んだことだったわけです。この100年間もしくは150年間望んできたものが実現して、その結果として環境は破壊されてしまった。そのためには今度は専門分化した個々の科学がそれに対処していくということももちろん必要ですが、それを総合する場というのが必要だったわけです。それがこの矢作川研究所がつく

られた理由だったのです。だから、総合科学としての、川の総合研究としての研究所という、そういう特徴が先ほどの報告でもよく出ていました。では今度は、それを実際にどういうふうに応用していくのかという応用科学の側面が、行政の研究所であるがためにやはり行政が見ている視点というものを外せないというところはあるわけです。それを、今ここにおられる碓さんであるとか、矢森協の丹羽さんであるとか、そういう方々が少しずつらしながら実践とはこういうことだという意味で、1997年に河川法が改正されて、環境と市民参加というのが加えられますけれども、矢作川研究所というのは既にもう最初から市民参加ということと、それから川に利水と治水だけではなく環境が必要だということを前提の認識にして出発したという意味でここまでやってこられたのだと思います。ただ、私もいっぱい言いたいことがあって、研究顧問という立場は内部なのか外部なのかという微妙なところもありますが、できるだけ今日は厳しい要求を突きつけていきたいというふうに思っております。

○宮田 ありがとうございます。まずは皆さん、ご紹介の中では、研究所のやってきたことと言いますか、20年をある程度評価していただいたかなと、優しいお言葉をいただいておりますが、ただ1点、宴会部長のおかげで研究所がかなり思い違いをされているといけなくて、普段しっかり調査・研究はしていると補足させていただきます。さて、皆さんからご紹介を兼ねてそれぞれの率直な感想をいただきましたが、これからは時間も限られておりますので、それぞれの立場から矢作川への思い、研究所への思い、最後に研究所の課題・期待・今後の方向性について、今も古川先生から厳しい言葉を言われると、そういう覚悟のもとにいきますけれども、このような流れでいきたいと思っています。

古川先生からお話をいただきましたが、基調報告の中でもあったように矢作川というのは流域圏人口140万人の生活を支えて、さらに全国的に有数な工業・農業地帯ということで、その水の利用率は非常に高いというのが大きな特徴です。これはそれぞれ時代時代の要請によってそういう形になって、流域の総意ということで今の形になってきていると思います。川に関わる問題というのはさまざまな立場の中で微妙な問題があります。でも、それを矢作川の場合は長い歴史の中でそれぞれの立場の方が努力をされて、今の我々の生活、あるいは流域を支えてくれる矢作川の姿があるというふうに思います。し

かし、先ほどの基調報告にありましたように、今、川の力が無くなったと言われます。川の力が無くなったことで、さまざまな問題が川の中で起こっている。陸上でも起こっている。その問題をどうしていくかということもあります。それを我々が研究所として考える上で、今日はさまざまな立場の方が見えますので、流域として矢作川をどう考えていったらいいのか、どうしたほうがいいのか、何を指すべきなのか、ということを少しお話いただきたいと。まず萱場さん、全国の川を見られている中で矢作川と絡めてお話をいただければと思います。

○萱場 矢作川の特徴は何といっても、日本全国の国土交通省の管理している川を見ても、人による利用が相当大きいだろうという気がします。矢作ダムの直下から始まって、電力ダムが幾つもありますし、海に行くまでに水利用から始まって川に対する工事ですとか、とにかくさまざまな人間の意が加わっている。データは持ち合わせていませんが、その点で多分日本でも屈指の川だと思っています。そういう川に研究所があり、そして研究所がコアになって流域の皆さんが一体となりながら、持続可能な川をつくれるのであれば、これは日本の非常に良いモデルケースになるのではないだろうかと考えています。具体的には、今日も議題にありましたが、これから土砂をどう下流に流すかという問題が大きな問題になってくるかと思っています。やはり土砂を上流から海まで流すという意味では、矢作川には途中で数多くの横断工作物がありますから、ここをどのように迂回させながら海まで持っていかとか、非常に大きな課題を抱えているわけです。

こうした課題をどう解決していくかだとか、土砂生産源である森林の問題だとか、面的・線的に問題をどう解決していくかということが矢作川の中で、もしうまくつくれば、これは非常に日本全国で先進的な事例になるだろうなというふう考えています。

○宮田 ありがとうございます。今日は最初に言いましたように、パネラーの皆さんそれぞれの分野がいろいろありまして、関連付けてお話をするというのが大変難しいのですが、土砂の話が出ました。土砂というのは先ほど丹羽さんからお話がありましたダムの上流域の山の恵みです。私たちには川の恵み、山からの恵み、流域としての恵み、いろいろあると思います。丹羽さん、山で活動されている中で流域としてのお話をしていただけると

ありがたいと思います。

○丹羽 私は研究者ではなくて実践家というか活動家、一市民なのですが、先ほどの発表の中でも河川流量が矢作川に及ぼす影響は大きいという話がありました。河川流量なんか空から降って来る雨の量ではないかと誰もが思うのだけど、実はそれが流域の7割を占める山に落ちます。その山の大半を占める人工林は過繁茂の状態になっている。それはどういうことかという、先ほどの説明が少し足りないと言っては研究者に失礼ですが補足しますと、降った雨を過繁茂な林が生きるために光合成で蒸散させてしまうから下流域まで来ない。なおかつ、光も入らなくて、下が洗い流されて下草も生えないから菌槽膿漏のような状態になって、雨が入ったらタラタラと流れていく。そのどちらも大もとは山なんだよということをもう一度きちんと押さえておかなければならない。川の問題というのは、山の問題の割合がうんと大きいんだということです。

では、その山に、皆さんは山に入っているかどうか。山に向き合ったことがあるかどうか。例えば、森の健康診断という言葉の名前だけでなくもう少し知っている人、手を挙げてください。じゃあ出たことのある人、手を挙げてください。あっ、同じだけ……。これだけ出ているというのは、矢作川はさすがすごいんですね。その中で一緒に科学的な目で山を見、森を見、下生えを見て、途中の山を見て、人工林は悪だとか、いろいろな妄言に惑わされずに自分の腹の中にきちんと押さえる、科学的に押さえるという運動をやってきたわけですね。そこに向き合うということはどういうことだったのかと。それと、矢作川研究所の事とはどういう関係なのかをちょっと申し上げますと、僕は2000年9月の東海豪雨のときにまざまざと見ました。あれだけの災害がなぜ起きたのか。それは山にみんなが手を入れないからおじいちゃん達が言う。まさにそのとおりだと。僕らは、ではどれくらい荒れているのか、豊かなのかを知りたい。でも、森林行政とかいうのは知っているはずだと思ったら誰も知らないということにもっと驚いたんですね。では、自分たちで調べようではないかということになった。調べるというのは、オンブズマン的に調べるではなくて、豊かさも不健全な部分もこの五感と科学で知ろうということで運動が始まって10年間続けようという、今年がその10年目です。コマーシャルしますと、6月7日が最後の健康診断です。その発表会を10月26日にこの場所でやります。そのときには多分全国から参



加者が来ると思います。今、全国38都道府県に矢作川の森の健康診断と同じものが広がっています。自分の地域の森がどうなっているのか、水源がどうなっているかと誰もが気になる。そのモデルは矢作川でできて広がっているということの一つ覚えておいて、いわゆる川の矢作川方式に対して、いってみれば森の矢作川方式ということなのです。

流域ということで考えていけば、矢作川は流域のモデルなのです。日本中のすべての流域の中で流域という意識を持っているのは矢作川だと思います。だから、私は矢作川で森の健康診断が成功してうまくいくなと思った途端に、隣の流域意識のほとんどない庄内川で森の健康診断をやって同じ組織をつくったらできた。全国38都道府県が矢作川をモデルにして動いていっている。このように流域モデルを矢作川でつくれるということの一つ覚えなければならない。なおかつ、そういうデータ蓄積は行政的にオペレートしなかったではないかとかいろいろ声があるけれど、そうではないです。豊田市の森林行政というのは今、日本の最先端を行っております。それは条例をつくって10年間で100億円の金をつぎ込んで、地域のおじさんたち、山の人たちを巻き込んで議論して続けていこうと動いている。そのもとは何かというと、先ほど洲崎さんが発表したように、これだけのデータがあるところは日本中どこにもなかった。そのデータがウェブ上でも森林学会でも全国に流されている。さっき山に向き合うと言いましたけれども、そのことに

真摯に向き合ったのが豊田市なのです。

そういうことの流域のモデルをここで私たちはつくっていかなければならないのかなと。常に日本中の流域、これから多分、州とか何とかができていくと言っていますけれども、流域というものがこれからのキーワードになるときに、常にこの矢作川が見られるようになる。矢作川研究所がその核になる。僕らが困ったことに森の健康診断は矢森協のボランティアだけではできなくて、科学の知識が欲しいと思って、僕は日本中で民主的な、要するに研究市民をばかにしないで一緒に手をつないでくれる研究者を探し回ったんです。最後はネズミの嫁さんがして、洲崎さんとか東大の蔵治さんとかにめぐり合っていく。新見さんたちがやっている天然アユ調査会も市民と研究者が一緒になる活動をやっている。そういう土壤がここにはある。協働の市民研究者とかの協働の土壤がある矢作川の流域というのを、もっと意識的にモデルにしていきたい。困ったときは、日本中の流域からここへ来いよというような形になるのが僕の理想的なことだと思っています。以上、妄想でした。

○宮田 山のほうの現状といいますが、苦勞されて活動されて、それも楽しみの中の一つだということもあるのかなと思います。次に裕さん、どうぞ。

○裕 今、そういうふうな流域の意識が高いだとか、先ほどもアユの研究を10年間ずっと続けて、いい蓄積が

いっぱいあるというふうに、矢作川の者は思っておりま  
すけれども、高橋勇夫様、何か夢のような日本人の心の  
ふるさと、四万十川にいらっしゃって研究をし、全国の  
川を知っていて、本当に矢作川はそんなに問題意識も高  
く、研究所もしっかりしてるのでしょうか。それから、  
どんなところが矢作川は問題点があるのかというような  
ことを、夢物語の次に現実をちょっと知りたいと思いま  
すので、お聞かせ願えればと思います。

○高橋 びっくりしてしまいましたけれど、今日はまさ  
か四万十川の方はいらっしゃらないと思うので、正直に  
お話したいと思います。私はずっと四万十川で仕事もし  
ていましたし、研究もしてきて、30年ぐらい潜っ  
たり、いろいろなことをしているのですが、年々悪くな  
っていくんですね。最近思っているのですが、悪くなっ  
ていく過程というのは、四万十川がNHKで放送されて  
有名になってから、自分たちは良いものを持っている、  
全国に誇れるものを持っているというのに気がついたの  
はよかったのですが、その利用にばかり意識が行き過ぎ  
たのではないかと思います。もちろんその母体を何と  
か守ろうという、そういう方もいらっしゃいますけれど、  
全体の流れを見てみると、利用をするほうに行き過ぎて  
しまった。その結果、今、例えば私のやっているアユと  
いう魚はひょっとしたら四万十川での資源回復というの  
は難しいのではないかと。少なくとも私がやれと言われ  
たときに、やると本当に言えるのかどうか。非常に疑問  
なぐらいのレベルになっています。

そういう目から見ると、矢作川は確かにいろいろな問  
題があって、内田さんが報告されたようにカワシオグサ  
とか、もう果てしなく、よくこんなにいろいろな問題が  
出てくるのだなというのが実感です。それはそれとして、  
それでも天然アユが少しずつ増えてきて、こんな40万  
都市の中でアユ釣りをしている人が結構いて、それを釣  
ってから、きつと夕方には焼いて食べてビールを飲んで  
いるわけですね。そういう川のある暮らしがこんな大  
都市でできているというのをもっと誇りにしていいと思  
います。

市長がいないのはすごく残念なのですが、もっと  
市として誇ってPRしてほしいと思います。

山本敏哉さんが最後のところで、これからさらに高み  
を目指したいということも言われていました。私は、そ  
れもちろん必要ですが、現状こんな、こんな川と言っ  
たら失礼ですが、こんな厳しい条件の川でここまででき  
ていることに関しては、皆さんはもうちょっと客観的に

評価すべきだと思うのです。そのことが次のステップへ  
の弾みになるような気がしています。高みを目指すとい  
う意識にどうしてもなると思うのですが、それは一旦捨  
てて、自分たちはここまでできたんだという  
思いを一度持ってもらったほうが、今後さらに20年、  
30年と行く上で重要ではないかというふうに思います。

○宮田 ありがとうございます。今高橋さんから四万  
十川の話をしていただきましたが、全国をずっと回って、  
アユの再生産といいますか、天然アユを増やす活動をず  
っとしてきて、漁協さんとか地域の方と一緒にアユを復  
活させるということをやっていると思います。

アユ絡みで何ですが、新見克也さん、矢作川で調査を  
しながら、天然アユ調査会も最初はもう本当によしま  
な気持ちといいますか、ただたくさん釣りたいというだ  
けでできた団体のような感じだったと思うのですが、今  
では本当に誇りを持って、市民研究者として天然  
アユを増やしていきたいんだということにだんだんシフ  
トしてきたかなと思うのですが、そこら辺の話をお願い  
いたします。

○新見 矢作川というと7つダムがあります。7つもあ  
るんだと市民にも意識してほしいです。その川に天然ア  
ユもいる、天然のウナギもいる、回遊魚もいるんだとい  
うことに、もっと驚きと感謝を持ちたいと思いますし、  
持ってほしいと思います。

7つダムがある川でこれだけ天然アユが復活してきた  
というのは、一つには矢作川研究所が調査して、いろい  
ろなデータを揃えた。その手助けは僕ら矢作川天然アユ  
調査会がしてきた自負がありますが、それをダム運用、  
ダムとのつき合い方として改善するように事業化を進め  
てきたのは矢作川漁協ですね。それによって矢作川とい  
うのはダムと上手につき合いながら河川環境を守ってい  
るということが全国的に有名になっています。

もう一つ、僕ら釣り人として川の中を歩いていると、  
それでもやはり川が老化してきているというか、劣化し  
てきているというか、特に川底ががちがちに固いとか、  
そういうことをすごく思うのです。よその良い川へ釣り  
に行くと川底が軟らかい。だけど矢作川はどこで釣って  
いてもがちがちに固まった石、その上に砂が流れている  
という、そういう老化したような印象を持ちます。

先ほどの研究員の皆さんの報告でも、いろいろな分野  
から言われていたと思うのですが、川の力が無くな  
ったことで、いろいろな面で問題があるのだと。今か

ら矢作川がやらなければいけないのは、もっと積極的にダムとつき合うことです。そこで何を僕がやってほしいかという、洪水です。人工的な洪水、全国的にあちこちのダムでフラッシュ放流という人工的に小規模な洪水を起こす事業があるようですけれども、矢作川みたいに河床ががちがちに固まった川ではそんなのでは効かないと思います。本当の中規模、河川敷公園が浸からないぎりぎりの、これは洪水だなという規模。そういうことを定期的にやっていかないと、矢作川というのは良くなっていかないのではないかと思います。7つもダムがありますから、うまくつき合っていかなければいけない。人工的な洪水の事業をやることで、いろいろな効果があると思います。一つは、川が攪乱されることで河床とか中州とか河原が動かされること。それから、僕ら関わっている天然アユとかウナギだとか、そういう回遊魚にとっても秋に人工洪水を起こせば産卵のために下流へ下るきっかけになるのではないかと。そして、矢作川の大きな課題の一つである砂とか石の移動にもなります。さらに、人工的に洪水を起こすということは、いつ洪水があるかわかりますね。そうすると、市民が洪水を見に行こうかということになる。そして、普段全く川に興味のない人が洪水を見るために堤防とか橋の上に集まって川を見るのではないかと、そういう関心が高まる効果が絶対あると思います。それから、水害は忘れてしまうものですが、毎年それをやることで水害への意識が保たれる。それから、支流の水門動作の確認を行う防災訓練の日にもできると思います。それから、流域諸団体から見れば「洪水を起こすぞ」となれば、すごい連絡網が要ると思うのです。そういうときに連絡を密にやることで、連携強化に絶対つながる。それから、一番大もとの矢作ダムが洪水を流すときに下流の河川敷がぎりぎり浸からない程度の流し方というものを、今でもやろうとしていると思いますが、技術的な面で、支流がこれだけの水るときは矢作ダムがこれだけ放流したら河川敷がぎりぎり浸からない洪水を起こせるという技術力アップにもつながるのではないかと思います。

こういうことが当たり前になれるようにならないと、7つもダムがあるこんな川が今から良くなっていくとは思えないので、何としてでもやってほしいと思います。矢作川研究所がこの実験のまとめ役になってほしいなと思いますけれど、具体的にどうして欲しいというのは、また後でお話します。

○宮田 ありがとうございます。すごく斬新な意見をい

ただきました。流域の動物の中で、鳥を専門としている大畑さんが見えますので、動物の生息状況としてはこの矢作川流域というのはどうなのかということのを少し教えていただければと思います。

○大畑 動物といっても鳥の話になってしまうのですが、2006年から研究所さんが、越戸ダムより中上流域でいろいろな生物調査をやった。その時に鳥類の調査をうちでやらせていただきました。それで思ったのが、矢作川は何の視点で見るかによって意見が違うと思うのですが、やはり鳥は鳥で環境の良し悪しがあります。

調べていて非常に感動したのですが、ヤマセミという鳥がいます。ハトぐらいの大きさで白黒です。カワセミというのは大変きれいで有名ですが、あの仲間です。ヤマセミはいわゆる溪流であれば全国どこでもごくごく普通にいるはずの鳥なのですが、近年非常に減っています。細かな調査はできなかったため、何々がいないかなどはつきりわからなかったのですが、そのヤマセミがそこそこ観察されました。ああ、すごいな、やはりヤマセミがいる川って本物だよなというふうに、鳥を見ている僕は思いました。逆にいうと、いろいろな視点があるでしょうけれども、いつまでもヤマセミがちゃんと住めるような矢作川であってほしい。ヤマセミがいるということは鳥好きに限らず、一つの指標になるのではないかなという気がしています。ヤマセミは矢作川に限らず愛知県内からも随分減っていて、愛知県レッドリストのI B類ということで絶滅が非常に心配されている鳥です。そんなに減ったかなと思ったりもしますが、確かに、私が来た10年前あたりは水源町あたりでもヤマセミを見たこともありました。昔から地元で野鳥観察している方に聞いても、だんだん観察頻度が減っているということだし、私も調査をやらせてもらったときほどしっかり見ていないけれど、あの辺の川沿いへ行くときはいつも気にしながら見ているのですが、ゼロにはなっていないものの、つがいは減っているように思います。原因はわかりませんが、一つは崖の環境に巣をつくるので、今の話のような人工洪水では自然の崖がつかれるほどすぐく削れることはないかもしれないけれど、放置しておいても大丈夫そうな崖があれば、あるいはそのような崖ができれば、繁殖する環境としていいのではないかなという気がします。やはり矢作川でもヤマセミが減っているように感じているので、少し心配をしています。

もう1種類、オシドリという大変有名な鳥ですが、越冬地として随分あの辺を利用しています。結構な数が今



も来ているとは思いますが、警戒心が強いので、安全な水辺があって、広葉樹のブナ科、主食となるドングリの実のなるような里山の環境がしっかり残っている河畔林、豊かな里山があると残れるのかなと思います。ヤマセミとオシドリあたりがシンボリックな鳥だと思います。そうした鳥がいつまでも見える矢作川であってほしいと思っています。

○宮田 ありがとうございます。大畑さん、ちょっと教えてほしいのですが、さっき新見さんからありました人工洪水、フラッシュ放流は、鳥にとっては問題とか、そういうことは大丈夫ですかね。

○大畑 ある環境ができれば、その環境に適した生き物が住んだりするので、どの時代の矢作川を目標とするかということによりけりと思いますけれど、個人的には今言った人工フラッシュで、もう少し本来の砂地が多く出れば、今はもう少なくなっているイカルドリが見られるようになるかもしれません。コチドリはちょっと川から外れた、お墓にあるような砂利のところまで営巣していたりとか山間部にも適応しているけれど、イカルドリは前回の調査では記録は取れたけれども、しっかり繁殖しているところは見つかりませんでした。なので、昔ながらの砂地がもう少し現れて、かつての攪乱されている河川になれば、本来そういったところに住んでいた鳥類が戻って来て、私は良いことだと思っています。

○宮田 ありがとうございます。報告の中にもありましたけれども、今日も水辺愛護会の方がたくさん見えています。矢作川は市民の方たちの関わりが大変多い川でもございます。裕さんにお伺いしたいと思います。裕さんは川会議の代表であり、森林塾のほうでも毎週朝からご活躍をされておりますけれども、市民との関わりということでは矢作川研究所というのはいままでかどうでしょうか。

○裕 そうですね。ヨイショするつもりは全然ありませんが、市民が活動するのに、自分たちだけでやっているとはわからないことがあります。それから、してはいけないことをしているかもしれません。いろいろな制約があるのですけれども、何か困ったことがあると、とにかく矢作川研究所に行って、「こんなことがあるけれど、これはしてもいいの」とか、「どこの課に行って聞いてきたらいいの」とか聞くといろいろな情報を教えてくれる、気軽に聞きに行ける。市民というのは市役所に行ってどこの課に行くのかな、誰に言ったらいいのかな、こんなことを言ったら笑われるかなとか、やはりそう思ってしまうけれども、とにかくまず研究所に行って、いろいろな情報を得てこよう、あるいはいろいろな資料をいただいてこようという意味では、先ほども言いましたが、研究所が市民と行政との架け橋になってくれているので、それは本当に役立っています。これからもぜひ行きやすい研究所、聞きやすい研究所、何でも教えてくれる

研究所。そして時々には市民の人にそういう竹の切り方はだめですよとか、先ほど洲崎さんからもありましたが、草は全部刈ってしまうのではなくて、トラ刈りにしないと全部生物が死んでしまいますよ、昆虫が逃げる場所をつくってあげなさいとか、そういう情報をいただけたらと思います。

ただ一つ、いろいろ考えてみると、やはり河川というのは、ここは公園課、ここは何課、何か行事をしようとかすると教育委員会、あるいは環境部とかというふういろいろな部署が関わってきます。そういう縦割りではなくて、矢作川研究所はアユにしる、河畔林のことにしる、川の中のカワシオグサ、カナダモとか水生植物のことにしる、いろいろな研究はしているのだけれど、それを上手に発信できなくて、その研究で終わってしまっている。だから他の部署からは「矢作川研究所はすごい研究をしているんだね、すごいね」という評価を得られないし、あるいは何か事業をする、イベントをするときでも縦割りの行政の中でやるので、いろいろな情報が伝わっていないということがよくあります。できましたらそういう情報をきちんと留めておいて、上手に引っ張り出してというような部署が市役所につくられて、矢作川研究所はすごいなというふうにも思ってもらえるようにしないと、何だか地味で、一生懸命頑張っているけれど何をやっているのか、どんな成果が上がっているのかというのがわからないと思います。市民の者にとってはとても役に立つ、良い研究所ですけれども、その辺が足りないと思います。

○宮田 このご質問表の中でもそういう情報の発信という意味で幾つかご質問をいただいています。後で紹介させていただきたいと思います。今、裕さんから行政との架け橋という言葉も出ましたが、羽根さんに伺いたいと思います。都市計画において、先ほど基調報告の中でありました川の自然を町の中へということで中心市街地の水と緑の質を高めるというお話がありました。数年前に研究所シンポジウムで愛知教育大学の和田先生の方から、矢作川の役割として「風の道」ということを教えていただきました。中心市街地になりますとヒートアイランド現象がかなり進んできているということで、昼間は海から山に向かう風、夜は山から海に向かう風が発生して、町なかのヒートアイランド現象を和らげてくれるというお話がありました。そういうことで、川の風の道を通すために川を使う、緑を使うということで、そのときに「ああ、すごいことを教えてもらったな」と思った

のですが、そういう都市計画的なことで羽根さん、少しお話をいただければと思います。

○羽根 司会者の宮田さんのお話ですけれども、平成19年のシンポジウムのときに私は都市計画課におりました。先ほど間野さんがパワーポイントで出したスライドに、矢作川があって、枝下用水があって、その真ん中に中心市街地があって、そこを縦に東西に何本か緑の軸で結びましょうという絵が1枚あったと思うのですが、覚えていますか。あれを愛知教育大学の和田先生らと一緒に研究所と、こんな町になったらいいねということで、提案させていただいたことがあります。

豊田市は平成19年に第7次総合計画をつくって、それは平成20年から29年までの10年計画で、都市計画マスタープランと、緑の基本計画というのをつくったのです。これはホームページを見ていただくと報告書も全部出ていますので、興味のある方は見ていただきたいと思います。そのときに緑の基本計画なり都市計画マスタープランの中で、とにかく水をどうするのかと、要は川なら川だけで閉じ込められて、そこだけで良くしようということをやっている、それはきっとまちづくりにはつながっていかないよねと。だから、まず川が良くなって、ひいては町も良くなっていく、そういうつながりを何かつくれないだろうかという工夫を今後やっていかなければいけないというところで、こうした提言をしました。今、緑化地域というのをこの中心市街地の中でやっています、この196ヘクタールの中心市街地は緑被率が14%ぐらいなのです。ちょっと緑が多いなと思うところだと大体20%を超えて30%ぐらいあるのですけれども、そのぐらいまで増やしたい。ですから、緑化地域で500平米以上の建物を建てるときは、2割なり1割以上の緑化をしてくださいね、そのときには助成制度もやりますよ、補助金もちょっと出しますよという仕組みをつくって、少しでも緑豊かな中心市街地をつくっていきましょう。それがひいては、今、風の道ということをやっていますが、矢作川という大きな資源があって、そこに川風が吹いているわけです。それを町のほうに呼び込むことができないかなということで、とにかく町においたら森が広がっているような、そんな豊かな夢をちょっと描きたいなということを考えています。これについては余り知られていないものですから、皆さん何のことかなと思っているかもしれませんが、制度としてはそういうことがもう既に組み立てられていますので、ぜひまた興味を持っていただければと思います。

○宮田 詳しくは、会場内の豊田市のパネルの中に都市計画課の今の制度が貼ってありますので、それをまた後で見いただければと思います。皆さん、矢作川とのかかわりという面で何か言い残した事とか、もう少しこれは言っておきたいということがおありでしたら、よろしいですか。では、顧問の古川先生に少しお話をいただきたいと思います。

○古川 今、皆さんの話を聞いていて、矢作川は市民が想像している以上に良い川なんだということが一つあったと思うんです。例えば GDP とか、幸福度指数とか、国の良い悪いの指標として最近ブータンなどでは言いますが、川の良い、悪いというのはどういうふうに指数化されているのかというのをちょっとご存じの方があったら教えていただきたいのですが、萱場さん。

○萱場 究極に難しい質問かなと思います。簡単にいうと、そこにいるべき生物がちゃんとそこに生息しているというのが良い川なのかなと僕は思います。すごいシンプルなのですけど。

○古川 そういうのをちょっと韜晦（とうかい）という言い方もするかもしれませんが、もう少しかみ砕いて。

○萱場 そうですね。もともと矢作川にいた生物だとか、あとはその生物が必要とする生息場がすべて現状の矢作川に確保できるかという、難しいですよ。もう人が十分利用し尽してしまった川ですから、なかなか元に戻らないと思うのです。なので、どんな生物を戻したらいいとか、そこは流域で議論をしないといけないと思うのですが、そういう目標とする生物が決まったときに、では人の利用とどう折り合いをつけて、どのような生息場をどこに回復させていくかという、かなり技術的な部分も多いかなというふうに思っています。今日も人工洪水という話がありましたが、当然洪水を起こしていくとなるとどれだけの量が必要とか、あとは洪水が起これば当然プラスの効果とマイナスの効果というのが出てきますので、単純に今、顕在化している問題だけを克服するという観点だけではやはり幅が狭いわけです。

ちょっと話が脱線してしまいましたけれど、対策を考えたときに、やはり川がどんな姿になるのかということと、現状の問題点をどう解決したらいいかという、この2方向から物を考えていかないと、どんな川にしたらいいかというのがなかなか決まらないかなというふうに考

えています。

○古川 私の感想を言うのに、今の言葉が必要だったのですが、それぞれの人はそれぞれの良い川というのをそれぞれ考えているのです。釣り人にとってはやはりアユが釣れる川がいいでしょう。鳥類をやっていると、やはり鳥がちゃんと住めるところがいい、指標になる鳥はヤマセミだというふうに、自分たちでそれぞれの専門分野で良い川というのを考えてしまうのですが、やはりこの議論の中ではそれを合わせてしていくというある種の指標の問題と、もう一つはコンセンサスのとり方といえますか、この二つをとっていく必要があると思うのです。市民であり、動物であり、川の土木であり、というものをすべてコンセンサスがとれるような、よくアリーナというふうに、スケート場のアリーナと同じなわけですけど、そういうアリーナがあることがやはり重要です。矢作川研究所というのは川との関わりを考える、そこでコンセンサスをとっていくアリーナになればいいんだというのが今全体の中から聞こえてきた議論だと思います。それが裕さんが言われた、市役所も縦割りではなくて、アリーナの方に向かう目を持ってくれるといいのではないかなということだと思えます。

それで、高橋さんが最初、四万十川はもう壊滅的だと、ここに四万十川の方は誰もおられないだろうと想定しておっしゃいました。四万十川の問題というのも高橋さんとメールでやり取りをしたことがあるのですが、そのアリーナの欠如というか、それぞれの上流、中流、下流、それから、それぞれの利害団体がばらばらに仕事をして、それぞれの川を考えてしまって、アリーナを持てなくなった状態になった結果としてアユを遡上させない状態にしている。そういう意味でこれからの課題は矢作川研究所の未来に向けてということ……すみません。司会の代わりみたいな形になってしまって、ということで、最終的に矢作川研究所が果たすべき役割というところに行ったときに、ぜひこの話にもう一度戻っていただければと思います。

○宮田 もうそろそろそういう話題に行ってもいいのですが、ご質問で先ほどありましたが、情報発信力といえますか、どのように研究所の成果を発信していくのか、余りにも流域の人に知られていない、そういったご質問が来ています。同じように行政の研究所として萱場さんのところに自然共生センターというのがあります、独立行政法人ですね。広報的なこともいろいろ研究されてい

るということですので、少しお話をお願いしたいと思います。

○萱場 　　うちは広報を研究としてやっています、なぜかという、やはり川の、特に水が関係する現象というのは非常にわかりにくいのです。水の中は見えないですし、それから、例えばそこで起きている現象というのは別にそこだけが問題だけではなくて、抱えている山に問題があるかもしれない。要するに見方というのがとても難しく、そういった意味では研究成果も人にわかりやすく説明するのがとても難しい分野かなと思っています。どんな見せ方だとか、どんな資料のつくり方をしたらうまく伝わるかということについていろいろ研究をして、それに基づいて、例えばうちには大きいフィールドがあるのですけれども、そこの中の看板とか、掲示板とか、研究の紹介用のパネルだとか、それから、矢作川研究所と同じようにニュースレターも発行していますが、そのニュースレターの発行の仕方もかなり気をつけたりとか、そういった工夫をしています。ただ、それでも興味を持ってくれる方というのはやはり川の応援団の方なので、都市に住む、川に余り興味を持たれない方にどういうふうにして興味を持ってもらったらいいのかということについては、正直私も悩んでいるところです。

○宮田 　　そうですね。今、萱場さんから少しお話が出たと思うのですが、今日みえている方は環境なり河川なりに関わりのある人がみえていると思います。しかも矢作川研究所のシンポジウムですので、矢作川研究所を知らない方はみえないと思いますが、もっと広く応援団をと言いますか、まず現状を知ってもらいたい方々にどういうふうを広めていくか、高橋さんもそういったことをいろいろなところで言って、地元の人たちと一緒に川をいじっているとさっき話されましたが、そういった面から少し情報発信ということで、どうでしょうか。

○高橋 　　本当に情報発信って難しいなと思います。ただ、知ってもらうということは本当に必要なのですけれども、その一つ手前の重要性として、私が最初にお話したようにいろいろなところへ行って、地元の方と一緒に天然アユを増やすという作業をするのを仕事にしているのですけれども、実際に行ってみると失敗例はかなりの数です。私自身もたくさん失敗しますが、どうして失敗しているのかというので一つ共通したところがあります。それは、例えば川の漁協さんから依頼が来てやった

場合に、漁協さんというのは川のプロなのですけれども、その方たちが原因を見つける。ただ、そこに視点が一つ欠けていて、自分たちは悪者ではないという意識がどうしても入ってしまうのです。そこで、少しバイアスがかかってしまって、そのバイアスのために対策がちょっとずれてしまう。それを積み重ねていくと、かなりずれたことをやってしまうというのが意外に多いのです。

そういう意味からいうと、矢作川研究所のような機関がきちんとあって、科学データが提供されて、それをもとに行動できるというのは、これは相当に幸せなことなんです。その辺を研究所から発信するというのは、ちょっと難しいのではないかなと思うのです。強いてできるとすると実績で示すしかないのだろうと思います。それは広報ではなくて黙って見てもらうしかない。そして結果を出していくしかないと思うのですが、その積み重ねは研究所側に大切だと思いますけれども、広報という意味では、私はむしろ研究所の母体というか、市役所、市のほうにもっと価値を見出すだけの度量が欲しいというふうに思います。

○宮田 　　ありがとうございます。丹羽さん、かなり頭を深く納得されておりましたけれど。

○丹羽 　　いや、そのとおりですよ。それしかない。市のほうはちゃんと使えばいいし、市民が使えばいいんです。僕らは使っているし、本当にお世話になっているし、使う知恵のほうがないのだから、ちょっと行政頑張れよと、県も頑張れよと、国も頑張れよと、市民頑張れよというだけのことだと思いますよ。十分やっているのではないかなとは思いますが、後からちょっと余分なことを言います。

○宮田 　　後がだんだん怖くなりましたけれど、そのほかの質問で、ごめんなさい、時間がありませんので二つぐらいご紹介します。漁協の方で、研究所の成果をダムの運用改善に生かしてほしいということで、萱場さんになってしまいますかね。

○萱場 　　最後に言おうと思っていたのですが、私が尊敬している先生で鈴木忠義先生という観光学の大家の人がいるんです。その方が技術者には3つのレベルがある。第1の段階が食いしん坊で、何か見て、おもしろい、おもしろいというやつは食いしん坊だ。次がグルメ。おかしいこととかがあったときに、それをちゃんと評価で

きるのがグルメのレベル。だけど、あなたたちは板前にならないといけない、要するに物をつくれるということが大事だというふうにおっしゃったのです。

それで、ダムの操作となったときに、やはりこれは板前のレベルになるのです。皆さんもご飯を食べに行っただ評価するのはできるけれど、それをつくれと言われると相当な修行をしないとそこまで行きつけないということだと思ふのです。

現況の矢作川研究所はグルメから今まさに板前へ進化したところなのかなというふうに思っていて、ただ、その板前になる道のりというのは非常に細かいことを知らないといけないし、やはり研究とはちょっと違うスタンスで物事に臨まないといけないんです。なので、これからの研究所の将来を考えたときに、板前の部分を本当に研究所でやるのか、それとも先ほどから議論があった行政のほうでやっていただくようにするのか、その辺の役割分担を考えないと、なかなかダムの操作に生かすというところの糸口が見えないかなという、そんな気がしております。何かダムの話から脱線してしまいましたけれど。

○古川 ダムの操作というのはどういう利害団体というか、力が絡むのですか。例えば中部電力だけでコントロールできるわけではないですよ。

○萱場 流域のほとんどの方々が利害関係者になってしまいますよね。だから、技術という問題もあるし、あとは合意形成という問題もあるし、非常に難しい問題が入っている。なので、やはり実務というところに行こうとしたときに相当なハードルがあると思わないといけないのかなと思います。

○古川 ちょっとここに深入りしてしまいますけれど、その場合、最終的にそれが実現しないまでも、そういうことの可能性を追求する科学的価値というか、実践的価値というのを萱場さんはどのようにお考えですか。

○萱場 原因を究明するということと、それを解決するということは表裏ではないのです。原因を究明したというのはあくまでも我々の仮説であって、実際その仮説が本当に正しいかどうかということは、やはり現場で実験しなければわからない。なので、大きな運用に生かすというのは難しいかもしれないけれど、試験的に行政とタイアップをして何かやって仮説を検証していく。こうい

うプロセスを研究所として持つというのは非常に価値が高いのではないかと思います。

○宮田 新見さん。ダムのお話になって、どうでしょうか。

○新見 大変難しい道のりなのだろうなと思いますけれども、こればかりはやらしてもらわないといけない。いろいろな団体をつなぎ合わせてやるというのは研究所があればやれると思うし、研究所がやらなければいけないと思うし、それを成果として学術的にも発表して、全国のダム河川の見本になるような、そんなことを研究所がやってくれないと矢作川の未来がないですね。お願いします。

○古川 私はお願いされる立場ではないのですが、情報発信という意味で、もしそのある種の小実験でもできたら大変な情報発信ですね。だから、そういう意味で計画の段階から記述していくということと、それから発信していくということ。もしこういうアイデアでもやってくれば、実現しなくても、実現しないといけないのですが、新見さんにとっては仮に実現しなくても非常に大きな意味があるんだなというふうに感じます。

○新見 そのときに研究所にいろいろな分野の研究者がそろっているというところがすごい強みでしょうね。

○古川 恐らくそれともう一つは、今まで研究所だけでなく漁協であるとか、土地改良区であるとか、そういうものが一緒になって議論できるという豊田市に非常に独特なコンセンサスルートというか、アーリーナをつくってきたことが多分いろいろな意味で重要な意味を持つてくると思いますので、ぜひこういういろいろなアイデアを出しながら実現したらなと思います。

○宮田 ありがとうございます。そのほかの質問として、水資源が限られている矢作川では水量調整システムをどう構築するかが重要であるというお話です。矢作川では水利調整会議という会議があって、流域でそれぞれ皆さんで話し合っ、いろいろな節水対策をやっているということはあるかなと思います。それから、川を身近に感じるためには地域住民の参加が重要と考えますということです。学生さんからのご意見をいただいております。それから、山本敏哉さんのスライドで「生物群集の保護

を目指す」とされていたが、この表現は誤解を招かないか心配なので「矢作川らしい多様性に富んだ生物群集の保全」のような攪乱と変動を許容する表現に変えるべきではないかというご意見が来ています。それから、オオカナダモの話で、ダムの上下流を研究することによりオオカナダモを消滅させられるのかという質問があります。豊田市内のみでなく矢作川でどこまでオオカナダモは広がっているのか、その影響はということをいただいています。この辺はまた皆さん、お名前を書いていただきましたので、それぞれ研究員のほうからお答えしたいと思います。

それでは、最後の質問といたしますか、ご意見をいただきたいと思いますが、先ほどから、非常に脅されていますけれど、矢作川研究所への注文といたしますか、期待、今後の方向性のようなもの、研究所がどういうふうに進めばいいか、どういうことをやってほしいかということです。ここで答えを出そうとは私は絶対しませんし、引き伸ばしになって、言いつ放しになってしまうという失礼になるかもしれませんけれども、ではどうしましょう。順番を羽根さんから行きましょうか。お願いします。

○羽根 私はやはり都市サイドの人間なものですから、そちらのほうからの注文をしたいと思います。市の行政マンでもありますので余りいい加減なことも言っていてはいけないなと思っております。やはり先ほどの話ではないのですが、矢作川の研究というのはいろいろ聞かせてもらおうと、非常に体系的に、総合的に研究されているなと思いました。そして一部には、間野さんのスライドにあったように、それを町のほうにどういうふうにつなげるんだという提案もありました。できればそういう今後のまちづくりというか、都市住民がたくさん住んでいる町の中に川を生かした研究成果を行政のメニューの一つとして何か一つでも具体化していくようなことを、私は市の中の職員ですとお互いキャッチボールしながらやっていきたいし、逆にそういう気持ちで研究員の方も顔が見えるような関係づくりに努めていただけると非常にありがたいのではないかなと思います。私はちょっとの時間があると、労働組合へ行った帰りにひよこひよこと研究所へ寄って皆さんの顔を見ているのですが、きっとそうやって顔を見ている市の職員は余りいないのではないかなと思いますので、ぜひ開かれた研究所であってほしいなということが願いでございます。

○裕 そうですね。研究所というのは、研究員の人はや

はり自分の目標を持って黙々と研究をする、それはやはり一番大切なことではないかと思います。もう一つの柱として、その研究成果をいかに発表するか、そして、矢作川の現状に対してどんな問題があり、研究者としてどんなことを研究し、それがどうなったか。そこまでやはりきちっと追跡することが大切ではないかと思います。

先ほどから何回もお話が出ていますけれども、とてもまじめに一生懸命やっているけれども、他の部署、あるいは市民など、いろいろなところにその成果の何分の1しか行っていないか、あるいはそれを認めていただける場が少ないかと思いますので、環境部だとか、教育委員会だとか、公園課だとか、そういう関係するところにうまく連携して、何か事業をするときに、こんなことが現状にあります、こういうふうに工夫してくれば生き物にも優しいですとか、そういうふうに他の課と市民に矢作川研究所ここにあり、ちょっとここを通さないとうるさいかなと言われるぐらいにまで存在を認められるようにしてほしいなと思います。ですから、そのためには研究所が矢作川に何が起り、研究所はどう関わって、どういう成果を出したかということをうまく発信することが大切だと思います。

それから、もう一つ矢作川研究所で「Rio」を発行していて、矢作川の現状に何が起っているか、あるいは矢作川の歴史など、いろいろなことがわかるので、あれを上手に発信して、余り川に興味のない人にも矢作川に関心を持ってもらうと良いと思います。市民が矢作川に関心を持てば、やはり川の景観がよければいいに決まっているし、水がとうとうと流れていけばいいし、川がきれいであればいいということになるでしょう。川に来てもらうためには、川に関心を持ってもらうことがとても大切だと思いますので、ぜひ頑張っていただきたいと思っています。

それと、相反するかもしれませんが、余りにも間口を広げ過ぎてしまっても難しい。その辺の兼ね合いが難しいのではないかなと思っております。

○大畑 2点ありまして、既にそういった活動をされているなという気もしているのですが、一つは生物多様性センター的な機能と言ったら抽象的なのですが、現在、豊田市の環境政策課が中心になって豊田市の生物多様性地域戦略を今年度までに3年かけてつくっています。そういった会議の委員としては間野さんや洲崎さんなんかも専門性を生かしてご尽力されているのですが、愛知県には県の自然史博物館というのはいないですね。豊田市で

も豊田市の自然史博物館という名称のものはないのですが、以前からそういったものをつくるべきだという声がないわけではないのです。自然観察の森もあり、研究所もあってという中で、調査・研究を中心としながらも世間で言われている生物多様性保全的な活動の部分では期待したいなというのが一点です。

もう一点、今のいろいろな開発というか、ダムの運用なんかもそういうのに当たるのかもしれませんが、やはり豊田市も大きな町でさまざまな開発も今でもいろいろ行われているし、これからもあるだろうと思っています。決して開発がすべて悪いわけではないのですが、通常なかなか一般市民が自然保護に関しても知るころは大体計画が決まって、もう着工という段階で知ることが大変多いです。もちろんアセスメントの条例などはあるのですが、市の内部にいるからこそいち早く情報もわかって、良い提言ができるということも多いと思います。今も実際、豊田市役所の中ではそういった公共事業に関してチェックするというシステムもあるようで、そういった中で今以上の仕事がどんどん増えたら大変だなとは思いますが、まずはそういった内部でチェックができる人がいますから、しっかりチェックして欲しい。ただし、行政の機関としてはある事業をゼロにするといった意見は難しいのかなと思ったりするので、行政機関としての限界もあるのかなとは思いつつ、そういった面でも威力を発揮していただけたらありがたいと思います。

もう一個、さっきの情報発信の部分で、最初の市長さんの挨拶でもありましたが、あれはどういう意味なのか。税金を使って運用している市の施設なのに、一般市民にはなかなか知られていないということであれば、うちの観察の森もそうかなと思ったりもするし、やはり関心があって関わっている人からするとたくさんの方がいらっしゃって活動もよくわかっている部分もあると思います。しかし、やはり税金を使ってやっている限りはということであれば、うちの場合は無論伝えるというところがメインだからネイチャーセンターという建物もあって、展示コーナーもあります。研究所にはスペースもないかな、基本的には研究施設だから、ふらっと行って対応してもらうわけにはいかない部分もある。目的があって行けば別ですけど、あるいは市役所の庁舎の中でもいいけれども、こういったさまざまな活動がありますから、そういったのを単純に市民が来て伝える部分とか、狭いところでもいいから、ビデオや展示物があって市民の人がふらっと行ける場所があれば、より一般の人が知

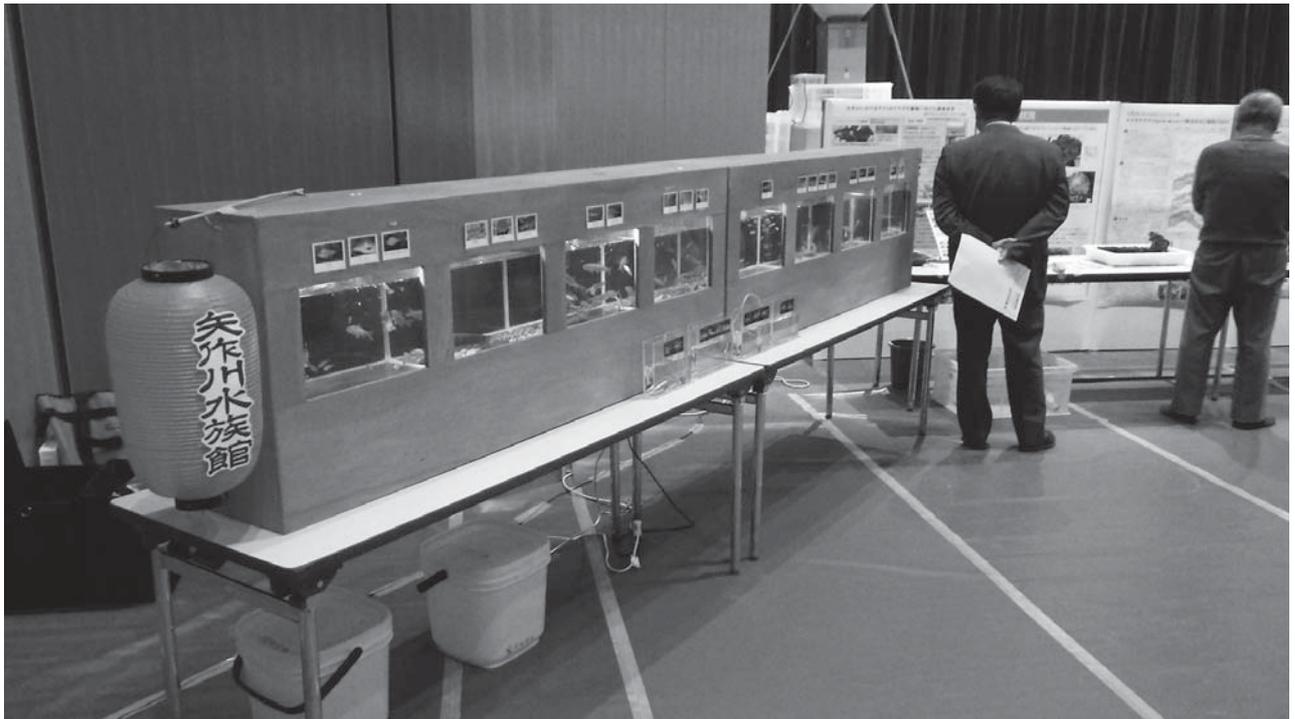
るきっかけになるかなと思いました。以上です。

○新見 僕は天然アユ調査会、研究所の傘下で活動している市民グループとして、いつも僕らをワクワクさせてくれるような大きな一つの筋をやってほしいなと思います。それが例えば矢作川の洪水祭りですけど、そういう大きなことをやっていただいて、僕らも盛り上げていきたいなと思っています。それともう一つ、できたらいつか川沿いに研究所を移転してください。

○丹羽 丹羽です。注文が幾つかあります。その一つは、例えばこれは根羽村でできた積み木の一部分です。まだ試作中です。ファーストウッドですね。子供が最初に使う木の根羽スギの木。例えばこういうものが、これがきつと家づくりにもつながっていく。僕は流域内フェアトレードだと思っています。そういう仕組みづくりの研究部門もできたらどうかというふうに思っています。それがある意味で注文です。

もう一つは、ここに聞き書きの本があります。奥矢作、上矢作、去年は設楽町の段戸の聞き書きをやって、今年は根羽村で聞き書きの本が出ます。僕は流域圏の文化交流だと思っているのですけれど、そういう地域知ですね。川も含めてこれに向き合う仕組みも欲しいです。二つとも人文系のことを言っていますが、そういうことが必要なかなと。そうなってくると、この組織は河川課の範疇では無くなってくると思います。これは独立あるいは市が直結、あるいは流域立的なものをこれから想定していくこともまさに流域圏モデルの中で想定していければいいのかなと思う。その意味で、これは研究所に対する要望ではなく、隣にいる人に言わなければならないのだけれど、矢作新報は豊田市の新聞みたいになってはだめなんです。というのは、流域圏をやってみると県域を超えるすべての情報はシャットアウトされる。長野県にいと、岐阜県、愛知県のことにはわからない。根羽、平谷でもそう。恵那市では愛知、長野の声は聞こえない。同じ流域圏だといいながら、そういう情報難民化をお互いしているというところ、こういう意味で、これは矢作新報頑張れみたいな意味合いになりますけれど。

もう一つ最後に、アリーナというと非常にわかりにくい。先生に対してわかりにくいと言っはいけないが、僕はぬか床だと思っている。ごちそうさん（編者注：テレビドラマ）のぬか床。いろいろな違うものを入れて、毎日、毎日かき回せばいい味が出る。そういういろいろな議論ができる場を矢作川研究所が今、つくってくれて



いる。その役割が本当は一番大きいというふうにも思っています。大いに期待すると同時に、何かちゃぶ台返しみたいだけれど、河川課の中だけに留まるなどということ、嫌なことを最後に言いました。以上です。

○高橋 少しだけ苦言に近いことをお話させていただくと、私も協力させていただいたアユの保全のための16項目の目標というのが今日のスライドで再三紹介されていましたが、ただ、それは一面うれしくもありなのですが、寂しくもあるわけです。寂しいほうはどういう意味かという、もうあれをつくって15、16年たっているわけですが、それを16項目そのままの文言で出てくるというのはちょっとおかしいのではないかと私は思いました。矢作川は特に刻々と変わっているわけですし、新しい保全目標に変わっていないとおかしいです。もう古くなった目標も当然あるのだらうと思います。そういうことがきちんとされていなかったというのはちょっと寂しいなというふうに思いました。16項目は16項目でも全然中身が違う16項目になっていたほうが私は現実的だと思いますし、研究所の価値があるというふうに思います。では、どうしてその目標が変わらなかったのかなというふうに思うと、これは憶測なのですが、一つはアクションの部分がこの20年間欠けていたのではないかと。対策までは立てて、そこからどうするのか、さらにどうしていくのかという部分のアクションが少しやりにくかったのかもしれないです。その部分が

自然相手ですから、なかなか仮説どおりに返ってくるというのはないと思います。そのトライ・アンド・エラーの中から本当に良いものが出てくると思うので、その部分をこれからどんどん磨いていってほしいなというふうに思います。

○萱場 繰り返になってしまうのかもしれませんが、今日のこのシンポジウムのタイトルは実は、「流域を調べ、流域を変える」なのです。矢作川研究所は調べて分析するということは物すごくたくさんやっていて、もうその成果については十分、矢作川を課題として理解するという意味では達成できているのではないかなと思っています。なので、これからはやはり変えるほうですよ。どうやって変えるのかというところの筋書きをもう少し丹念に考えられるといいし、それは研究所だけでやるというわけではなくて、やはり行政だとか漁協さんだとか、いろいろな人に役割分担をしてもらいながら研究所の成果をうまく拾ってもらって、現場に活用してもらうという、その仕組みづくりというのをやはり真剣に考えないといけないのかなと思います。なので、そういう形でもしも実際の川の管理、ダムの管理に研究成果を拾ってもらえれば、おのずと情報発信力もついて、この研究所は役に立っているなというふうに思われると思いますので、ぜひそこに頭を絞っていただいて、これからのまた10年を目指して頑張っていただきたいかなというふうに思います。以上です。

○古川 丹羽さんもおっしゃいましたし、萱場さんもおっしゃったのですけれど、恐らくこの豊田市の中だけでも大学が幾つかありますし、もう少し広げれば幾つも関連する研究機関というのはあるわけです。だから、大学であるとか、市民団体や、漁協、土地改良区などの川の直接権利、漁業権であるとか水利権であるとかを持っている団体、さらに中部電力、トヨタなども巻き込みながら、研究所は今では豊田市の研究所として大きなネットワークのコアになるような、そういう方向性もちょっと考えていく必要があるかなというふうに思っています。そのためにはやはり、よく研究所に行く人間として感じるのは、研究所の中での研究と地元の情報の透明性であるとか、それから非常勤と常勤との間の透明性であるとか、そういうところはもう一切壁を取り払ってしまってオープンにしながら、まず内部でオープンな情報交換をして、それを先ほど言ったようなより大きな場所へと広げていく。そういう組織になってくれるといいなというふうに、この 20 年を見ながら思いました。

○宮田 時間を 5 分ほどもう過ぎてしまいました。大変申し訳ありません。今、8 人のパネラーの方々に今後の注文あるいは期待ということでお話いただきました。8 人の方でもこれだけのさまざまな思いといいますか、求められるものがあるということでもありますので、流域ということで考えますと本当に多くの求められるものがあると思います。そういったことを全部やっていくということもまた難しいことでもあります。流域の皆さんのご意見をいろいろいただきながら研究計画等を立ててやっていきたいなと、そんなふうに思っています。

時間がありませんので簡単に締めさせていただきますと思いますけれども、とにかく情報発信ということが出ましたけれども、最初に求められた流域の課題を科学的な視点で見たデータを皆様に広く公表する、それをオープンにして皆さんに議論していただく、議論の材料にさせていただくということが求められていることだと思います。そういうことで、地域に根差した、矢作川に根差した研究所として今後も頑張っていきたいなと、そんなふうに思っています。

今日はパネラーの皆様、そして、展示物を提供していただいた皆様、今日最後までお話を聞いていただいた皆様、心より御礼を申し上げます。今後とも研究所の運営といいますか、活動の中で今のように激励とご支援のほうを賜りますようよろしくお願い申し上げます。座談

会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。矢作川と矢作川研究所に対してとても熱いエールをいただいたと思い、非常に勇気づけられました。改めてお礼申し上げます。それでは、パネリストの皆さんがご退席されます。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。

どうもありがとうございました。最後に、豊田市副市長 有田幸司より閉会のご挨拶を申し上げます。

○有田 皆さん、どうも長い時間お疲れさまでした。特に前に出てパネリストとして一生懸命議論していただいた 8 人の方に感謝申し上げます。また、先ほど所長も言っていました、今日のこの日のためにいろいろな展示物をご用意いただきましてありがとうございました。いろいろと一定の成果も上げているという矢作川研究所というようなふうにも聞こえましたし、またこれからどんどんやってほしいという期待の面もあったかと思えます。歴史の中で、途中でも紹介がありましたが、最初は第三セクターで発足し、途中から豊田市の機関ということになりました。そういった中でかなりユニークなパブリックな存在で、かつ豊田市との関係を保ちながらどのように活動していくのかということ、豊田市のみならず多くのここにいらっしゃる関係者の方から大変高い注目と関心を集めているんだということ、今日改めて感じた次第です。

一部の方からも発信力が足りないとか、あるいは総合力が足りないといった言い方もいただいたかと思えます。これからますますいろいろなことをやらないといけないと思います。

ただ一つ、皆さんここにいらっしゃる方は今日、わざわざこのシンポジウムへ来ていただいているということで少なからざる関心がおありな方だと思いますが、そういった方を前に私が言うのもあれなのですが、やはり川ですので、自然に従っていろいろなことが起こります。当然それには人の生活から見るとさまざまなリスク、治水であったり、渇水であったり、いろいろなリスクがあります。それをダムのように、いろいろな形で人間が一生懸命な知恵を絞りながらエネルギーとして、あるいは資源として、あるいは環境を保ちながら折り合いをつけながら何とかやっているといったことかと思えます。矢作川研究所もそういったことで多くの方から、この場合はどうしたらいいのだろうかというアカデミックなこと

に根差しながらも実学としてこの場合はどうしたらいいのだろうというところを、多くの方に答えられるような

研究をこれからもどんどんしていくことと期待しております。今日はどうもありがとうございました。

## 2. 広報・流域ネットワークのサポート

本項では矢作川研究所の広報活動と、流域環境の保全に関わる諸団体連携のサポートに関する取組を紹介する。なお2007（平成19）年度までの公開シンポジウム及び矢作川「川会議」の開催内容と2006（平成18）年

度までの矢作川学校の開催件数については、2008（平成20）年に発行された「矢作川研究 No. 12」の「特集 豊田市矢作川研究所12年のあゆみ」で報告済みのため、本項ではそれ以降の開催内容と開催件数を報告する。

### 2-1. 広報活動

#### 矢作川研究

矢作川研究所の調査・研究成果を広く公開するため、1996（平成8）年から1年に1回、年報「矢作川研究」を発行している。流域の自然や社会に関する報告や保全活動の紹介、研究所の調査・研究分野に関わる総説が掲載されている地域研究誌である。発行部数は700部で、流域の自治体と河川行政機関、漁協、農業用水等河川関連団体、教育・研究機関、研究者、環境保全活動関係者、図書館等に配布されている。

#### Rio

矢作川研究所の活動をリアルタイムで紹介する目的で、1998（平成10）年4月より1月に1回、月報「Rio」を発行している。研究所の活動内容、矢作川ほか一般的な川や流域の生物、環境、文化、保全活動等に関する話題を掲載している。当初は白黒印刷だったが2002年4月よりカラー化した。発行部数は1,200部で、「矢作川研究」配布先に加え、多くの市民に矢作川流域の自然と

文化への関心を深めてもらうことをめざして市役所の支所や出張機関（交流館、コミュニティーセンターなど）、小・中学校、高校、高等専門学校にも配布されている。

#### 公開シンポジウム

矢作川研究所の調査・研究成果をよりわかりやすい形で広報するため、1996（平成8）年から1年に1回テーマを設けて公開シンポジウムを行っている（表2-1）。講演とパネルディスカッションには外部の研究者・関係者を招いて学術交流・情報交換を行うとともに、研究所の調査・研究に関する助言を頂く場となっている。

#### インターネットメディア

1999（平成11）年7月より矢作川流域内の情報交換を目的としたメーリングリストの運営を、また2000（平成12）年1月より矢作川研究所の活動を紹介するホームページの運営を行っている。

表 2-1 2008（平成 20）年度以降の研究所シンポジウムと講演のタイトル及び演者.

回	年月日	シンポジウムのタイトル	基調報告のタイトル	演者
14	2009（平成21）年 1月30日	まもりたい矢作川の河畔林 —知られざる生き物たちのメッセ ージ—	鳥から見た河畔林	大畑孝二 (豊田市自然観察の森)
			矢作川河畔林の陸上動物	矢部隆 (愛知学泉大学)
			矢作川河畔林の植生	洲崎燈子 (豊田市矢作川研究所)
15	2010（平成22）年 1月23日	流域で守る生命の豊かさ	流域で考える生物多様性	涌井史郎 (中部大学)
			川に遊び、川の生き物に学ぼう！	中本賢 (俳優)・ 阿部夏丸 (作家)
16	2011（平成23）年 2月5日	矢作川の外来生物	外来生物の脅威： とくに川環境での影響と対策	中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)
			矢作川のカワヒバリガイ	内田朝子・白金晶子 (豊田市矢作川研究所)
			オオカナダモ	椿隆明 (釣り師)
			アメリカナマズ	酒井博嗣 (豊田市矢作川研究所)
			アレチウリ	西村薫 (愛知県河川課)
17	2012（平成24）年 2月11日	川の力を取り戻す ～アユから眺めた矢作川のいま～	アユの漁獲不振を引き起こす 河川改修とそのメカニズム	浅枝隆 (埼玉大学大学院)
			アユから眺めた矢作川の河川 環境	山本敏哉 (豊田市矢作川研究所)
			底生生物からみた矢作川の河 床環境	内田臣一 (愛知工業大学)
18	2013（平成25）年 2月2日	いのちの水をどう分ける？ —矢作川の利用、いままでとこれ から—	矢作川の水利用 —過去・現 在・未来—	伊藤達也 (法政大学)
19	2014（平成26）年 2月1日	流域を調べ、流域を変える —豊田市矢作川研究所の20年とこ れから—	豊田市矢作川研究所 20年の あゆみとこれから	間野隆裕・洲崎燈子・山本敏哉・ 内田朝子・白金晶子・山本大輔・ 長澤壮平 (豊田市矢作川研究所)
20	2015（平成27）年 2月14日	矢作川の水を考える —良い水のものさしとは？—	「緑のインフラ」としてのヨ ーロッパの河川再生と流域で の合意形成	保屋野初子 (環境ジャーナリスト)
			矢作川の水を知り、考える —水質の変遷と課題—	白金晶子 (豊田市矢作川研究所)

## 2-2. 流域ネットワークのサポート

### 矢作川「川会議」

#### 「川会議」開催までの経緯

矢作川流域内、特に豊田市においては、早くから市民の川の自然への意識が高く、行政もまた、市民意識の啓発やコミュニティづくりに取り組んできた。1978（昭和53）年に制定された「豊田市民の誓い」の最初の一節は「緑を育み、川を大切に豊かな自然を愛しましう！」とされている。また、1991（平成3）年には近自

然工法により、古巣水辺公園の整備が開始され、その公園管理のため地元有志による水辺愛護会も発足した。

折りしも 21 世紀初頭の 2001（平成 13）年は、豊田市制 50 周年、矢作川漁業協同組合が創立 100 周年、筏下り大会が開始から 15 周年、古巣水辺公園が 10 周年を迎えた。この関係者が発起人となり、矢作川「川会議」実行委員会を組織した。現在の実行委員会の構成団体は以下の通りである。矢作川研究所は構成団体の一角を成すとともに、実行委員会の事務局を担っている。

表 2-2 2008（平成 20）年度以降の矢作川「川会議」開催内容。

回	年月日	シンポジウムのタイトル	会議・展示・その他
8	2008（平成20）年 5月10日	講演『魚から見る矢作川』 「多摩川紙芝居」中本賢（俳優） 「矢作川水族館紹介」新見克也（矢作川水族館） 「雑魚がおしえてくれたこと」阿部夏丸（矢作川水族館） 対談『Let's ごこ会談 川オヤジたちが、川と雑魚を語る』	
9	2009（平成21）年 5月9日	講演『流域の生物多様性と経済—矢作川の謎—』清野聡子（東京大学大学院） パネルディスカッション『矢作川の風景と生物多様性』	移動水族館（矢作川水族館）
10	2010（平成22）年 5月8日	講演『人と川と生物多様性』辻本哲郎（名古屋大学大学院） パネルディスカッション『みんなで守る矢作川の生物多様性』	移動水族館（矢作川水族館）
11	2011（平成23）年 5月14日	テーマ『矢作川をもっともっと知ろう』 講演「日本の中の矢作川～矢作川の概要～」新高庸介（豊橋河川事務所） 「矢作川の生物」山本敏哉（豊田市矢作川研究所） 「矢作川と人の関わり」古川彰（関西学院大学） ディスカッション「矢作川の今昔物語」	移動水族館（矢作川水族館） 昔の矢作川の写真パネル展示
12	2012（平成24）年 5月12日	テーマ『矢作川をもっともっと知ろうII』 水辺愛護団体活動報告（3団体） 基調講演「川と、子どもがいる風景」川端裕人（作家） ディスカッション「矢作川の今物語」	移動水族館（矢作川水族館） 川で遊ぶ子どもたちの写真パネル展示
13	2013（平成25）年 5月11日	テーマ『矢作川の源流の森を知ろう』 基調講演「森と川と人の深いつながり」蔵治光一郎（東京大学） 報告「市民が守る矢作の森」山本薫久（NPO法人都市と農村交流スローライフセンター） 「豊田市の森づくり」牛丸直樹（豊田市） ディスカッション	移動水族館（矢作川水族館）
14	2014（平成26）年 5月10日	テーマ『矢作川の歴史と人々の暮らし』 講演「古文書・資料にみる矢作川の歴史」伊藤智子（豊田市郷土資料館） 「古代からの矢作川」中根洋治（愛知地名文化研究会） 「川のはなし、あれこれ」倉地格（郷土史研究家）	棒の手「西尾市田貫町 鎌田流」 棒の手「豊田市四郷地区 藤巻検藤流・見当流・蒲田流」 移動水族館（矢作川水族館）

#### 構成団体（18 団体）

矢作川を筏で下る会\*、古巣水辺公園愛護会\*、波岩水辺公園愛護会\*、石倉水辺公園愛護会\*、アド清流愛護会\*、梅坪水辺愛護会\*、御船せせらぎ広場愛護会\*、西広瀬町矢作川水辺愛護会、富田水辺愛護会、有問竹林愛護会、児ノ口公園管理協会、矢作川天然アユ調査会\*、矢作川漁業協同組合\*、矢作川水族館、NPO 法人矢作川森林塾、愛知県豊田加茂建設事務所河川整備課、豊田市河川課\*、豊田市矢作川研究所\*

（2015・平成 27 年 3 月現在、\*は創立時の構成団体）

#### 「川会議」の活動

河川の良好な自然環境を保全する住民活動の定着を図ることは、環境の時代といわれる 21 世紀初頭の重要な課題といえよう。矢作川「川会議」実行委員会は、矢作

川流域の自然環境保全活動を続けている諸団体ならびに関係機関が協力し、これからの活動のあり方を話し合い「森～川～海」の健全な水循環を目指して共通認識を図り、矢作川流域の良好な河川空間の保全、復元に寄与すること」を、目的に掲げている。第 1 回の「川会議」では、次の「矢作川宣言」が採択された（資料）。以降毎年「矢作川の日」（5 月第 2 土曜日）に矢作川の河辺に集い、矢作川における環境保全活動のこれからを考えるシンポジウムを中心にさまざまなイベントを開催している（表 2-2）。また「川会議」は 2002（平成 14）年、子どもたちに川を理解してもらうため、小中学校の環境学習や住民団体への講師派遣、川ガキ養成イベントを担う「矢作川学校」を開校した。

「川会議」は、豊田市外への環境保全活動にも積極的に参加し、諸団体と交流を深めている。第 4 回「川会議」

で基調報告をした、田原市西の浜でクリーンアップ活動を行っている「亀の子隊」の清掃活動に継続的に参加している。また、2010（平成 22）年に国交省豊橋河川事務所により発足した「矢作川流域圏懇談会」に参画している。

## 矢 作 川 宣 言

豊田市制 50 周年、矢作川漁業協同組合創立 100 周年、矢作川筏下り大会開始 15 周年、近自然型・矢作川古舥水辺公園着工 10 周年の記念すべき年を迎え、この 4 団体関係者の呼びかけにより、矢作川愛護諸団体主催の第 1 回矢作川「川会議」が開催される運びになりました。

川の環境と文化は全国一律ではなく、それぞれ個性的でローカルな存在です。矢作川の個性を研究し、活かし、その流域の環境と文化を私たちが享受するための道筋として、ここに以下 10 項目の「矢作川宣言」を提起します。

### ■清流の復活・人と川の関わりを考える「矢作川の日」の制定

1. 毎年 5 月の第 2 土曜日を「矢作川の日」と定め、この日を中心に、矢作川の清流を取り戻す流域市民の活動を展開し、人は川とどう付き合えば良いかを考えます。
2. 「矢作川の日」は、子供たちを川に呼び戻す日でもあります。小川や支流での川遊び、本流での魚釣りの復活に努め、そのための環境整備も提案します。そうした河川網づくりによる水辺環境整備を地域づくりへ発展させたいと考えます。

### ■森・川・海一体の流域環境保全活動と研究の推進

3. 森・川・海一体の広い視野で矢作川の河川環境を考え、特に森・川・海を往来するアユ、サツキマス、ウナギ、カニ等の回遊性の水生生物の生息環境を重視します。矢作川の水生生物の研究・繁殖保護機能を兼ねた矢作川水族館の創設を提案します。
4. 矢作川の清流の源は「源流の森」にあると認識し、源流の森の研究をすすめ、都市市民の協力による森林整備を呼びかけます。

### ■河川運用への積極的提言と行動の推進

5. 市民の水辺利用を無制限に拡大せず、野生生物の生息空間も確保する方向で、矢作川での「人と自然との共生」のあり方を調査研究します。流域市民が末永く誇り得る「質の高い矢作川環境」を創造するためです。

6. 矢作川はダム群による貯水、取水で徹底利用されている全国的にも珍しい川です。「良く利用され、なお美しい矢作川」を実現するために、河川環境に配慮したダム運用のあり方について研究し、提言します。
7. 「矢作川学校」を開設します。矢作川の河川環境や川の文化を守り、継承する人材を養成し、さらに内水面漁業の未来の担い手である少年釣り師たちも育てる川の学校です。「矢作川学校」の開設と運営に積極的に参加します。
8. 河川利用の市民モラルの確立や、河川環境の改善、水生生物の産卵・繁殖保護等のために、豊田市を中心とした河川関係団体で、総合的な河川の案内・指導・監視組織「仮称・矢作川レイジャー」を創設するよう提案します。

### ■矢作川流域ネットワークにむけて

9. 矢作川「川会議」は豊田市内の中流域でスタートしましたが、豊田加茂広域圏全域での活動をめざし、矢作川流域をはじめとして全国的な交流活動も行います。
10. 矢作川愛護の市民団体は、国・県・市町村の河川管理、豊田市矢作川研究所の河川環境研究に積極的に協力します。矢作川流域の緩やかな連携にむけて、ネットワークの核になる矢作川「川会議」の事務局を豊田市矢作川研究所内に置きます。

平成 13 年 5 月 12 日

矢作川「川会議」実行委員会

## 矢作川学校

### 設立の背景と学校概要

矢作川学校は、矢作川の自然や文化を次世代に継承する子どもを育てる目的で設立された。21 世紀の教育改革において、2002（平成 14）年から小中学校で総合的学習が導入されるとともに週 5 日制が定着したなか、矢作川宣言（前項矢作川「川会議」参照）を受け、同年 5 月 11 日「矢作川の日」に矢作川学校が開校された。

矢作川学校は事務局を豊田市矢作川研究所内に置き、理事会（理事長 1 名、副理事長 2 名、常任理事 1 名、理事 14 名、監査 2 名）、職員（校長 1 名、教頭 2 名、講師（36 名））、事務局で運営している。構成する団体は矢作川「川会議」実行委員会 18 団体である。

## 矢作川学校の主な役割

### 1. 自然観察会の講師およびリーダーの養成

矢作川学校では、小中学校および高等学校や公民館など豊田市内外の様々な団体から要請を受け講師の派遣を行っている。講師は、矢作川研究所の研究員、地元の釣り師や虫屋（昆虫愛好家）といった矢作川の自然に詳しい人や矢作川流域に生まれ育ち文化を守っている住民などである。

講師依頼は夏場の矢作川流域における自然観察会が多く、水生生物をはじめ川辺の植物観察や昆虫採集に及ぶ。矢作川学校から派遣された講師が行っている授業の一例を紹介すると次のようである。矢作川から学ぶことをテーマとした環境学習では、手網を持って川に入り、魚や水生昆虫の捕獲のコツを伝授し、採集した生物の特徴を解説しながら観察を行っている。また、教室など室内では、近年注目されている外来生物や水質の問題を通して矢作川の保全について考える授業や子ども時代に矢作川で泳いだ講師自らの経験をもとに、川の歴史や文化について語り伝える授業などを行っている。

一方で、水生生物調査や森林ボランティアのリーダー養成講座の講師依頼にも対応している。リーダーとしての知識や自信の強化につながるように水生昆虫の大まかな判別方法や森の健康診断の手法を指導している。

開講以降、講師依頼数は、毎年30～50回程、年間参加人数のべ数千の実績を上げている（表2-3）。依頼内容も小中学校の環境学習にとどまらず、交流館の生涯教育の一環、環境保全を目的とした団体の生き物観察会、水生生物の観察会や森林ボランティアのリーダー養成講座などと多様化してきている。この傾向から矢作川学校の講師派遣は一般市民に定着し、一段と浸透してきたといえる。

表2-3 2007（平成19）年度以降の矢作川学校の開催件数と参加人数

年度	開催件数*	参加人数(のべ)
2007（平成19）年度	28	1348
2008（平成20）年度	20	1397
2009（平成21）年度	18	961
2010（平成22）年度	34	1348
2011（平成23）年度	35	1393
2012（平成24）年度	50	2366
2013（平成25）年度	41	1608

\*小中学校などへの講師派遣やイベントなどを合算した件数

### 2. 職場体験学習・インターンシップの受け入れ

矢作川学校では近年、中高校の職場体験や大学生のインターンシップの受け入れも多く行っている。職場体験では中高生が研究員と野外調査を一緒に実施することで研究活動を経験し理解できるように、インターンシップでは大学生が研究所の専門分野の研究に関わり、矢作川における野外データ収集の重要性を認識できるよう指導を進めている。

また、全国の研究機関や自治体から矢作川研究所と矢作川の現地視察の要請にも広く対応している。それらの要望に応じ、研究所設立の経緯や特徴、研究活動、各河川愛護団体とNPO法人の取り組みなどを紹介するとともに、矢作川の保全活動や近自然工法施工場所の視察案内を行っている。視察の要望は年々、増える傾向にあり、全国的に矢作川のユニークな研究所と熱心な保全活動が全国的に注目されてきたといえよう。

### 3. 次世代の研究者の育成

将来、矢作川流域の自然や歴史文化の研究者を育成する目的で、平成16年度以降、年に1回、高校生や大学生を対象に「矢作川学校ミニシンポジウム」を開催している。高校生や大学生がお互いの研究成果を発表し合うことで「科学的なまなざし」の面白さに気づき、将来、地域の研究者として活躍してくれることを期待している。

2009（平成21）年度から2014（平成25）年度のミニシンポでは大学生が主体となった十数題の発表が行われた。毎年、件数は少ないが、高校生の数題の発表も定着している。参加者は矢作川に興味を持った一般人などを含め70人前後となっている。

次世代の研究者を育てる学びの場としてのミニシンポジウムは、高校生と大学生では知識量の差があつて、高校生に大学生の発表内容の理解が困難だとした意見の一方で、関心の対象が一致していると理解できることもあり、高校教育と大学教育の隔たりは予想よりも小さかったという評価も得た。いずれにしても、高校生には専門性に富んだ大学生の発表は自分の興味関心に対し強い刺激として受け入れられたようである。大学生にとっては大学間の様々な情報交換の場となるとともに、専門家の意見や評価を受けるよい機会となったことは確かである。近年、高校生時代にミニシンポジウムで発表したことがきっかけで外来生物や河川工学を専攻する大学に進学し、大学生として再び発表する学生、つまりミニシンポジウムのリピーターが出現し、ミニシンポジウムの1

つの目的が達成された場面も生まれている。

# 資料. 2006~2013年度の活動報告

## 1. 業績一覧

ここでは論文、図書、学会発表および当研究所で発行している年報、月報などを一覧としてあげた。

### 2006年度

- 近藤繁生・問野隆裕 (2006) トビケラの蛹に寄生するユスリカ. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 101.
- 問野隆裕 (2006) II 各論 9 昆虫類 (分担執筆). 三重県レッドデータブック 2005 動物, 三重県環境森林部自然環境室: 195-371.  
(財) 三重県環境保全事業団.
- 問野隆裕 (2006) ギフチョウの3個体交尾. やどりが, 208: 40-41.
- 問野隆裕 (2006) 愛知県の絶滅昆虫. 昆虫と自然, 41(6): 33-35.
- 問野隆裕 (2006) 河畔林の動物. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 96.
- 問野隆裕 (2006) 熊野灘沿岸地域のガ類. 熊野灘沿岸照葉樹林の昆虫, 三重昆虫談話会編: 217-283. 三重昆虫談話会.
- 問野隆裕 (2006) 三重県熊野灘沿岸の注目すべき蛾類. 誘蛾燈, 184: 85-91.
- 問野隆裕 (2006) 日本鱗翅学会第53回大会のレポート. 月刊むし, 437: 50.
- 問野隆裕・鈴木亨治 (2006) ツシマクロモンシャチホコの幼虫について. 蛾類通信, 238: 231-232.
- 白金晶子 (2006) 川底にぶつぶつ出現—ヤマトビゲラ属の一種. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 99.
- 白金晶子・山本敏哉・野崎健太郎・三戸勇吾・山田佳裕 (2006) 矢作川における水質形成機構—ダムと土地利用に注目して—. 日本陸水学会第70回大会, 愛媛県松山市.
- 洲崎燈子 (2006) 矢作川の河畔林. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 96.
- 洲崎燈子・蔵治光一郎・丹羽健司 (2006) 森の健康診断 100円グッズで始める市民と研究者の愉快的な森林調査. 築地書館, 東京.
- 洲崎燈子・蔵治光一郎・丹羽健司 (2006) 森の健康診断 市民と研究者の協働による森林調査の試み (東京農業大学). 日本森林学会第117回大会, 東京都世田谷区.
- 洲崎燈子・中坪孝之 (2006) 矢作川中流域の植生とその管理に関する研究. 韓国環境科学会, ソウル市.
- 高橋 聡 (2006) 河辺とつながること. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 96.
- 内田朝子 (2006) よ藻やま話. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 98.
- 山本敏哉 (2006) 矢作川河口におけるアユの生態調査からみえてきたこと. 日本陸水学会東海支部会定例研究会 (名古屋女子大学), 愛知県名古屋市.
- Yamamoto, T., Y. Kohmatsu and M. Yuma (2006) Effects of summer drawdown on cyprinid fish larvae in Lake Biwa, Japan. *Limnology*, 7: 75-82.
- 問野隆裕 (2007) 平成18年度・研究所の活動. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 問野隆裕 (2007) 都市空間の変化と共に変わる鳥の生息. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 問野隆裕 (2007) 答志島のガ類. 三重自然誌, 11: 58-64.
- 問野隆裕 (2007) 豊田市都心部のチョウ類群集 (3) —都心部と矢作川との比較—. 矢作川研究, 11: 53-60.
- 問野隆裕・高木 久 (2007) 豊田市中心市街地の鳥類生息調査報告. 矢作川研究, 11: 13-20.
- 問野隆裕・吉安 裕・榎木寿一 (2007) ハマグルマ属植物 (キク科) を摂食する日本から未知のトリバガ. 日本蛾類学会 2007年大会 (大阪弥生会館), 大阪府大阪市.
- 三戸勇吾・山田佳裕・山本敏哉・中島沙知・白金晶子・堤裕昭・多田邦尚 (2007) 知多湾における堆積物中の有機物の起源. 日本水産学会誌, 73: 1-7.
- 白金晶子 (2007) 矢作川流域の土地利用とそれに関わる水質. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 洲崎燈子 (2007) 人工林の混み具合と調査面積. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 洲崎燈子 (2007) 豊田市中心市街地の自然緑地. 矢作川研究, 11: 21-34.
- 高橋 聡 (2007) 「越戸」観光略史～繰り返される情熱について～ (中間報告). 矢作川研究, 11: 61-68.
- 高橋 聡 (2007) 矢作川流域における生活の変化と環境の変化. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 内田朝子 (2007) カワシオグサの成長と光環境. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 内田朝子・飯間雅文 (2007) 光強度, 明暗周期, 栄養塩濃度が, カワシオグサ *Cladophora glomerata* の増殖に及ぼす影響. 矢作川研究, 11: 47-52.
- 内田臣一・白金晶子・内田朝子・田中良樹・土井幸二・松浦陽介 (2007) 矢作川におけるカワヒバリガイの大量発生後の大量死. 矢作川研究, 11: 35-46.
- 山本敏哉 (2007) 年によって変わる天然アユの成長. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 105.
- 山本敏哉・内田朝子 (2007) 特集 河川管理—ダムと水産 内水面漁業を支える地域の研究所. 日本水産学会誌, 73(1): 98-102.

### 2007年度

- 近藤繁生・問野隆裕・小林 貞・山本 優 (2007) 矢作川上中流域における夏季灯火採集により採集されたユスリカ類. 第18回ユス

- リカ研究会（岐阜大学）、岐阜県岐阜市。
- 間野隆裕（2007）故田中 蕃氏を偲んで。やどりが, 214: 21-22.
- 間野隆裕・中西元男（2007）尾鷲市でキマエコノハを採集。ひらくら, 51(2): 28.
- 間野隆裕・高橋匡司・高橋 昭・西原かよ子（2007）愛知県 RDB 見直しとその内容。日本鱗翅学会東海支部総会兼第 136 回例会（名城大学）、愛知県名古屋市。
- 間野隆裕・富永 智（2007）シロトリバによく似た日本未記録のトリバガ。蛾類通信, (243): 315-318.
- 白金晶子（2007）ダムが矢作川の水質形成に及ぼす影響。日本陸水学会東海支部会第 5 回定例研究会（相山女学園大学）、愛知県名古屋市。
- 洲崎燈子（2007）矢作川 森の健康診断—市民と研究者の協働による人工林調査の取り組み—。応用生態工学会第 11 回研究発表会（名古屋大学）、愛知県名古屋市。
- 洲崎燈子・蔵治光一郎・丹羽健司（2007）人工林の混み具合の評価手法に関する検討「矢作川 森の健康診断」における取り組み。第 118 回日本森林学会大会（九州大学）、福岡県福岡市。
- 山本敏哉（2007）暖冬をもたらす水中の生物への影響。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 107.
- 山本敏哉・宮田昌和（2007）市民と共同してアユや川を調査する。天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム第 2 回 2007 年矢作川大会、愛知県豊田市。
- 山本敏哉・水野 修・中根耕造・藤井芳秋・大岩謹次（2007）大型糸状藻類と付着藻類を与えたアユの成長の比較。2007 年度日本魚類学会年会（北海道大学）、北海道札幌市。
- 内田朝子（2007）矢作川学校へのお誘い。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 108.
- 内田朝子・飯間雅文（2007）ダム下流で異常発生する大型糸状緑藻 *Cladophora glomerata* の抑制を目的とした室内培養の取り組み。応用生態工学会第 11 回研究発表会（名古屋大学）、愛知県名古屋市。
- 間野隆裕（2008）平成 19 年度・研究所の活動。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 117.
- 間野隆裕（2008）河畔林に息づくさまざまな昆虫。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 117.
- 間野隆裕（2008）愛知県と三重県のレッドリスト選定ガ類について。日本鱗翅学会東海支部第 137 回例会（三重県教育文化会館）、三重県津市。
- 間野隆裕（2008）故田中蕃氏業績目録。矢作川研究, 12: 86-94.
- 間野隆裕（2008）全国の都道府県 RDB のガ類選定状況について。日本蛾類学会 2008 年大会（東京芸術劇場）、東京都豊島区。
- 間野隆裕（2008）矢作川研究所設立と運営に関わった田中蕃さんの素顔—著作などから見える自然への思い—。矢作川研究, 12: 73-78.
- 白金晶子（2008）田中先生の思い出。矢作川研究, 12: 83.
- 白金晶子・土屋沙代・野崎健太郎・山本敏哉（2008）矢作川中流域における河川横断面の環境解析：2. 河床付着物の横断面分布。日本陸水学会東海支部会第 10 回研究発表会、静岡県浜松市。
- 洲崎燈子（2008）上～中流の河辺の木々—大きなのっぼの河畔林—。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 117.
- 洲崎燈子（2008）田中蕃さんの思い出。矢作川研究, 12: 81-82.
- 洲崎燈子・蔵治光一郎・丹羽健司（2008）市民主導の「森の健康診断」と人工林管理の将来展望。第 119 回日本森林学会大会（東京農工大学）、東京都府中市。
- 洲崎燈子・蔵治光一郎・丹羽健司（2008）矢作川流域の人工林の健康状態の現状—2005～2007 年「森の健康診断」の結果から—。矢作川研究, 12: 103-110.
- 高橋 聡（2008）今なお生きる学びの志。矢作川研究, 12: 84-85.
- 高橋 聡（2008）川辺の村々の暮らし～河畔林整備基礎調査から。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 117.
- 田中淑喬・間野隆裕・山本光人・加藤芳郎・宮野昭彦（2008）長野県大町市葛温泉（第 34 回みくに会）で採集した蛾類。蛾類通信, 247: 393-398.
- 内田朝子（2008）田中蕃さんの思い出。矢作川研究, 12: 83-84.
- 内田朝子・白金晶子（2008）ドキッ!? 復活 カワヒバリガイ。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 117.
- 矢作川研究所（2008）[特集] 豊田市矢作川研究所 12 年のあゆみ。矢作川研究, 12: 7-71.
- 山本敏哉（2008）アユの大量遡上をもたらしたもの～大量遡上したのに釣れないのはなぜか?～。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 117.
- 山本敏哉（2008）ダムの魚道を活用した実験施設でみられたアユの成長遅滞。日本陸水学会東海支部会第 10 回研究発表会、静岡県浜松市。
- 山本敏哉（2008）偉大なる博物学者が遺したもの。矢作川研究, 12: 82.

## 2008 年度

- 近藤繁生・間野隆裕・小林 貞・山本 優（2008）矢作川中流域におけるユスリカの終夜採集。日本衛生動物学会第 60 回大会（自治医科大学）、栃木県下野市。
- 間野隆裕（2008）キモンホソバノメイガが多数飛来。蛾類通信, 250: 456.
- 間野隆裕（2008）愛知県の蛾類に関する文献および記録種の追加（Ⅱ）。佳香蝶, 60(234): 37-45.
- 間野隆裕（2008）食虫植物を食う虫 モウセンゴケトリバ。豊田市矢作川研究所月報 Rio, 120.
- 間野隆裕（2008）第 5 章 昆虫類 第 13 節 鈴鹿市のガ類。鈴鹿市の自然—鈴鹿市自然環境調査報告書—: 742-792. 鈴鹿市。
- 間野隆裕・宮野昭彦（2008）キオビカナサントガの本州（三重県）からの記録。蛾類通信, 250: 452.
- 間野隆裕・佐々木明夫（2008）カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エゾスジヨトウの愛知県豊田市の記録。誘蛾燈, (194): 105-107.
- 間野隆裕・笹俣泰彦（2008）愛知県豊田市からのホソオチョウの記録と愛知・岐阜両県の既存データの整理。佳香蝶, 60(235): 243-

244.

- 問野隆裕・石谷正宇 (2008) ガ類群集の多様性とライトトラップによる環境調査法の検討—その利点と問題点—日本昆虫学会第 68 回大会 (香川大学), 香川県高松市.
- 問野隆裕・高橋匡司 (2008) 愛知県のオオムラサキの分布と幼虫の生態知見. 日本鱗翅学会東海支部 2008 年総会兼第 139 回例会 (名城大), 愛知県名古屋.
- 高橋匡司・問野隆裕 (2008) 豊田市にもついに定着したホソオチヨウ. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 123.
- 遠 志保 (2008) 枝下川神社にて終水式. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 125.
- 内田朝子 (2008) 矢作川を研究する若い学人—第 4 回矢作川学校ミニシンポジウムを終えて—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 118.
- 山本敏哉 (2008) 三河湾でのアユ仔稚魚の分布特性. 2008 年度日本魚類学会年会 (愛媛大学), 愛媛県松山市.
- 山本敏哉・三戸勇吾・山田佳裕・野崎健太郎・吉鶴靖則・中田良政・新見克也 (2008) 矢作川河口周辺海域 (三河湾西部) におけるアユ仔稚魚の分布と底質との関係. 日本水産学会誌, 74: 841-848.
- 近藤繁生・問野隆裕・小林 貞・山本 優 (2009) 矢作川上中流域におけるユスリカの終夜採集. 矢作川研究, 13: 17-20.
- 問野隆裕 (2009) ベニミスジコヤガ, スマベウスキヨトウ, ニセムモンシロオオメイガを愛知県の小河川河口域で採集. 誘蛾燈, (195): 10.
- 問野隆裕 (2009) オオムラサキが語る矢作川の河畔環境. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.
- 問野隆裕 (2009) クロメンガタスズメの愛知県からの記録. 誘蛾燈 (195): 25-26.
- 問野隆裕 (2009) 大台ヶ原のガ類相の変化と植生環境の劣化. 日本鱗翅学会東海支部第 140 回例会 (三重県教育文化会館), 三重県津市.
- 問野隆裕 (2009) 日本で発見された *Lantanophaga pusillidactylus* (Walker, 1864) ランタナトリバについて. 日本蛾類学会 2009 年大会 (愛知県勤労会館), 愛知県名古屋市.
- 問野隆裕 (2009) 平成 20 年度・研究所の活動. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.
- 問野隆裕 (2009) 矢作川上中流域のガ類群集. 矢作川研究, 13: 39-60.
- 問野隆裕・洲崎燈子・大畑孝二・矢部 隆 (2009) 矢作川上流域の河畔林整備に関する提案—在来生物保全の観点から—. 矢作川研究, 13: 123-127.
- 問野隆裕ほか (2009) レッドデータブックあいち 2009 動物編. 愛知県. p. 690.
- 白金晶子 (2009) 外来生物カワヒバリガイの大量発生と大量死の謎を追って. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.
- 白金晶子 (2009) 矢作川における外来生物カワヒバリガイの餌資源について. 日本陸水学会東海支部会第 11 回研究発表会, 愛知県名古屋市.
- 白金晶子・内田朝子 (2009) 矢作川におけるカワヒバリガイの大繁殖, 大量死, そして現在. 第 56 回日本生態学会盛岡大会, 岩手県盛岡市.
- 須摩靖彦・問野隆裕 (2009) 愛知県矢作川河畔林のトビムシーフライングインターセプトトラップ (FIT) とベイトトラップ (BT) 法の調査—. 矢作川研究, 13: 61-68.
- 洲崎燈子 (2009) ソウル 清溪川を見てきました. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 126.
- 洲崎燈子 (2009) 河畔のケヤキ林は大人社会? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.
- 洲崎燈子 (2009) 矢作川上中流域の河畔林 特集にあたって. 矢作川研究, 13: 5-6.
- 洲崎燈子・鈴木勝巳・山原勇雄・山崎玲子 (2009) 矢作川上中流域の河畔植生. 矢作川研究, 13: 7-16.
- 遠 志保 (2009) 河畔林整備基礎調査 / 枝下用水 120 年史編集作業. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.
- 内田朝子 (2009) アユの餌となる藻類の質と量. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.
- 内田朝子 (2009) 矢作川におけるカワヒバリガイの浮遊幼生の流程分布. 矢作川研究, 13: 145-148.
- 山本敏哉 (2009) アユの卵を求めて. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 127.
- 山本敏哉 (2009) 上流と中流でのアユの釣れ具合の違い—解禁前によく釣れた上流と 8 月以降に好調な中流—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 128.

## 2009 年度

- 長谷川明子・内田朝子 (2009) 生物多様性は街づくりから (インタビュー). 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 135.
- 問野隆裕 (2009) 「日本産ガ類レッドリスト選定に向けての一試行」. 日本産蝶類の衰亡と保護 第 6 集: 85-105.
- 問野隆裕 (2009) キモンホソバノメイガの名古屋市からの記録. 誘蛾燈, (197): 116.
- 問野隆裕 (2009) レッドデータブックあいち 2009 の概要. 愛知県環境調査センター.
- 問野隆裕 (2009) 蛾類による環境調査法の検討—豊田市矢作川河畔林調査から— 日本鱗翅学会東海支部 2009 年総会兼第 142 回例会 (名城大学), 愛知県名古屋市.
- 問野隆裕 (2009) 第一編自然第二章生物第四節昆虫ガ類. 作手村誌: 148-150.
- 問野隆裕 (2009) 日本のガ類の多様性と生息の現状—地方版レッドデータブックへの掲載状況—発表・総合討論のコーディネーター. 第 8 回日本鱗翅学会自然保護セミナー (大阪市立自然史博物館), 大阪府大阪市.
- 問野隆裕・旭 和也・真野恭平 (2009) クロテンオオメコガの名古屋市からの記録. 蛾類通信, (252): 41.
- 問野隆裕・宮野昭彦 (2009) 日本のガ類の多様性と生息の現状—地方版レッドデータブックへの掲載状況—. 日本産蝶類の衰亡と保護 第 6 集: 13-17.
- 問野隆裕・佐々木明夫 (2009) 紀伊半島大台ヶ原のガ類. 三重自然史 12: 81-95. 三重自然史の会.
- 問野隆裕・石谷正宇・北原正彦・青木典司・三橋弘宗・石井 実 (2009) シンポジウム「昆虫類の種多様性と生息環境特性—昆虫の種群の特性とそれを生きた環境評価事例—. 日本昆虫学会第 69 回大会 (三重大学), 三重県津市.
- 問野隆裕・富永 智 (2009) 石垣島でホウビカンジュにつく日本未記録種イヅミシダメイガ (新称). 蛾類通信 (253): 63-64.

- 枝下用水 120 年史編集委員会 (2009) 枝下用水 120 年 座談会 枝下用水のこれから. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 134.
- 白金晶子 (2009) 矢作川における外来二枚貝カワヒバリガイの成長と餌資源の関係. 日本陸水学会第 74 回大会 大分大会, 大分県大分市.
- 洲崎燈子 (2009) 5 年間の「矢作川 森の健康診断」からわかったこと. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 136.
- 遠 志保 (2009) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 1. 枝下用水史編集委員会.
- 遠 志保 (2009) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 1. ダイジェスト版.
- 山本敏哉 (2009) 三河湾でのアユ仔稚魚の分布特性. 海洋と生物, 184: 501-507.
- 山本敏哉 (2009) 水田の生き物を復活させよう. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 133.
- 間野隆裕 (2010) ガ類環境調査の一記録—愛知県豊田市での調査から—. 日本鱗翅学会東海支部第 143 回例会 (三重県教育文化会館), 三重県津市.
- 間野隆裕 (2010) 河畔林の昆虫から見た生息環境. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 間野隆裕 (2010) 平成 21 年度・研究所の活動. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 間野隆裕 (2010) 矢作川上中流域のトビケラ目、ハチ目、ハエ目. 矢作川研究, 14: 17-26.
- 岡部貴美子・升屋勇人・川添和英・間野隆裕・牧野俊一 (2010) タイワンタケクマバチの侵入と随伴ダニのリスク. 日本応用動物昆虫学会第 54 回大会 (千葉大学), 千葉県千葉市.
- 白金晶子 (2010) 矢作川中流のカワヒバリガイの特徴. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 白金晶子・野崎健太郎 (2010) 5. 河川中流域 一人と川の関係をみつめる 5.3 河川中流域の水質と底生生物. 身近な水の環境科学—源流から干潟まで—. 日本陸水学会東海支部会 (編): 61-70. 朝倉書店, 東京.
- 洲崎燈子 (2010) 河畔のケヤキ林はいつ, どうやってできたのでしょうか. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 洲崎燈子 (2010) 矢作川上中流域の河畔植生 II. 矢作川研究, 14: 27-33.
- 遠 志保 (2010) 川というフィールドから. 日本口承文芸学会会報「伝え」, 46.
- 遠 志保 (2010) 「枝下用水事件」を追う (枝下用水 120 年史編集). 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 遠 志保 (2010) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 2. 枝下用水史編集委員会.
- 内田朝子 (2010) カワヒバリガイ浮遊幼生の最近の動向. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 内田朝子 (2010) 矢作川におけるカワヒバリガイの浮遊幼生の流呈分布 (その 2) およびダム湖内での生息状況. 矢作川研究, 14: 81-88.
- 矢部 隆・野呂達也・間野隆裕 (2010) 矢作川河畔林の両生類と爬虫類. 矢作川研究, 14: 35-38.
- 山本敏哉 (2010) 5. 河川中流域 一人と川の関係をみつめる 5.4 魚の世界—アユをめぐる川と人. 身近な水の環境科学—源流から干潟まで—. 日本陸水学会東海支部会 (編): 70-77. 朝倉書店, 東京.
- 山本敏哉 (2010) 矢作川で産まれるアユの子どもの数はどれくらい? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 139.
- 山本敏哉・永友昌秀 (2010) 明治用水頭首工におけるアユの遡上データ (1998~2009 年). 矢作川研究, 14: 73-76.
- 吉田恭司・丹羽智子・大沼淳一・白金晶子・野崎健太郎 (2010) 深層爆気が行われているダム湖の水質, 水質分布の観測—愛知県巴川・羽布ダム湖における事例—. 陸の水, 43: 37-44.

## 2010 年度

- Jinbo, U., T. Kato, N. Utsuki, O. Kurashima, M. Yago, M. Ito, T. Hirowatari, A. Kawakita, T. Mano, Y. Sakamaki and S. Yoshimatsu (2010) Current progress of DNA barcoding of Japanese Lepidoptera. 名古屋市立大学開学 60 周年記念シンポジウム「生物多様性の科学—遺伝子・ゲノムと遺伝資源—」International Symposium on Biodiversity Sciences 2010 (ホテルルブラ王山), 愛知県名古屋市.
- 間野隆裕 (2010) *Lantanophaga pusillidactylus* (Walker, 1864) ランタナトリバ (新称) の日本および台湾からの発見. 蛾類通信, (257): 178-180.
- 間野隆裕 (2010) ガ類レッドリスト作成の現状と問題点. 日本鱗翅学会第 57 回大会 (東京大学弥生キャンパス), 東京都文京区.
- 間野隆裕 (2010) ハナジロクチバの名古屋城 (名古屋市中区) の記録. 蛾類通信, (257): 175.
- 間野隆裕 (2010) 河畔林におけるガ類群集. 日本鱗翅学会第 57 回大会 (東京大学弥生キャンパス), 東京都文京区.
- 間野隆裕 (2010) 生き物の多様性とヒトの生活. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 143.
- 間野隆裕 (2010) 都市と生きものがすむ里山のこれから. 咲楽 10 月号: 24. アドキッドインフォメーション.
- 酒井博嗣 (2010) 原点回帰. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 141.
- 酒井博嗣 (2010) 矢作川のアメリカナマズの現状. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 147.
- 洲崎燈子 (2010) 吉野川探訪記. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 140.
- 洲崎燈子 (2010) 矢作川流域の社叢林 (1) 八幡神社 (旭地区). 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 142.
- 洲崎燈子 (2010) 矢作川流域の社叢林 (2) 伊熊神社 (旭地区). 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 143.
- 洲崎燈子 (2010) 矢作川流域の社叢林 (3) 六所神社 (松平地区). 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 145.
- 遠 志保 (2010) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 3. 枝下用水史編集委員会.
- 遠 志保 (2010) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 4. 枝下用水史編集委員会.
- 遠 志保 (2010) 用水における開墾者祭祀—枝下用水と西澤真蔵—. 日本民俗学会 (東北大学), 宮城県仙台市.
- 内田朝子 (2010) 水草の外来生物オオカナダモ、再び大繁殖. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 142.
- 内田朝子 (2010) 速報! 籠川の化石林? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 145.
- 内田朝子 (2010) 北アメリカ・五大湖のくっつき病—カワシオグサと外来二枚貝のつながり—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 145.
- 内田朝子・梅村麻希 (2010) アユの餌となる付着藻類の質と量. 応用生態工学会第 14 回研究発表会 (北海道立道民活動センター) かで

- る 2.7). 北海道札幌市.
- 内田良平 (2010) 気持ちはゼロからスタート. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 141.
- 山本敏哉 (2010) 研究最前線 矢作川でのアユの釣れ具合をめぐって. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 141.
- 山内健生・間野隆裕 (2010) シロフクロトリバの蛹. 蛾類通信, (257):170.
- 間野隆裕 (2011) オオウスグロノメイガの三重県からの記録. 誘蛾燈 203:22.
- 間野隆裕 (2011) 平成 22 年度・研究所の活動. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 150.
- 間野隆裕 (2011) 矢作川上中流河畔の竹林植生群落調査. 矢作川研究, 15:5-26.
- 間野隆裕・池竹弘旭・戸田尚希・横地鋭典・吉田雅澄・矢崎充彦 (2011) 第 2 章第 8 節市内のホットスポット昆虫調査報告. 平成 22 年度 生物多様性保全推進支援事業 名古屋ため池生き物いきいき計画事業報告書:37-45. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
- 間野隆裕・三浦重光 (2011) 愛知県岡崎市のクロメンガタスズメとメンガタスズメの記録. 佳香蝶 63(245):25-26.
- 間野隆裕・洲崎燈子 (2011) 矢作川の生き物マップ. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 150.
- 間野隆裕ほか (2011) III. ため池生物調査 (調査方法) 4. 昆虫. IV. ため池生物調査 (調査結果) 4. 昆虫類. 2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業調査報告書:33-34, 73-97. 名古屋ため池生物多様性保全協議会事務局.
- 白金晶子 (2011) 矢作川中流におけるカワヒバリガイの定着と餌資源について. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 150.
- 白金晶子 (2011) 矢作川中流における外来二枚貝カワヒバリガイの消長とその要因. 日本陸水学会東海支部会第 13 回研究発表会 (長野県下伊那郡阿南町 阿南少年自然の家), 長野県下伊那郡.
- 達 志保 (2011) 『矢作川資料研究』第 2 集発行にむけて. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 150.
- 達 志保 (2011) 開削者祭祀から見る枝下用水. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 149.
- 達 志保 (2011) 矢作川資料研究第 2 集『枝下用水 120 年史資料集』その 1. 枝下用水史編集委員会.
- 内田朝子 (2011) 「要注意外来生物オオカナダモ」駆除なう (Now). 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 148.
- 内田朝子 (2011) カワヒバリガイの発生を長期監視する新しい手法の試み. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 150.
- 内田朝子 (2011) 矢作川におけるカワヒバリガイの浮遊幼生などの発生状況 (2007～2009 年). 矢作川研究, 15:65-70.
- 内田朝子・白金晶子 (2011) 豊田市立西広瀬小学校の透視度調査記録. 矢作川研究, 15:107-110.
- 内田良平 (2011) COP10 関連事業を終えて. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 148.
- 山本敏哉 (2011) 大幅に減少した豊田市の魚類の多様性. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 150.
- 山本敏哉・宮田昌和 (2011) 市民と協働してアユや川を調査する. アユを育てる川仕事, 古川 彰・高橋勇夫 (編):72-77. 築地書館, 東京.

## 2011 年度

- 間野隆裕 (2011) ナイトウノメイガを愛知県豊田市で採集. 誘蛾燈 205:106.
- 間野隆裕 (2011) ヒメゴマダラノメイガ, シロミヤクツガとクロテンシロミズメイガの記録. 誘蛾燈, 205:103.
- 間野隆裕 (2011) 愛知県田原市のクロメンガタスズメの記録. 佳香蝶 248:83.
- 間野隆裕 (2011) 昆虫今昔 一矢作川中流域 平戸橋～枝下町一. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 158.
- 間野隆裕・岡田正哉 (2011) 2009 年の名古屋ため池調査で得られたカマキリ目, ゴキブリ目, ナナフシ目, バッタ目. 佳香蝶 63(246):51-54.
- 間野隆裕・岩元やよい (2011) 遂に名古屋で発見されたアカボシゴマダラ. 佳香蝶 248:89.
- 間野隆裕・高崎保郎 (2011) キモンホソバノメイガ *Simibotys butler* (South) の飼育記録及び幼虫, 蛹の記載. 誘蛾燈, (204):41-46.
- 間野隆裕・今村隆一・宮本佳典 (2011) 本土未記録種ハスオビイラガの三重県からの記録. 誘蛾燈, 205:105-106.
- 間野隆裕・三浦重光 (2011) 愛知県岡崎市でホシシャクを記録. 佳香蝶 248:83-84.
- 間野隆裕・山田昌幸・高橋匡司 (2011) 矢作川流域におけるウスバシロチョウの分布拡大～田中蕃 (2006) を中心に～. 日本昆虫学会第 71 回大会 (信州大学松本キャンパス), 長野県松本市.
- 間野隆裕・山田昌幸・高橋匡司 (2011) 矢作川流域のウスバシロチョウ分布拡大実態と現状. 日本鱗翅学会東海支部 2011 年総会兼第 148 回例会 (名城大学), 愛知県名古屋市.
- 間野隆裕・中山 惇 (2011) 志摩半島のガ類. 志摩半島の昆虫:249-301.
- 三浦孝司・野場義輝・達 志保 (2011) 枝下用水とともに 豊田土地改良区理事長・三浦孝司さんに聞く. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 155.
- 新見幾男・中條義氏・野場義輝・山本敏哉 (2011) 座談会: 矢作川の水量と水利用について. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 154.
- 酒井博嗣 (2011) ナマズがいなくなる日～湿地環境の消失～. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 154.
- 白金晶子 (2011) ザザムシー伊那地方の伝統食文化一. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 156.
- 達 志保 (2011) 『枝下用水日記—120 年史編集—』vol. 5. 枝下用水史編集委員会.
- 達 志保 (2011) 『枝下用水日記—120 年史編集—』vol. 6. 枝下用水史編集委員会.
- 達 志保 (2011) 『枝下用水日記—120 年史編集—』vol. 7. 枝下用水史編集委員会.
- 達 志保 (2011) 給食にアユがでた! 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 157.
- 内田朝子 (2011) 川の思い出一用水編一. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 155.
- 内田朝子・横山亜希子 (2011) 矢作川においてダム下流の石はなぜ黒い? 応用生態工学会第 15 回研究発表会 (金沢学院大学), 石川県金沢市.
- 内田良平 (2011) たくさんの魚たちがやってきました! 一西大排水路 実験水路一. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 156.
- 山本敏哉 (2011) 矢作川の水量を考える. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 153.

- 山本敏哉 (2011) 矢作川の水利用がアユの生息に与える影響 (予察). 日本魚類学会, 青森県弘前市.
- 山本敏哉・梅村鎔二 (2011) 道楽からサービス業へとかわりゆく河川漁業. 川の湖を見る・知る・探る:陸水学入門. 日本陸水学会 (編): 112-113. 地人書館. 東京.
- 久保田耕平・深谷 緑・間野隆裕・佐藤信輔・鎌田直人 (2012) プナアオシヤチホコの遺伝的分化. 第 123 回日本森林学会大会 (宇都宮大学), 栃木県宇都宮市.
- 間野隆裕 (2012) 日本ファウナに新たに加わったトリバガ. 日本蛾類学会 2012 年大会 (東京大学弥生キャンパス), 東京都.
- 間野隆裕 (2012) 平成 23 年度・研究所の活動. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 間野隆裕 (2012) 矢作川流域のウスバアゲハの分布動態. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 間野隆裕ほか編・著 (2012) 愛知県の移入動植物 ブルーデータブックあいち 2012. p. 225. 愛知県環境部.
- 酒井博嗣 (2012) 天然アユと養殖アユ 釣れ具合に差はあるのか. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 白金晶子 (2012) ほてい池の現状と水質浄化の試み. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 白金晶子 (2012) 矢作川中流における外来二枚貝カワヒバリガイの成長と寿命. 矢作川研究, 16: 41-46.
- 白金晶子・内田朝子・内田臣一 (2012) 矢作川流域における外来二枚貝カワヒバリガイの発見から現在までの経過. 陸の水, 54: 43-52.
- 白金晶子・八木明彦 (2012) 調整池における水質浄化の試み. 日本陸水学会東海支部会第 15 回研究発表会 (静岡大学農学部上阿多古演習林), 静岡県浜松市.
- 洲崎燈子 (2012) 海と山をつなぐ道—宮本常一「塩の道」紀行—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 160.
- 洲崎燈子 (2012) 矢作川河畔における流程による生息種の変化. 第 59 回日本生態学会大会・第 5 回東アジア生態学会連合大会 (龍谷大学), 滋賀県大津市.
- 洲崎燈子 (2012) 矢作川河辺の生き物マップ 2—植物の豊かさを決めるもの—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 達 志保 (2012) 農業用水における開削者祭祀—枝下用水と西澤真蔵—. 矢作川研究, 16: 27-40.
- 達 志保 (2012) 矢作川資料研究第 3 集『枝下用水 120 年史資料集』その 2 の発行にむけて. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 内田朝子 (2012) 矢作川のダム下流の石はなぜ黒い? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.
- 山本敏哉 (2012) アユの遡上と流下におよぼす河川流量の影響. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 161.

## 2012 年度

- Gielis, C. and T. Mano (2012) Additions to the Pterophoridae fauna of Japan (Lepidoptera). Tinea, 22: 149-155.
- 岩下恭朗・鈴木伸洋・天野俊二・白金晶子 (2012) 矢作川水系における特定外来種カワヒバリガイの最小産卵殻長. 水産増殖, 60: 503-510.
- 久保田耕平・深谷 緑・間野隆裕・佐藤信輔・鎌田直人 (2012) プナアオシヤチホコのミトコンドリア遺伝子にもとづく遺伝的分化. 日本昆虫学会第 72 回大会 (玉川大学), 東京都町田市.
- 熊澤美弓・達 志保 (2012) 枝下用水 点の記. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 162.
- 間野隆裕 (2012) タイワンタケクマバチ発見の経緯と地元での取り組み. 2012 年度第 9 回昆虫 DNA 研究会 (基礎生物学研究会共催) 研究集会 (自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター), 愛知県岡崎市.
- 間野隆裕 (2012) マエジロツトガの本州の記録. 蛾類通信, 265: 377.
- 間野隆裕 (2012) 矢作川流域の草地と昆虫. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 164.
- 間野隆裕・林 房子 (2012) アサギマダラの特異な行動. 佳香蝶, 252: 87-88.
- 間野隆裕・喜多村矢・杉本泰一 (2012) クロメンガタスズメの豊田市の記録. 佳香蝶, 252: 65.
- 間野隆裕・佐藤裕子・大主順一 (2012) 名古屋市におけるクワトゲエダシャク幼虫の記録. 佳香蝶, 252: 85-86.
- 間野隆裕・山田昌幸・高橋匡司 (2012) 愛知県矢作川流域におけるウスバシロチョウの分布動態. 昆虫と自然, 47(6): 8-11.
- 間野隆裕・山田昌幸・高橋匡司 (2012) 矢作川流域におけるウスバアゲハの分布動態と食性について. 日本鱗翅学会第 59 回大会 (愛媛大学), 愛媛県松山市.
- 間野隆裕ほか (2012) II-4 熱田神宮の生物調査と外来生物対策. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書, 39-40, 113-114, 117-118, 119-122.
- 奈良井隆・間野隆裕 (2012) キキョウトリバの島根県からの記録. 蛾類通信, 264: 354-355.
- 白金晶子 (2012) 矢作川の流量減少に季節性はあるのでしょうか? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 167.
- 洲崎燈子 (2012) 久澄橋下流のせせらぎと河畔林・育て! 河畔林. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 163.
- 洲崎燈子 (2012) 凶暴な美人とマント—豊田の特定外来生物—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 166.
- 達 志保 (2012) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 8. 枝下用水史編集委員会.
- 達 志保 (2012) 『枝下用水日記—120 年史編集—』臨時増刊号. 枝下用水史編集委員会.
- 内田朝子 (2012) 要注意外来生物オオカナダモ Now その 2. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 165.
- 山本敏哉 (2012) アユの遡上生態を探る. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 163.
- 間野隆裕 (2013) 矢作川流域のウスバアゲハの分布と食餌植物、シカの関係. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.
- 間野隆裕・山田昌幸・高橋匡司 (2013) ウスバアゲハの分布拡大・縮小とその要因—矢作川流域を例に—. 日本鱗翅学会東海支部第 152 回例会 (三重県教育文化会館), 三重県津市.
- 間野隆裕・山田昌幸・高橋匡司 (2013) 矢作川流域におけるウスバアゲハの分布動態と食性. 矢作川研究, 17: 127-134.
- 酒井博嗣・中條義氏・松井 聡・山本敏哉 (2013) 矢作川におけるアユの友釣り調査データ (1998 年~2011 年). 矢作川研究, 17: 107-114.
- 白金晶子 (2013) 水田を抱える調整池の水質と浄化法の検討. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.

- 白金晶子・八木明彦 (2013) 水位低下による調整池の水質浄化の試み. 日本陸水学会東海支部会第 15 回研究発表会, 愛知県西尾市.
- 白金晶子・山本敏哉・洲崎燈子・内田朝子・間野隆裕・達 志保 (2013) 矢作川本川の流量に関連する長期データ. 矢作川研究, 17: 135-142.
- 洲崎燈子 (2013) みんなで作る学校の森～(仮) 第 2 浄水小学校の森しらべ～. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.
- 洲崎燈子 (2013) 矢作川の矢作ダム下流における陸上植物の流程による変化. 矢作川研究, 17: 115-126.
- 達 志保 (2013) 『枝下用水日記—120 年史編集—』 vol. 9. 枝下用水史編集委員会.
- 達 志保 (2013) 「枝下用水を生きる」農家の日記を通して見えてきた高度経済成長期の豊田市の特徴的な農家経営. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.
- 達 志保 (2013) 枝下用水を生きる—「ある農家の日記から」—. 矢作川研究, 17: 25-43.
- 内田朝子 (2013) 特定外来生物カワヒバリガイの最新情報. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.
- 内田朝子・横山亜希子 (2013) 石に付着したマンガンの流程分布. 日本陸水学会東海支部会第 15 回研究発表会, 愛知県西尾市.
- 山本大輔 (2013) 矢作川のアメリカナマズ減少中? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.
- 山本敏哉 (2013) 矢作川でふ化したアユ仔魚は増水を待っている? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 172.
- 山本敏哉・山本大輔・水野 清 (2013) 矢作川におけるアユ仔魚の流下パターンの特徴. 日本水産学会春季大会, 東京都品川区.

## 2013 年度

- Hattori, N., A. Uchida, M. Sano and T. Murakami (2013) Sensory analysis of taste of Ayu sampled from different river environments. Food Science and Technology Research, 19: 479-483.
- 間野隆裕 (2013) トリバガ科 日本産蛾類標準図鑑. 学研.
- 間野隆裕 (2013) 河原環境に生息する陸上生物の今. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 178.
- 間野隆裕 (2013) 三重県北部でイブキスズメ・カバフキシタバ・エチゴハガタヨトウとオオキイロアツバを同時に採集. やどりが, 237: 31.
- 間野隆裕 (2013) 日本産トリバガの新記録種とまれな種の追加記録. 蛾類通信, 267: 416-421.
- 間野隆裕・佐藤裕美子 (2013) センチコガネの歩行成虫を名古屋市内で 12 月に確認. 佳香蝶, 256(65): 76.
- 間野隆裕・佐藤裕美子 (2013) 名古屋市都心部でのジャコウアゲハの一記録と放チョウについて. 佳香蝶, 256(65): 51-52.
- 間野隆裕・佐藤裕美子 (2013) 名古屋市都心部のビル 11 階でツチイナゴを記録. 佳香蝶, 256(65): 49-50.
- 間野隆裕・吉安 裕 (2013) キク科ハマグルマ属植物を寄主とする *Hellinsia* 属の 1 新種 (トリバガ科) の記載と生活史. 蝶と蛾, 64: 36-41.
- 長澤壯平 (2013) 「からだ」で自然を知ること. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 179.
- 白金晶子 (2013) 矢作川の揚水発電所を見学してきました! 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 176.
- 洲崎燈子 (2013) なぜ生き物の豊かさを守るの? (仮) 豊田市生物多様性戦略の策定に向けて思うこと?. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 173.
- 洲崎燈子 (2013) タコノアシさん、こんにちは! 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 179.
- 内田朝子 (2013) 矢作川における要注外来生物オオカナダモの分布変化. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 174.
- 内田朝子・大八木希・加藤元海・中西正己 (2013) 矢作川の生態系を支える付着藻類の栄養状態. 陸水学雑誌 (Japanese Journal of Limnology), 74: 63-72.
- 内田良平 (2013) 水路に魚たちは戻ってきた? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 180.
- 山本大輔 (2013) 意外にガツガツ?! 草食 (藻食) 系の魚たち. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 175.
- 山本大輔 (2013) 変な魚あらわる? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 180.
- 山本敏哉 (2013) 籠川のほとりに生き物の豊富な浅い池を造成しました. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 177.
- 真鍋泰彦・間野隆裕・宮野昭彦・中尾健郎・阪本優介・宇木浩太 (2014) 2012 年 6 月の沖縄島の蛾類. 蛾類通信, 270: 502-511.
- 間野隆裕 (2014) 「日本の野外で初めて繁殖したムシヤクロットバメシジミその現状と今後 (中間報告). 日本鱗翅学会東海支部第 155 回例会, 三重県津市.
- 間野隆裕 (2014) 外来種?! ムネアカハラビロカマキリの豊田市での分布拡大. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.
- 間野隆裕・宇野総一 (2014) 豊田市におけるハラビロカマキリとムネアカハラビロカマキリの分布動態と形態について. 矢作川研究, 18: 41-48.
- 三宅大輔・洲崎燈子 (2014) 林業からの地域づくり—串原林業のめざすもの—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 182.
- 長澤壯平 (2014) 矢作川流域の森林環境の変遷がもたらした河川環境への影響—恵那市上矢作町飯田洞川周辺の航空写真と語りを用いて—. 矢作川研究, 18: 53-61.
- 長澤壯平 (2014) 矢作川流域はどう変わってきたか—岐阜県上矢作町の場合—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.
- 白金晶子 (2014) 池の貯水量を減らすと水質はきれいになる? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.
- 白金晶子 (2014) 矢作川本川の流量に関わる長期データ. 日本陸水学会東海支部会第 16 回研究発表会, 三重県鳥羽市.
- 洲崎燈子 (2014) すげの里周辺の森づくりを考える. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.
- 洲崎燈子 (2014) 行政・市民・研究者の協働による地域の森づくり. 第 61 回日本生態学会, 広島県広島市.
- 洲崎燈子 (2014) 地域との共働による森づくり—(仮) 第 2 浄水小学校の事例—. 矢作川研究, 18: 49-52.
- 内田朝子 (2014) オオカナダモはどのようなところで増えやすいのでしょうか? 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.
- 内田朝子・白金晶子 (2014) 矢作川における要注外来生物オオカナダモ (*Egeria densa*) のメッシュ調査. 日本陸水学会東海支部会第 16 回研究発表会, 三重県鳥羽市.
- 内田朝子・白金晶子・洲崎燈子・碓 伸夫・水野 修・椿 隆明 (2014) 矢作川における要注外来生物オオカナダモ (*Egeria*

*densa*) の繁茂状況と駆除活動. 矢作川研究, 18: 33-40.

山本大輔 (2014) 耳石を用いた年齢の推定—矢作川でアメリカナマズは繁殖しているか—. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.

山本大輔・山本敏哉・水野 清 (2014) 矢作川におけるアユ流下仔魚の採集データ (2000~2011 年). 矢作川研究, 18: 19-24.

山本大輔・酒井博嗣・阿部夏丸・新見克也・吉田 誠 (2014) 矢作川におけるチャンネルキャットフィッシュの生息状況と採集方法. 矢作川研究, 18: 25-31.

山本敏哉 (2014) 逢妻交流館を拠点とした外来カメの駆除の試み. 豊田市矢作川研究所月報 Rio, 183.

山本敏哉・酒井博嗣・新見克也 (2014) 矢作川におけるアユの生息数と友釣りによる釣果との関係. 矢作川研究, 18: 13-17.

## 2. マスコミ報道

研究所の活動や所員に関する事柄がとりあげられた新聞・雑誌記事, テレビ報道を掲載した.

日付	タイトル・内容	媒体
2006.4.21	矢作川天然アユ調査会 10 周年シンポ JA あいち豊田ホールで 5 月 7 日 (土)	矢作新報
2006.4.21	第 2 回矢作川森の健康診断 豊田・恵那・根羽の森で 6 月 3 日 (土)	矢作新報
2006.5.8	矢作川「優等生」アユが激減 「10 月生まれ」海から戻れず三河湾へドロ影響?	朝日新聞
2006.5.10	この人に聞きたい アユ遡上へダム放流工夫 矢作川漁協組合長 新見 幾男さん	朝日新聞
2006.5.12	鮎 やっと来た 半月遅れで豊田へ大群	矢作新報
2006.5.12	13 日矢作川「川会議」行事	矢作新報
2006.5.12	14 日矢作川筏下り 20 回記念大会	矢作新報
2006.5.19	増水の矢作川に 70 艇 第 20 回矢作川筏下り大会 古巣水辺公園で矢作川「川会議」	矢作新報
2006.5.19	森の健康診断 1000 人基金 寄付で森の応援団に	矢作新報
2006.5.26	40 万尾を突破! 矢作川の天然アユ	矢作新報
2006.6.9	豊田・恵那・根羽の人工林 5 万 ha で実施 第 2 回「矢作川森の健康診断」 市民調査団 350 人が楽しみながら科学的に	矢作新報
2006.6.16	矢作川あす 17 日 (土) アユ解禁 天然遡上 68 万尾 豊漁の昨年上回る遡上量	矢作新報
2006.7.7	天然アユ派漁協が全国シンポ 06 年静岡天竜川で 07 愛知矢作川 08 高知物部川	矢作新報
2006.7.7	総遡上量 77 万尾 矢作川のアユ遡上調査終了	矢作新報
2006.7.7	矢作川 川底で異常増殖中! 特定外来生物のカワヒバリ貝	矢作新報
2006.7.14	集まれ 川ガキ 上流・下流で矢作川学校	矢作新報
2006.8.4	アユ冷水病は親から仔にも伝染! ? 矢作川天然アユ調査会が研修	矢作新報
2006.8.18	ほっとイブニング カワヒバリガイが大発生	NHK
2006.8.21	矢作川—異常繁殖するカワヒバリガイ—パネル展開催中	ひまわりネット ワーク
2006.8.25	矢作川研究所・漁協 共催 矢作川学校 3 会場 250 人 親子参加で川遊び体験	矢作新報
2006.8.29	矢作川の異常を知って! 豊田市役所ロビーでカワヒバリガイ展	矢作新報
2006.9.8	豊田都心で釣れるアユ 今年も 80% が天然	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2006.10.6	カワヒバリ貝突然 9 割が大量死	矢作新報
2006.10.13	明治用水ダム旧魚道を改装 アユ産卵場に再整備 矢作川水系の水産資源保護事業	矢作新報
2006.10.22	豊田の森「不健全」 市民による「健診」報告	朝日新聞
2006.10.27	第 2 回矢作川森の健康診断報告会 豊田・恵那・根羽での市民調査の結果を発表 豊田市内が最も過密林	矢作新報
2006.11.17	天然アユ産卵ピーク 早く仔魚を三河湾へ 国交省・中部電力が矢作川の夜間流量増	矢作新報
2006.11.17	矢作川の天然アユの子 海への流下がピークに	矢作新報
2006.12.26	「豊田の森が一番過密」 矢作川森の健康診断報告会	読売新聞
2007.1.1	森の健康診断 先進地豊田市で第 1 回全国会議	矢作新報
2007.1.10	豊田市矢作川研究所 山本敏哉研究員に聞く 今年の矢作川 春の天然遡上に期待大 仔アユ流下量が過去 7 年間で最多	矢作新報
2007.1.19	「森の健康診断」全国会議 発祥の地・豊田市に全国から 210 人	矢作新報
2007.2.1	小さな藻の大きな役割	ひまわり ネットワーク
2007.4.13	追いつめられた生きものたち 48 スジボソヤマキチョウ 田中 蕃	矢作新報
2007.4.27	矢作川明治ダム 天然アユ 100 万尾に 子ども連れで遡上見物を	矢作新報
2007.5.3	暖冬影響 大量に遡上 アユ命の飛躍	中日新聞
2007.5.11	矢作川の天然アユ 空前の 500 万尾	矢作新報
2007.5.11	矢作川「川会議」 越戸・古胤水辺公園で 12 日（土）	矢作新報
2007.5.11	追いつめられた生きものたち 51 チャマダラセセリ 田中 蕃	矢作新報
2007.5.12	矢作川 長良川 謎の大量遡上	名古屋 タイムズ
2007.5.18	天然アユ情報 上流の試験釣り好調解禁 6 月 2 日に前倒し	矢作新報
2007.5.25	豊田市内 565 万尾 矢作川は天然アユ・放流アユで満ばい 陸上輸送ダム上流へ分散も事業に	矢作新報
2007.5.25	矢作川アユで満杯 各ダム間の生息尾数を集計	矢作新報
2007.6.8	岡崎の矢作川で森の健康診断	朝日新聞
2007.6.12	人工林から森を知る	毎日新聞
2007.6.13	市民 250 人参加 “科学の目” 楽しむ	矢作新報
2007.6.15	追いつめられた生きものたち 56（最終回） 我々のなすべきこと 田中 蕃	矢作新報
2007.6.29	矢作川のアユ漁 豊田地区は絶不調	矢作新報
2007.7.13	矢作川と巴川の鮎 いまだ不漁つづく 水温の上昇まち	矢作新報
2007.7.13	里山に住む生きものたち 4 ハッチョウトンボ 間野隆裕	矢作新報
2007.7.20	豊田で国交省矢作川シンボ	矢作新報
2007.7.27	やっと天然アユシーズン開幕へ 矢作川水質回復 8 月上中旬	矢作新報
2007.7.27	国交省シンポジウム 矢作川の「これから」語る	矢作新報
2007.7.27	里山に住む生きものたち 6 ゼフィルス（ミドリシジミ類） 間野隆裕	矢作新報
2007.8.31	ダム湖でアユが天然繁殖 豊田市の羽布ダム	矢作新報
2007.10.5	史上空前 700 万尾遡上の今シーズンを検証 矢作川下流域アユ大不漁の原因は	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2007.10.12	里山に住む生きものたち 16 ウラナミジャンメ 問野隆裕	矢作新報
2007.11.4	素敵な宇宙船地球号 外来種は警告する！ Vol. 5 大都会の水がめを襲う侵略者	テレビ朝日 系列
2007.11.9	矢作川「森の健康診断」報告シンポ 流域の人工林 標高ひくいほど過密	矢作新報
2007.11.16	天然アユ復活シンポジウム 全国天然アユ保存ネットワークが矢作川と共催で 第2回大会	矢作新報
2007.11.16	第2回天然アユを増やすと決めた漁協のシンポ 豊田市で420人参加	中日スポーツ
2007.11.16	里山に住む生きものたち 21 クロミドリシジミ 問野隆裕	矢作新報
2007.11.30	里山に住む生きものたち 23 ウスバツバメガ 問野隆裕	矢作新報
2008.1.9	森の再生願い「健康診断」	日本経済新聞
2008.1.18	豊田市矢作川研究所シンポ 産文センターで31日午後	矢作新報
2008.2.8	豊田市矢作川研究所シンポ 川の自然を生かした都市環境を考える	矢作新報
2008.2.20	中心市街地の自然 1 豊田のまちの水と緑 洲崎燈子	東海愛知新聞
2008.2.21	中心市街地の自然 2 豊田のまちの水と緑 洲崎燈子	東海愛知新聞
2008.2.23	中心市街地の自然 3 豊田のまちの水と緑 洲崎燈子	東海愛知新聞
2008.3.28	天然アユの一番仔 早くも到達	矢作新報
2008.4.11	古巣水辺公園に優秀賞 第7回土木学会「デザイン賞」選考で 矢作川に近自然風景を創出	矢作新報
2008.4.24	アユ元気いっぱい 矢作川で遡上活発	名古屋 タイムズ
2008.4.25	矢作川研究所 アユ自動計数装置導入 明治・越戸ダムの魚道にカメラ	矢作新報
2008.4.25	矢作ダムの水で水産資源保護 回遊魚の遡上期にどっと放流 国交省・農水・中電合意 天然アユ用「水量」も貯める 豊田市営矢作川研究所と市民団体が効果調査	矢作新報
2008.5.2	朝日新聞社東京本社で「明日への環境賞」贈呈式	矢作新報
2008.5.2	アユ成長ジャンプ 豊田	中日新聞
2008.5.2	夏へ われ先に 矢作川・稚アユ遡上	朝日新聞
2008.5.23	矢作川アユ6月1日解禁 上流は絶好調宣言 試験釣り 中・下流もまざまざ 明治用水ダム魚道天然鮎58万尾突破！	矢作新報
2008.5.30	矢作川6月1日アユ解禁 上流好スタート予想 第2回試験釣りも好調	矢作新報
2008.6.6	矢作川「川会議」支流の個性を大切に 今年は雑魚の視点でディスカッション	矢作新報
2008.8.1	豊田土地改良会館竣工 豊田市矢作川研究所第3セクターで創立	矢作新報
2008.8.8	28.4cmのアユ！ 矢作中流の川口地区で	矢作新報
2008.9.5	矢作川天然アユ調査会 釣師も科学者の端くれに 現地調査だけではなく科学分析も	矢作新報
2008.9.12	矢作川の味くらべ 8地点240尾で「きき鮎会」	矢作新報
2008.10.3	08 矢作川天然アユ調査データ	矢作新報
2008.10.31	水産資源の持続的再生 矢作ダムから増加放流 今年も11月中旬実施へ	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2008.10.31	県委託でトヨタ技術者 OB が授業づくり 山は雨水吸うスポンジ 雑木林・人工林・野原の水の吸い込み量実験	矢作新報
2009.1.1	豊田市矢作川研究所 アユ産卵に大幅な遅れ 秋の降雨量不足が影響	矢作新報
2009.1.1	トヨタ技術者 OB が企画 子供を里山へ 現地現物で学ぶ 矢作川研究所と西広瀬小が協力	矢作新報
2009.1.16	豊田市矢作川研究所シンポジウム 今年のテーマは河畔林	矢作新報
2009.1.23	矢作川「河畔林シンポジウム」 30 日矢作川研究所	矢作新報
2009.2.6	テーマは河畔林 豊田市矢作川研究所シンポジウム	矢作新報
2009.2.10	豊田市矢作川研究所 中部の環境を考える 流域の連帯、全国へ	中日新聞
2009.3.13	矢作川河口に稚アユ集結	矢作新報
2009.3.20	高校生も学会気分 矢作川学校ミニシンポ	矢作新報
2009.4.21	元気よくジャンプ!	中日新聞
2009.4.21	ふるさと矢作川 上れや上れ	朝日新聞 (夕刊)
2009.4.21	若アユ遡上 豊田市内矢作川	東海愛知新聞
2009.4.21	矢作川・アユ遡上ピーク	中日新聞
2009.4.27	アユ遡上に沸き立つ	中日スポーツ
2009.5.1	第 9 回矢作川「川会議」 矢作川の風景づくりと生物多様性 基調講演や討論を開催予定	矢作新報
2009.6.5	第 9 回矢作川「川会議」 矢作川の風景づくりと生物多様性を考える開催	矢作新報
2009.6.12	第 5 回 矢作川森の健康診断 一般市民 265 人が人口林を一斉調査	矢作新報
2009.7.10	田んぼに棲む生物たち蘇れ 豊田南部で農業団体や愛知県が共同事業着手	矢作新報
2009.7.17	やはぎウィークリー 全国で「矢作川だけにある」調査記録	矢作新報
2009.7.24	枝下用水 120 年史 昨年編集スタート 5 年で完成・出版へ	矢作新報
2009.7.24	豊田南部の柳川瀬公園内 池に外来ウキクサ大繁殖	矢作新報
2009.8.24	なんべいさやかのこちらパトロール隊 「矢作川を調査!」内田朝子・山本敏哉	ひまわり ネットワーク
2009.8.28	市民を無料招待 鮎たべに川へ来て! 第 1 回 矢作川天然鮎感謝祭開催予定	矢作新報
2009.9.4	外来生物カワヒバリガイを調査～豊田東高校の生徒たち 名大と矢作川研究所が指導	矢作新報
2009.9.4	アユ博士高橋勇夫さん出版 矢作川天然アユ調査会顧問『天然アユが育つ川』	矢作新報
2009.9.11	豊田都心で川の収穫祭「第 1 回 矢作川天然鮎感謝祭」 市民 450 人がアユ 1400 尾ペロリ	矢作新報
2009.10.2	自然保護の現場から 一生き物の代弁者たち—矢作川の森林研究	矢作新報
2009.10.18	矢作川 トラ刈り奏功	読売新聞
2009.11.6	「ぶんや日記」～ 矢作川の水産資源保護は産・学・官の共働で軌道に	矢作新報
2009.11.6	枝下用水 120 年史の第 1 回研究発表会	矢作新報
2009.11.6	矢作川森の健康診断報告会 緑ダム効果実験～過密林は雨水浸透悪い結果に	矢作新報
2010.1.18	「生命の豊かさ」テーマにシンポ	中日新聞
2010.2.5	第 15 回 豊田市矢作川研究所シンポジウム COP10 に向け初の名古屋開催～基調講演は「生物多様性」	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2010.2.12	外来二枚貝用水で大繁殖 カワヒバリガイ	読売新聞
2010.3.1	特定外来生物 カワヒバリバイ増殖	朝日新聞
2010.3.4	豊橋で生物多様性シンポ	東海愛知新聞
2010.4.2	ぼんつ倶楽部	矢作新報
2010.4.13	ラジオでお会いしましょう！ オオカナダモ駆除活動	CBC ラジオ
2010.4.14	いきもの元年 県内生息の外来種カワヒバリガイ 豊田東高、DNA 解析	朝日新聞
2010.4.23	第 6 回 矢作川森の健康診断参加募集 今年は小原と下山の 60 地点調査	矢作新報
2010.4.26	外来水生植物「オオカナダモ」豊田矢作川で大量繁殖	読売新聞
2010.4.30	今年も矢作川「川会議」シンポジウム テーマは生物多様性の実現	矢作新報
2010.4.30	ひと 遠 志保 矢作川研究所研究員・枝下用水 120 年史編集委員会主任	矢作新報
2010.5.9	親子ら 130 人アマゴ釣り	中日新聞
2010.5.10	本番直前 週上前線に異常あり アユ本隊がまだ来ない	中日スポーツ
2010.5.14	第 10 回矢作川「川会議」生物多様性テーマに開催	矢作新報
2010.6.4	たぬき汁 御船町の込行でホタルが大乱舞	矢作新報
2010.6.8	矢並湿地「学術的価値高い」 ラムサール候補地検討委員会が視察	中日新聞・ 豊田版
2010.6.8	豊田市がラムサール条約登録目指す 矢並湿地を視察	毎日新聞
2010.6.8	豊田の 3 湿地 ラムサール条約「登録の価値ある」	読売新聞
2010.6.30	雑記帳～矢作川研究所が特定外来種のアメリカナマズ駆除研究にのりだした	毎日新聞
2010.9.13	いのち未来へ 心ない「密猟」危機に拍車	日本経済新聞 (夕刊)
2010.10.8	西三河の外来種は今 天然アユを脅かすオオカナダモ	中日新聞・ 豊田版
2010.10.19	堤防トラ刈りし昆虫保護	読売新聞
2010.10.28	オオカナダモ駆除 矢作川で NPO 法人など	毎日新聞
2010.11.6	外来種水草 オオカナダモ 矢作川に異常繁茂	朝日新聞
2010.11.7	矢作川でオオカナダモ大量繁殖 外来の藻類駆除開始	中日新聞・ 豊田版
2010.12.15	オオカナダモの駆除へ重機導入	朝日新聞
2011.1.1	NPO・豊田市・国交省スクラム 矢作川環境整備が軌道にオオカナダモの駆除も始まる	矢作新報
2011.1.14	外来生物テーマ 矢作川研究所シンポ	矢作新報
2011.2.26	あす四万十市で環境フォーラム	高知新聞
2011.4.29	自然保護の現場から一生き物の代弁者たち一	矢作新報
2011.4.29	枝下用水 120 年史 資料集その 1 出版	矢作新報
2011.5.13	矢作川「川会議」古巣水辺公園で明日 14 日	矢作新報
2011.5.15	野外で矢作川の環境を考える 官民 250 人 生き物、開発の歴史紹介	読売新聞
2011.5.17	矢作川もっと知ろう！ 豊田で「川会議」、250 人参加	中日新聞
2011.5.20	お年寄りの昔話キラリ 今年の「川会議」は今昔談義	矢作新報
2011.5.27	コンクリート底はがしたら？ 1 カ月で魚のオアシス	矢作新報
2011.6.2	昆虫の魅力知って	中日新聞・ 名古屋版
2011.6.24	豊田市猿投町 ケバエの仲間が大発生	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2011.7.13	笑劇派のこちらパトロール隊2「育て！ 川ガキ～矢作川学校の取組み」	ひまわりネットワーク
2011.8.26	発信器で行動さぐれ（アメリカナマズ調査）	矢作新報
2011.9.17	カゲロウが大量発生 豊田・平戸橋「車の運転注意を」	中日新聞
2011.9.21	矢作川の天然アユをPR 釣って食べて「感謝祭」	中日新聞・豊田版
2011.9.23	塩焼き食べて川に関心を	矢作新報
2011.11.11	ちょっとの工夫で魚の住み家に コンクリート底を剥がして大成果	矢作新報
2011.11.16	学校づくり児童と共に	中日新聞・豊田版
2011.11.25	特定外来種 アメリカナマズの24時間をさぐれ 東大と矢作川研究所のバイオリギング調査	矢作新報
2011.12.2	豊田の生物多様性どう守る 地域戦略づくりの専門委員会	矢作新報
2012.1.13	矢作川研究所がカギに 豊田市生物多様性地域戦略の推進役	矢作新報
2012.2.3	寒さに負けずカナダモ調査	矢作新報
2012.2.12	アユで矢作川を考えよう	中日新聞・三河版
2012.2.17	流量・砂量減り川底疲弊 川の力を取り戻せ	矢作新報
2012.2.17	「条例化前提に進めて」 豊田市生物多様性地域戦略委員会	矢作新報
2012.2.22	外来魚・アメリカナマズ駆除へ 矢作川をせき止め生態系を調査	朝日新聞
2012.2.22	70センチアメリカナマズ生息 豊田市調査 矢作川、他の外来種も	読売新聞
2012.2.22	外来ナマズ水抜いて調査 豊田の矢作川本流初の「かいぼり」	中日新聞・豊田版
2012.2.24	矢作川史上最大かいぼり 阿摺ダム下の淵の水抜き大調査 特定外来種 アメリカナマズの巣窟探る	矢作新報
2012.3.18	アユ守れ新兵器 圧縮空気噴射外来の藻駆除	朝日新聞・尾張知多版
2012.3.18	豊田のNPO 矢作川の外来種水草駆除 開発器具を試運転	中日新聞・豊田版
2012.4.6	豊田市街地の矢作川一外来のオオカナダモ一水草繁茂の被害 軽量の「駆除機」を開発	矢作新報
2012.4.6	豊田都心に新たな水辺公園 課題は今後の管理体制 国交省・NPO・市民・豊田市が協議へ	矢作新報
2012.5.3	矢作川アユいきいき	朝日新聞
2012.5.9	32万匹アユの跳躍	中日新聞
2012.5.9	アユの遡上最盛期 豊田・矢作川	毎日新聞
2012.5.18	up! オオカナダモ現場取材	名古屋テレビ
2012.5.18	矢作川「川会議」川に子どもを呼び戻すには？	矢作新報
2012.7.6	豊田上郷 うねべ里山 加納造園が地域貢献賞	矢作新報
2012.7.6	自然保護の現場から一生き物の代弁者たちー	矢作新報
2012.7.13	ほっとイブニング オオカナダモ現場取材	NHK テレビ
2012.7.23	笑劇派のこちらパトロール隊2「矢作川を守ろう！」	ひまわりネットワーク
2012.8.3	ぶんや日記～上矢作ダム建設中止の地域振興に連帯感情を！	矢作新報
2012.8.24	ユネスコスクールの豊田東高校 持続可能な社会テーマに森の健康診断スタート	矢作新報
2012.9.7	天然鮎感謝祭アルバム 三河湾と矢作川の恵みに感謝	矢作新報
2012.9.14	川口地区が今年も高評価 天然アユ調査会が「きき鮎会」	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2012.9.16	ぶらり三河 豊田・矢作川 天然アユ地道に保全	中日新聞・豊田版
2012.10.31	排水路の魚助け出せ 改修工事で下流に移動	中日新聞・豊田版
2012.11.2	豊田市高橋地区 農業排水路の改修工事でさかな引っ越し	矢作新報
2012.11.7	森の健康度改善	読賣新聞
2012.11.9	第8回「矢作川森の健康診断」報告会	矢作新報
2012.11.30	逢妻女川の環境活動いろいろ 市民と企業が報告	矢作新報
2012.12.14	生物多様性シンポ自然観察の森で	矢作新報
2013.1.1	新春対談 豊田市長「自然共生社会」語る	矢作新報
2013.1.25	豊田市矢作川研究所シンポジウム	矢作新報
2013.2.1	豊田市矢作川研究所 第18回シンポに寄せて 高度水利用と河川生態系 矢作川は「両立」を追って	矢作新報
2013.2.1	コンクリート剥がし第2弾	矢作新報
2013.2.3	矢作川利用を考える 豊田シンポで歴史や現状紹介、討論も	中日新聞・豊田版
2013.2.6	農業用排水路に生物のすみか 底のコンクリを除去	中日新聞・豊田版
2013.2.8	高度な利水どう調整？ 矢作川研究所シンポジウム	矢作新報
2013.3.1	ぶんや日記～矢作川研究所シンポジウム「矢作川の水を分け合うその妥協はいつ誰が？」	矢作新報
2013.3.15	ダム研究会がスタート 中電・漁協・市研究所が研究費を負担	矢作新報
2013.4.5	天然繁殖と地産地消で持続可能な河川漁業路線に成功	矢作新報
2013.4.12	やはぎウィークリー 羽布ダム竣工50周年によせて	矢作新報
2013.5.10	稚アユ びちびち 豊田の矢作川遡上ピーク	中日新聞・県内版
2013.5.10	いつ上るの？ 今でしょ	朝日新聞
2013.5.10	矢作川明治ダム アユ遡上60万尾突破	矢作新報
2013.5.12	豊田で「川会議」基調講演で指摘 木材価格の低迷→間伐されず→保水力減	朝日新聞・三河版
2013.5.31	7つのダム越え 矢作川全域に海の恵み 天然アユ110万尾突破	矢作新報
2013.6.25	昆虫ガ類 豊田で新種続々	中日新聞・豊田版
2013.6.28	三河だより 生き物	中日新聞・豊田版
2013.6.28	いろんな魚 釣っという	矢作新報
2013.7.1	川の環境などツアーで学ぶ 豊田子ども会議	中日新聞・三河版
2013.7.19	海と河川を往来する回遊生物たちは ダム障害で降海困難 旧式ダムは改良を！	矢作新報
2013.8.5	笑劇派のこちらパトロール隊2「矢作川を再発見！」	ひまわりネットワーク
2013.9.6	市民の「矢作川祭り」実現 第5回矢作川天然アユ感謝祭に市民どっと	矢作新報
2013.11.1	洪水のプラス効果は…… 矢作ダム1千トン放流を検証Ⅱ	矢作新報
2013.11.8	学校裏の矢作川も教育現場 五感教育の豊田東高校	矢作新報
2013.12.6	外来生物の駆除モデルに 民・官・学でアカミミガメ対策	矢作新報
2013.12.13	昆虫界の頂点に異変 豊田市内 外来カマキリ急増	矢作新報
2013.12.20	やはぎウィークリー 矢作川“青春時代”開いた人 福留脩文さんの早い死を悼む	矢作新報

日付	タイトル・内容	媒体
2014.1.10	矢作川研究所 20 周年 2 月 1 日記念シンポ	矢作新報
2014.1.24	高橋～久澄橋で伐採完了 竹林伐採跡に雑木林誕生	矢作新報
2014.1.30	矢作川の環境保全 20 年 豊田の「研究所」1 日、シンポで歩み回顧	中日新聞・ 豊田版
2014.1.31	矢作川研究所 20 周年シンポ JA あいち豊田ホールで明日	矢作新報
2014.2.1	矢作川研が 20 周年 きょう記念シンポ	毎日新聞
2014.2.2	矢作川研 成果と提案 豊田市、設立 20 周年シンポ	中日新聞・ 豊田版
2014.2.7	豊田市矢作川研究所 20 周年シンポ 流域の合意形成の核たれ	矢作新報
2014.3.28	矢作川の天然鮎 明治ダムに到着	矢作新報